令和2年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉　川　大　学

大学FD委員会

大学院FD委員会

は じ め に

—FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をミクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。ミクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はミクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、ミクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。令和 2 年度は新型コロナウィルス禍で従来のアクティブラーニングによる授業方法での実施は難しく、オンライン授業に強いられる中、各学部で、また教学部が中心となって授業改善に取り組んできました。今回はそういった事例も報告いたします。今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長
教 学 部 長　中 村 好 雄

目　　次

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
（１）　委員会の目的 1
（２）　委員構成 1
（３）　今年度の活動計画および課題 2
（４）　活動状況 2
（５）　活動の成果 4
（６）　今後に向けて 5
２．学部の活動 7
３．教師教育リサーチセンターの活動 63
４．ELF センターの活動 67
５．ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」 81

Ⅱ　大学院 FD 活動報告

各研究科の活動 118

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会
（１）　研修プログラム内容 130
（２）　配付資料・参考資料 131
（３）　実施の成果 132

参考資料

１．大学 FD 委員会の議事内容 135
２．大学院 FD 委員会の議事内容 137
３．「授業評価アンケート」様式 138
４．玉川大学 FD 委員会規程 140
５．玉川大学大学院 FD 委員会規程 142

※本文中の記載内容について

・役職名称は、令和 2 年度当時の記載とした。

Ⅰ　大学 FD 活動状況と今後の計画

１．大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

（１）委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

① 玉川大学の教育理念を実現するため。
② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
③ 大学大衆化時代に対応するため。
④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

（２）委員構成

＜大学 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学部	長谷川洋二
委員	農学部	肥塚信也
委員	工学部	黒田潔
委員	経営学部	長谷川英伸
委員	教育学部	高平小百合
委員	芸術学部	林三雄
委員	リベラルアーツ学部	梶川祥世
委員	観光学部	法島正和
委員	ＥＬＦセンター	チャイクル，ラサミ
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子
事務担当	教学部授業運営課長	島田健二

＜大学院 FD 委員会＞

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教学部長	中村好雄
委員	文学研究科人間学専攻	宇井美代子
委員	文学研究科英語教育専攻	工藤洋路
委員	農学研究科資源生物学専攻	有泉高史
委員	工学研究科システム科学専攻	加藤研太郎
委員	工学研究科機械工学専攻	小酒井正和
委員	工学研究科電子情報工学専攻	森文彦

委　　員	マネジメント研究科マネジメント専攻	神　谷　　渉
委　　員	教育学研究科教育学専攻	山　口　意　友
委　　員	教育学研究科教職専攻	谷　　和　樹
委　　員	脳科学研究科脳科学専攻/心の科学専攻	酒　井　　裕
事務担当	教学部教務課長	光森多佳子
事務担当	教学部授業運営課長	島　田　健　二

（３）今年度の活動計画および課題

Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2020 に沿って取り組んだ。また、新型コロナウイルス感染症の対応に伴い、遠隔授業の実施に関する研修を計画した。

１．各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始
アクティブ・ラーニング、また変化する高等教育に沿ったテーマの研修会を開催し、学外にも公開していく。ティーチング・ポートフォリオを全専任教員に活用してもらうための研修会等、方策を考え、実施していく。

２．双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
内容をより精査し、更新を行っていく。

３．全授業科目の成績評価分布を公表する
シラバス作成マニュアルの内容を段階的に明確に、厳格にしていく。

４．FDer の養成プログラムの作成と実施
FDer の役割を明確にする。

５．玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
「Tamagawa Vision 100」の内容を確認し、本学の Credo として活用できる項目を検討する。

（４）活動状況

＜令和 2 年度＞

6 月 4 日	第 1 回　大学 FD 委員会　開催
7 月 9 日	第 1 回　大学院 FD 委員会　開催
7 月 20 日	第 2 回　大学 FD 委員会　開催
11 月 28 日	令和 2 年度大学 FD 研修会「遠隔授業の事例発表」開催（オンライン） 事例発表①「一年次セミナー101 におけるオンライン授業の試み」 （リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 佐藤 由紀 教授） 事例発表②「農学部の遠隔授業事例紹介」 （農学部生産農学科　肥塚 信也 教授） 事例発表③「Zoomを用いたオンライン双方向形式によるプログラミング授業と遠隔チューターの実践事例」 （工学部ソフトウェアサイエンス学科　田中 昂文 助教） 事例発表④「Bb、Zoomによる経営学的考察力の育成 - コロナ禍でのヒューマンイノベーションを考える」

	（経営学部国際経営学科　木内 正光 准教授） 事例発表⑤「Zoomを用いた一年次セミナー101の授業」 （教育学部乳幼児発達学科　鈴木 美枝子 教授） 事例発表⑥「ZoomとBlackboardを用いた遠隔プロジェクト授業実施について」 （芸術学部メディア･デザイン学科　リー，ジョナサン F 教授） 事例発表⑦「Zoom等の使用による国際共修授業：Collaborative Online International Learning (COIL)の事例」 （文学部英語教育学科　髙城 宏行 准教授） 事例発表⑧「Blackboardをベースとしたオンデマンド型講義の実践」 （観光学部観光学科　中村 哲 教授） 事例発表⑨「リモート学習コンテキストでのコンピューター支援テスト」 （ELFセンター　ミリナー，ブレット 准教授）
1 月 15 日	第 3 回　大学 FD 委員会　開催
2 月 19 日	令和 2 年度　大学教育力研修　開催（オンライン） 基調講演「これからの大学教育～with コロナを乗り超えて」 （講師：筑波大学・広島大学・桜美林大学名誉教授　山本眞一氏） 分科会「遠隔授業の事例発表およびグループセッション」 A ①「遠隔授業の事例報告―オンデマンド型の一例として―」 （文学部国語教育学科　冨士池 優美 准教授） ②「Zoom と BlackBoard を活用したオンライン教職実践演習」 （教育学部教育学科　松本 由美 准教授） ③「規模に対応するオンライン科目への異なるアプローチ：大人数クラスと少人数クラスとの比較を通して」 （リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 山田 亜紀 助教） B ①「BB を利用した授業の組み立て方」 （農学部先端食農学科　中村 純 教授） ②「一年間の遠隔授業を振り返って」 （工学部ソフトウェアサイエンス学科　山﨑 浩一 教授） ③「合唱」：声を合わせる「心」を育てた遠隔授業 （芸術学部芸術教育学科　渡辺 明子 准教授） C ①「会計科目における遠隔授業の実践」 （経営学部国際経営学科　伊藤 良二 教授） ②「Zoom を活用したオンライン授業」 （観光学部観光学科　谷脇 茂樹 准教授）

	③「Enhancing clarity and student engagement in online synchronous teaching：Overcoming challenges and exploring opportunities”（オンライン教育における明瞭さと学生関与の強化：課題の克服と機会の探求)」 （ELF センター　ディモスキ，ブラゴヤ 准教授）
3 月 18 日	令和 2 年度　新任教員研修会　開催
3 月 23 日	第 4 回　大学 FD 委員会　開催

その他、学生による授業評価アンケート、第三者によるシラバス確認を計画どおりに実施した。なお、授業評価アンケートは、全科目を対象として令和 2 年度春学期より本学の教学システム（UNITAMA）のアンケート機能を利用し、Web アンケートにて実施した。アンケート結果については、各教員が UNITAMA にて確認できるほか、「個人レポート」として集計結果を対象教員に配付した。また、大学 FD 委員会にて科目別集計結果と US 科目・専門科目の学部比較を資料にまとめて報告し、各学部での授業改善の取組に活用できるようにした。なお、各学部及び US 科目のアンケート結果は本学ホームページにて公開している。

シラバスは、A（履修登録に資するために公開するもの）と B（履修登録をした学生のみ見られるもの）に分け、シラバス A については科目開講年度の前年度 1 月～2 月に全科目を確認、シラバス B については、春学期科目は前年度の 3 月、秋学期科目は当該年度の 7 月～8 月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、それ以外の科目については教学部教務課が担当した。なお、今年度はシラバス作成マニュアルの「授業外指示（課題等)」において、事前・事後学修に必要な時間数の記載や課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法等の記載を見直し、更新した。

令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応により、春学期から急遽、遠隔授業を実施することとなった。そのため、当初計画していた対面によるワークショップ形式の研修に替え、11 月 28 日に Zoom を利用したオンラインによる FD 研修会「遠隔授業の事例発表」を開催した。また、2 月 19 日開催の大学教育力研修においても全教員を対象としてオンラインによる「遠隔授業の事例発表およびグループセッション」の分科会を開催した。詳しくは「（５）活動の成果」にて後述する。

ティーチング・ポートフォリオを全専任教員に活用してもらうための研修会等、方策については検討したが、令和 2 年度内の実施には至らなかった。次年度の実施に向けて引き続き検討を進める。

（５）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発な FD 活動を行うことができた。

また、前項のとおり、コロナ禍における授業形態の変更を背景に「遠隔授業の事例発表」をテーマとした研修会等を開催し、遠隔授業の実践に資する情報を共有することができた。

11月28日に実施した大学FD研修会では、遠隔授業における授業設計のポイントや教員・学

生が抱える課題、参考となる取組、ノウハウを教員間で共有することを目的として、8学部及びELFセンターから計9件の事例を紹介した。本学教員の希望者を対象としたオンラインによる研修で、97名の参加があった。受講アンケートにおいては研修内容について「とても充実していた」が51.3%、「充実していた」が46.2%であり肯定回答が97.5%であることからも、遠隔授業の実践に関する情報を共有する有意義な機会であったと考えている。また、アンケートには「遠隔授業におけるアクティブ・ラーニング、PBLの実践例を知りたい」、「対面とオンラインで同時に行う授業方法の取り組み事例を聞きたい」といった授業方法に関する要望や「Zoom だけでなくTeamsの事例を取り上げて欲しい」、「iPadをPCに同時につないで手書きでコメントしながら投影できる方法などいろいろな手法を学びたい」といった技術面に関する要望、「発表が終わった後に発表者同士が話をするなどの場面があった方がよかった」という研修会の実施方法についての意見も寄せられた。

これらの意見も参考としながら計画した2月19日開催の大学教育力研修では、筑波大学・広島大学・桜美林大学名誉教授　山本眞一氏をお招きし、「これからの大学教育～withコロナを乗り超えて」をテーマとした基調講演と「遠隔授業の事例発表およびグループセッション」の分科会を実施し、405名の参加があった。基調講演では、大学教育の意味や内容が、この30年の社会の動きと大学改革の中で大きく変わってきたこと、また、コロナ禍を契機にその変化はますます激しくなろうとしていることを背景に、①大学が学生を選ぶのではなく、学生が大学を選ぶ、②卒業証書が形式的な卒業証明ではなく、修得能力を証明する学位になる、③デジタル化が、キャンパス・教室・時間割など従来の枠組みを超えて、大学教育を拡張しようとしている、などの変化を捉えつつ、Afterコロナ時代における新しい大学教育システムの構想とそのための準備の必要性について講演いただいた。また、分科会は、3グループに分かれ、各グループ3名ずつの遠隔授業の事例発表の後、グループセッションを行い、活発な意見交換が行われた。受講アンケートでは、基調講演について「とても充実していた」が34.8%、「充実していた」が50.9%であった。分科会についても「とても充実していた」が38.7%、「充実していた」が45.0%であり、8割以上が肯定回答であった。また、「オンライン授業の進め方や留意点、学生へのフードバックの方法と重要性等、有用な情報を得ることができ、とても参考になった」、「新年度の授業展開に関するヒントを得ることができた」などの感想が寄せられ、今後の授業実践において研修会での情報が活用されることが期待される。

（６）今後に向けて

令和 3 年度においては、すでに対面で実施している実技、実験、実習の科目に加え、必修科目や演習科目を対面で実施し、開講科目の 70%以上を対面・ハイブリッド授業とする予定である。学修環境の整備を行い、感染防止の対策を徹底した上で対面授業を増やす計画ではあるが、社会における感染状況により、いつでも遠隔での実施ができるよう準備を進める。FD 活動においても社会情勢を考慮しながら、授業改善に資する研修会を計画、実践する。

具体的には、令和元年度まで AP として実施してきた、アクティブ・ラーニングをテーマとしたワークショップ、ルーブリック指標による評価に関するワークショップ、非常勤教員対象研修会等、各種研修会及び令和 2 年度に実施した授業実践の事例紹介等を令和 3 年度においても継続して開催していく。なお、大学教育力研修については次年度以降も学内の教員

のみを対象とするだけでなく、学外にも公開する予定である。

FDer については、各学部に配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、今後 FD をどのように進めていくのか、FDer にどのような役割を担ってもらいたいのかを明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、これまでの各学部の FD 担当、大学 FD 委員の役割と、新たな FDer の役割の違いを明確にすることについて、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

ティーチング・ポートフォリオの活用については、学内ポータルサイトのティーチング・ポートフォリオの導入により全専任教員が作成できる体制は整っているが、その入力率向上、活用の拡大方策については、引き続き検討が必要である。

アクティブ・ラーニング ハンドブックは、令和元年度に本学ホームページ上に公開することができたが、遠隔授業やハイブリッド型授業におけるアクティブ・ラーニングなどを含め、今後はアクティブ・ラーニングの事例内容を必要に応じて見直し、更新していく。

シラバスについては、作成マニュアルをわかりやすく修正したが、シラバス記載内容の厳格化についてはカリキュラムの内容にあわせた確認が必要であり、今後、どのように確認を行い、厳格にチェックを行うかについて、引き続き検討する必要がある。また、授業外指示（課題等）の事前・事後学修に必要な時間数の記載欄等、シラバスのフォームの見直しについても検討する。

最後に玉川大学教職員 Credo の草稿の作成については、「Tamagawa Vision 100（2029）」の「教職員の行動指針」を本学の Credo として活用することを計画していたが、「Tamagawa Vision 100 (2029）」の策定が延期となったことにより、次年度も引き続き検討を行う。

２．学部の活動

令和２年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

学部	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学部研修会	学生による授業評価アンケートの実施	
				実施時期	公表
文 学 部	6 名	1 回	学内実施	春学期末 秋学期末 （通信教育課程は スクーリングの都度）	学内外 （本学 HP）
農 学 部	9 名	2 回	学内実施		
工 学 部	6 名	2 回	各学期終了後 学内実施		
経 営 学 部	5 名	2 回	学内実施		
教育学部 （通信教育課程含）	7 名	2 回	学内実施		
芸術学部	7 名	2 回	学内実施		
ﾘﾍﾞﾗﾙｱｰﾂ学部	5 名	2 回	学内外実施		
観光学部	5 名	2 回	学内実施		

※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生による授業評価アンケートは別途実施。
※令和２年度春学期より、授業評価アンケートは Web にて実施。

§　文学部

１　FD 活動への取組理念・目標

大学に対する社会からの期待とニーズの多様化と大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による教育力の向上によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力することを文学部の FD 活動への取組理念とする。就労意識の変化に対応した学生へのキャリア教育ないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では新設学科への移行期を終え、新しい文学部を発展させるため、FD の重要性はより増している。

このような現状の下、一人ひとりの教員が学部のディプロマ・ポリシー（以下 DP）に則り FD 活動に臨み、教員全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現することを目標としている。

２　学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と、国語教育学科、英語教育学科の FD 担当（国語教育学科は文学部 FD 委員が兼務、英語教育学科は英語教育学科主任が兼務）の合計 6 名で文学部 FD 委員会を組織している。

３　令和２年度の活動内容

（1）研修会

文学部では以下の研修会を実施した。

「DP とカリキュラムをどのように点検するか」

①　概要（目的を含む）

次回認証評価に備えて国語教育学科および英語教育学科の DP とカリキュラムの点検に役立てることを目的に、令和 3 年 3 月 22 日（月）、大学教育棟 2014 793 会議室にて実施。所要時間 30 分。

② 到達目標

参加者は担当講師の講演を聴き、認証評価のポイントを確認できる。

参加者は自分の所属学科の DP とカリキュラムの課題を指摘することができる。

③ 活動内容

「DP とカリキュラムをどのように点検するか ― 第三期認証評価のポイントから―」と題した講演を教育情報・企画部 EQA 課 根本明日香課長補佐より聞く。

次回（第 4 期）認証評価の時期を控え、担当講師より第 3 期認証評価のポイント（本学は 2018 受審済）や直近の答申や報告（「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」「教学マネジメント指針」）に基づいて今後予想される点検のポイントについて説明を聞くことにより、文学部国語教育学科および英語教育学科の DP とカリキュラムの課題について教員間で共有する。

④ 評価

実施日がウィンターセッション期と重なり、講義担当のためやむを得ず参加できな

かった者を除けば、所属教員 100%の参加を得た。会の終了後、参加者からは、講師の平明かつ要点をおさえた説明により、「認証評価者の視点について理解が深まった」「自己改善機能の点検をより丁寧に行っていく重要性を学部所属教員間で確認するよい機会となった」など好意的な感想が多く寄せられた。次年度の組織的活動につなげていきたい。

（2）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

文学部が開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。令和元年度までは英語教育学科単独で紙ベースのものを実施していたが、令和 2 年度は国語教育学科と英語教育学科が連携し、文学部として統一した調査項目を用いて、コロナ禍ということもあり UNITAMA を活用して実施した。個々の教員が、担当する授業における学生の学びや感想を振り返り、次年度に改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

昨年度に引き続き、教員の意図・認識と学生の受け止め方・実態との間にどのような違いがあるかを検証し、次年度の授業改善に具体的に活かすことが目標である。

③ 活動内容

実 施 時 期：春学期および秋学期の学期末

対 象 科 目：文学部の教育課程表にある科目のうち、US 科目を除く原則すべての科目で実際に開講されたものを対象とした。

学期	対象科目数	対象者数	回答者数（延べ数）	回答率
春学期	87	2,341	1,464	60.2%
秋学期	94	2,466	1,025	41.6%

集　　計：教学部教務課を通じて DTS に委託し、各クラス別、学科全体、学科カテゴリー別、学部共通の 4 レベルで集計した。

ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ：対象科目の各授業担当者は、クラス別集計結果を各自の UNITAMA で、授業ごとの結果を確認することができる。学科全体、学科カテゴリー別、学部共通の集計結果は Blackboard を通して共有されている。クラス別を除く全ての集計結果は大学ホームページ上に公開予定である。加えて春学期は、授業評価アンケート集計結果を踏まえて各授業担当者に授業改善のための振り返りアンケートを実施した。

④ 評価

国語教育学科：

2 学期を比べてみると、学生の回答率は秋学期における低下が顕著である。学期末に多数のアンケートが集中することに一因があるかもしれないが、検討が必要であろう。

各領域での総合評価に大きな違いはない。ただ、キャリア関係分野が他の分野と少々

異なる傾向がある。こうした科目をオンラインで行った結果であるかどうか、科目（必修）そのものの特性によるのかは検討の余地がある。

英語教育学科：

アンケート結果の集計を概観すると、春学期と秋学期で同様の傾向が見られた。「総合評価」では、5.0 満点中春学期・秋学期ともに平均 4.1 となっており、全体的によい評価が得られたと考えられる。項目別に見ても、平均 4.1～4.4 が中心である。その中で、「授業外学修」の項目は春学期・秋学期ともに平均 3.0 ということで、授業 1 回あたりに対する授業外学修時間が 2 時間～3 時間未満とやや少なめである点は課題である。他学部でも同項目は 2 点台が多く、全学的な課題と見ることができる。

また「シラバス」の項目も春学期が平均 3.6、秋学期が平均 3.5 と他項目と比べると低めであり、学修を進めるにあたり、学期を通じてあまりシラバスを参考にしていない様子が窺える。一方で、授業は通常その都度次回に関する情報を確認していくのが一般的であるため、特にシラバスを意識的に参考にする必要がないという可能性も考えられる。あるいは、意識しないながらもシラバスを参照することになっている可能性も考えられる。この数字が何を意味するかは、解釈の難しいところであると言える。

シラバスに関連する項目には他にも「目標達成」の項目があり、春学期・秋学期ともに平均 3.9 ということで低くはないが、他の 4 点台の項目よりはやや低い。シラバスに示されている到達目標が達成できたと思うかを問う項目だが、シラバスにある到達目標を授業ごとに十分に確認・把握しているかというと、容易ではないことが考えられる。そうだとすると、この数字も何を意味するのかは解釈が難しいものと言える。また「授業計画」の項目もシラバス関連であるが、こちらは春学期・秋学期ともに平均 4.1 とよい評価で、全体的にシラバスに沿って授業が展開されたと考えることができる。

春学期・秋学期ともに最も高い平均 4.4 を示したのは「意欲（意欲的に取り組めたか)」と「熱意（教員の授業・教育に対する熱意)」の 2 項目であった。また、両学期とも「興味（興味をもって取り組めたか)」の項目では 4.3 を、その他の項目でもほとんどが 4.2 以上であった。このことから、学生は総じて興味を持って意欲的に授業に取り組むことができたようであり、それに対して、教員も熱意を持って工夫しながら授業を行うことで応えることができたことが窺える。これは、コロナ禍の中で初めて遠隔授業を中心に授業が展開されたことを考えると、非常に有意義な評価であったと考えられる。

（5）学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取組方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

今年度は当初本項目の計画を断念していたため到達目標を設定しなかった（参考：

令和元年度「文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する」)。

③ 活動内容

1. 目白大学公開講座「アフターコロナを見据えた大学のアクティブ・ラーニング」(目白大学高等教育研究所主催)
   開催日時：令和 3 年 2 月 10 日（水）13:00~15:00
   会場：オンライン開催（Zoom／ウェビナー）
   派遣：2 名（国語教育学科）
2. 令和 2 年度 大学基準協会大学評価研究所大会「学習成果を巡る今とこれから―達成度評価のあり方を問う―」（大学評価研究所主催）
   開催日時：令和 3 年 3 月 2 日（火）13:00~16:00
   会場：オンライン開催（Zoom）
   派遣：1 名（国語教育学科）
3. 日本高等教育開発協会 10 周年特別企画 FD 担当者フォーラム「FD の 10 年 変わるべきもの、変えてはいけないもの」（日本高等教育開発協会主催）
   開催日時：令和 3 年 3 月 14 日（日） 13:00~17:20
   会場：オンライン開催（Zoom／ウェビナー）
   派遣：1 名（国語教育学科）
4. 第 4 回大学評価研究所「公開研究会」大学の質保証の行方を考える（大学評価研究所主催）
   開催日時：令和 3 年 3 月 15 日（月）14:00~16:15
   会場：オンライン開催（Zoom）
   派遣：1 名（国語教育学科）
5. 大学・専門学校 教職員対象オンライン配信セミナー「魅力的なオンライン授業の創り方」（株式会社ナガセ ビジネススクール本部 東進ハイスクール大学事業部主催）
   開催日時：令和 3 年 3 月 25 日（木）／26 日（金）15:00~16:40
   会場：オンライン開催（Zoom／ウェビナー）
   派遣：2 名（3 月 25 日 国語教育学科 1 名：3 月 26 日 英語教育学科 1 名）

③ 評価

年度当初コロナ禍で学外セミナーへの教員派遣は不可能と判断し活動計画に加えなかったが、Zoom による参加可能なオンラインセミナーが学外で開催されるようになったことに加えて、相当数の学外セミナーが無料で参加可能であったことより、学部内で学外セミナー開催情報の提供を行うことで参加者を募った。これにより上記 5 つの学外セミナー（全て Zoom によるオンライン）から情報収集を行った。参加により得た知見を今後学部学科の FD 活動に還元していきたい。

4 昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

1）文学部所属教員が組織的に学部の課題を考える FD 研修会を実施することができた。
達成度：100%

2）文学部全体での授業評価アンケート実施に向けたシステム構築という課題は、コロナ禍で思いがけず全学的な授業評価アンケート実施に向けたシステム構築の流れの中で予期せぬ速さで実現する運びとなった。達成度：100%

５　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

従来の活動の継続とその活性化をさらに推進する。とりわけ次の 2 件を来年度の主要課題としたい。

1　文学部 FD 研修会の機会を設けて、学部の課題を検証することを継続的に行っていきたい。

2　文学部全体で実施する授業評価アンケートを今後効果的に活用し、学部内の授業改善を組織的に行えるシステムをさらに充実させていく。

§　農学部

1　FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、学生の学修レベルを農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善、研修会への積極的な参加を、大学 FD 委員会と協調して促進する。これまで、農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を進めてきた。本年度は新型コロナウィルスによる遠隔授業の実施となり、遠隔授業特有の課題も重要となった。このため、今年度は専任教員および非常勤講師は学生による授業評価アンケートを実施し、授業改善への意識を高めるとともに、遠隔授業の進め方やスキルの共有化を目標として加える。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を、オンラインをふくめて実施、コロナ禍での学生の学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高めるとともに、社会情勢に臨機応変かつ適切に対応可能な意識をもつ事を進める。これらを通じて、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、総合農学研究センター副主任および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

3　令和元年度の活動内容

（1）研修会

① 概要（目的を含む）

農学部では以下の研修会を実施した。ただし、今年度については、すべてオンラインで実施した。

1)「新型コロナウィルスと大学（庭野裕恵教授）」令和 2 年 9 月 11 日
2)「心のケアの必要な大学生の指導について（春口洸希氏）」令和 2 年 9 月 17 日
3)「遠隔授業事例紹介 1（浅田真一教授）」令和 2 年 10 月 29 日
4)「遠隔授業事例紹介 2（水野宗衛教授）」令和 2 年 11 月 5 日
5)「遠隔授業事例紹介 3（原百合恵助教）」令和 2 年 11 月 27 日
6)「遠隔授業事例紹介 4（友常満利助教）」令和 2 年 12 月 3 日
7)「遠隔授業事例紹介 5（佐治量哉准教授）」令和 2 年 12 月 10 日
8)「遠隔授業事例紹介 6（大塚みゆき准教授）」令和 2 年 12 月 17 日

全ての研修は農学部、農学研究科全教員を対象とし、大学生、大学院生への研究と教育活動における適切な指導方法、障がいを抱えた学生への配慮や適切な対処、学生の生活環境における注意点について学ぶことを目的に実施した。また、遠隔授業事例紹介については、農学部 FD の Teams を作成し、その中に事例紹介のプレゼンテーションを動画としてアップロードした。このことで、研修会に欠席した教職員（非常勤を含む）が、遠隔授業実施例を閲覧できるようにした。

② 到達目標

1) 新型コロナウィルス感染リスク下での重要事項を共有する。

2) 心のケアが必要な学生に対して、適切な判断ができるようになる。

3) から 8) 遠隔授業作成における目的、方法、スキルを各教員が紹介し、現状の把握とより良い授業作成のポイントを抽出する。

③ 活動内容

1)では、新型コロナウィルス感染リスク下での農学部での教育・研究活動を遂行する上で考慮すべき事項を共有するために、新型コロナウィルスの医学的な特徴、大学の教育・研究活動時に３密を回避するための必要事項、学生の健康管理について、医学的な見地をふくめ現状を把握するとともに、秋学期からの一部対面授業にむけた対策を議論した。特に、農学部作成のガイドラインの妥当性などについて、秋学期前に議論できたことは非常に有益であった。2)では、対応案件が増加している「心のケアが必要な大学生の指導」を進めるために、心の問題として捉えられる症状、学習及び発達障害等を持つ学生と教職員が向き合う際のポイント、プライバシー保護や大学と医療機関との協力体制の構築について、学校医からの事例紹介とその医学的根拠について話題提供を頂いた。その後、農学部で生じている案件についての対応方法についてのアドバイス、議論を進めた。大学と医療機関との協力体制については、まだまだ難しい点も多く、今後の課題である事が認識された。一方、学生へ心のケアに関する重要事項の教育を展開するアイデアは斬新であると考えられた。3) から 5)については、毎回 10 分程度で各教員の遠隔授業の実例紹介を行い、その後、フリーディスカッションを進める事で、教員間での遠隔授業を進める上での悩みやアイデア交換が活性化されたと思われた。

④ 評価

いずれの講習会についても、開催後のアンケート調査などでは、各研修会の到達目標設定について好意的な意見が多く、本研修会の目的がファカルティー内で理解されていると評価できる。

（２）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、卒業研究とそれに関係する演習科目を除くすべての講義科目と実験・実習科目について授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

授業評価アンケートを集計後､結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

令和 2 年度の授業評価アンケートは、UNITAMA を用いて Web ベースでアンケートを行った。総合評価によると、前年度の評価値より 0.2 ポイントほど減少している。このことは、遠隔授業を中心とした学修であるために、例えば実験実習科目のような、実技を伴う科目について評価が難しい部分を反映している可能性が示唆される。しかし、前年度とは異なりほぼすべての科目でのアンケート実施であったこと、UNITAMA でのアンケートに伴い、設問項目の変更があるため、数値の比較のみの分析ではなく、個別の内容を分析する必要があると思われた。この観点から、各質問項目について分析したところ、例えば、春学期については、教材の使い方や遠隔授業の通信の問題などについての指摘事項が見られたが、秋学期には、このような指摘が減少している。従って、教員の遠隔授業のスキルアップや通信環境の構築が進んだと考えられ、教員・学生それぞれが改善を進めていることが示唆される。次年度も、遠隔授業が展開されるので、この点、継続的に分析する必要があると思われた。一方、回答率が春学期（講義全体 71.1%）に比べて秋学期（46.1%）が著しく減少しており、アンケート実施について工夫が重要である。

表．令和元年度の授業評価アンケート集計結果（3 学科のアンケート実施科目すべて）

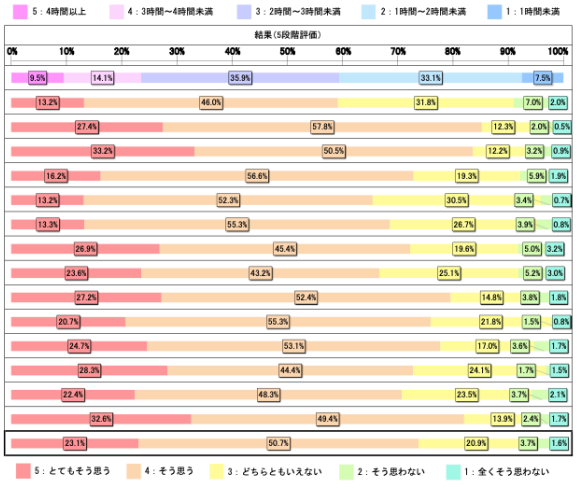
（春学期-講義科目）

令和2年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

農学部(講義)全体　　履修者数： 3,036 名　　回答者数： 2,158 名　　回答率： 71.1 %

		設問	農学部(講義)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.8
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.8
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7
	7	学士力	総合的にみて、シラバスに記載されている「本授業を通じて修得できる力」は修得できましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	9	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.9
	10	視覚	遠隔での授業は見やすかったですか	3.8
	11	教材	教材(資料、動画含む)の使い方は適切でしたか	4.0
	12	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	3.9
	13	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.0
	14	質問対応	遠隔での質問に適切に対応してくれましたか	4.0
	15	環境	遠隔授業に集中しやすい環境を整えてくれましたか	3.9
	17	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1
総合評価				3.8

平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数(小数点第2位を四捨五入)



（春学期-実験・実習科目）

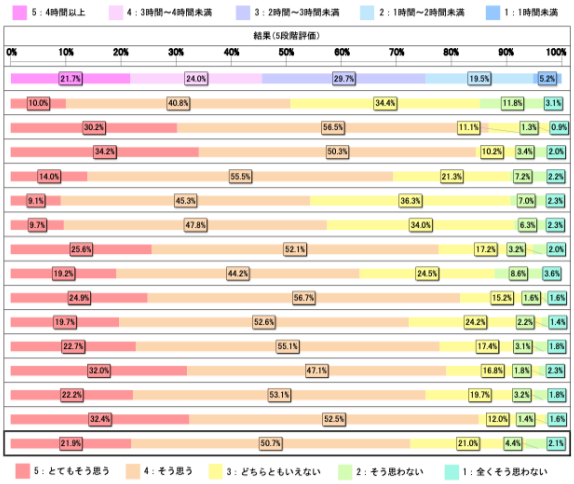
令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

農学部(実験実技実習)全体　　履修者数：　727 名　　回答者数：　559 名　　回答率：　76.9 %

		設問	農学部(実験実技実習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	3.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	3.4
	3	意欲	4.1
	4	興味	4.1
	5	理解	3.7
	6	目標達成	3.5
	7	学士力	3.6
教員の授業の進め方に関する設問	9	説明	4.0
	10	視覚	3.7
	11	教材	4.0
	12	授業計画	3.9
	13	時間	3.9
	14	質問対応	4.0
	15	環境	3.9
	17	熱意	4.1
総合評価			3.8

総合的にみて、シラバスに記載されている「本授業を通じて修得できる力」は修得できましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載

平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数(小数点第2位を四捨五入)



（秋学期-講義科目）

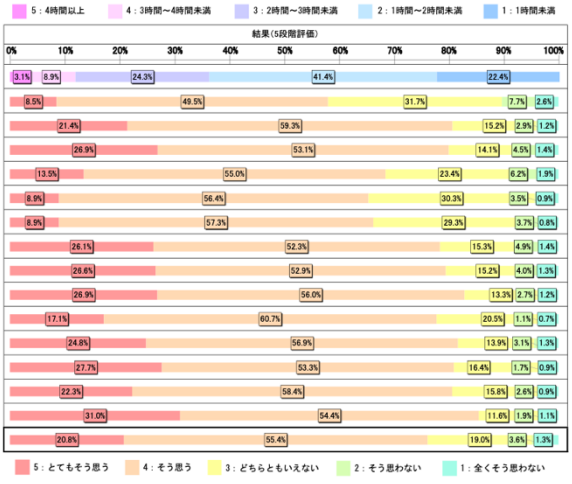
令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

農学部(講義)全体　　履修者数：　3,498 名　　回答者数：　1,611 名　　回答率：　46.1 %

		設問	農学部(講義)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	3.5
	3	意欲	4.0
	4	興味	4.0
	5	理解	3.7
	6	目標達成	3.7
	7	学士力	3.7
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	4.0
	9	視覚	4.0
	10	教材	4.0
	11	授業計画	3.9
	12	時間	4.0
	13	質問対応	4.1
	14	環境	4.0
	17	熱意	4.1
総合評価			3.8

総合的にみて、シラバスに記載されている「本授業を通じて修得できる力」は修得できましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載

平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数(小数点第2位を四捨五入)



（秋学期-実験・実習科目）

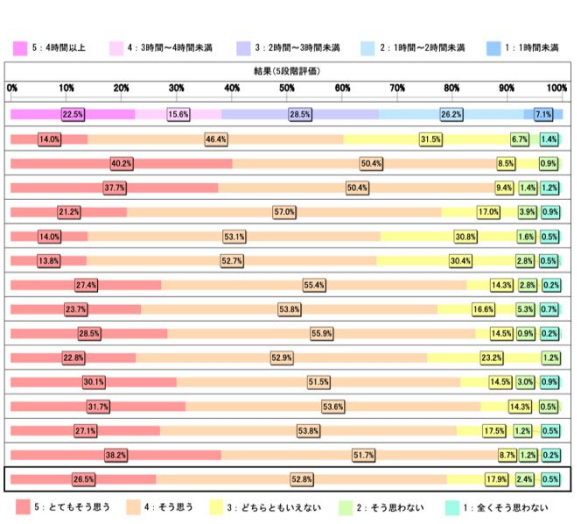
令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

農学部(実験実技実習)全体　　履修者数：　945 名　　回答者数：　435 名　　回答率：　46.0 %

		設問	農学部(実験実技実習)全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	3.2
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	3.7
	3	意欲	4.3
	4	興味	4.2
	5	理解	3.9
	6	目標達成	3.8
	7	学士力	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	4.1
	9	視覚	3.9
	10	教材	4.1
	11	授業計画	4.0
	12	時間	4.1
	13	質問対応	4.2
	14	環境	4.1
	17	熱意	4.3
総合評価			4.0

総合的にみて、シラバスに記載されている「本授業を通じて修得できる力」は修得できましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載

平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数(小数点第2位を四捨五入)



各学科の授業評価アンケート結果は、玉川大学 FD 活動のホームページで見ることができる。
(https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr)

（3）教職員を対象とした公開授業

令和 2 年度は、多くの科目が遠隔授業で進めたため、組織的に公開授業を行うことが出来なかった。しかし、個別の教員間では、Zoom 等に参加者として授業に出席し、遠隔授業サポートや授業後に内容のディスカッションを進めている例が見られた。

4　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

遠隔授業中心となった春学期に令和 2 年度の FD 活動について、主任会・FD 委員と再検討を行い、一部内容の変更を行った。その際、「遠隔授業の手法と学修効果の把握」の研修会については、外部講師に依頼する提案であったが、専任教員による事例紹介を数多く実施することで、より具体的な問題解決に結びつくと判断し、外部講師依頼は行わなかった。しかし、この事例紹介により専任教員間の議論が促進され、課題が十分達成されたと思われる。その他については、ほぼ予定通りに実施、達成できたと思われる。

5　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

- FD に関する各種研修会（学内、学外）への参加の啓蒙的活動
- 障がいのある学生の適切な指導法
- 新カリキュラムの適切な運営と点検
- 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- 遠隔授業、ハイブリット型授業の実施例紹介
- 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取組理念・目標

工学部では、「全人教育の下、人間力を備えたモノつくりの実践的技術者を育成する」との理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを従来通り継続している。それに従い、工学部の FD 活動も継続的に実施されており、以下の「FD 活動への取組理念・目標」も、昨年度まで報告している内容と変更はない。

年度毎のカリキュラム更新という複雑な状況下において、工学部全教員がそれぞれの責任において、担当する学生の学修の現状を適切に理解し対応することが、工学部全体としての FD 活動への取組理念・目標である。さらに、16 単位キャップ制、および GPA 警告制度における学生の学修状況の分析、その結果と課題の把握と共有、そして次期へ向けてより効果的で充実した指導の在り方の議論・検討等は、工学部の FD 活動への取組理念・目標の継続的再検討に必須である。この課題解決のための工学部 FD 活動は、「工学部 FD 研修会」、「授業評価検討会」、「授業評価アンケート」、および各学科や各専門科目担当教員間で 1 年を通して頻繁に行われている様々な会議体等において恒常的になされている。

今年度は、コロナ禍においても学生の学びを止めないため、遠隔授業の実施方法に関する FD 活動を実施した。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

前述したように、以下の記載事項は昨年度まで報告している内容と変更はない。

これまでの工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムの運用・継続によるものであった。ISO9001 教育クォリティマネジメントシステム運用は平成 15 年度より継続され、その活動はほぼシステム化されていた。各学科主任と教務担当を中心としてそのような自己点検がほぼ完全に周回してきたことは、ISO9001 が滞りなく認証されたことにより明らかである。そこで、平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けたことを最後に、日本規格協会による ISO9001 審査・認証を一旦停止し、ISO9001 運用により培われた工学部独自の自己点検を実施することとなった。つまり、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割について、重要と思われるマネジメントシステムを残した上で、教育クォリティマネジメントシステムとその自己点検実施を運用・継続中である。

以上のように、工学部では全学科において ISO9001 運用とその自己点検実施の流れの中で FD 活動の多くが実施・継続されている。そこでは、学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などが、各学科会、各学科授業評価検討会、教務担当者会、工学部授業評価総合検討会、主任会、教授会等の組織構成によって相互に確認・補完し、運営されている。

現状では、カリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度・新学科学生動向等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

3　令和 2 年度の活動内容

令和 2 年度工学部 FD 活動計画に沿って、その詳細について以下に記述する。

（3－1－1）工学部 FD 研修会

① 概要

工学部最重要 FD 活動の一つであり、春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）に開催される。報告担当になった教員の話す内容の設定は自由である。型にはまった内容ではなく、各教員が自らの考えるところを創造的に自由に報告し、そこから活発な議論が生まれることが期待されている。

② 到達目標

工学部教員団が、全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、教員の自己省察に資する内容となること、そして、工学部としての将来の発展のための活発な議論が生まれること、が到達目標である。

③ 活動内容

実施日：春学期　10 月 15 日

秋学期　 3 月 11 日

報告内容はまとめ冊子に詳しい。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）に配布されるまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・FD 委員において保管）の目次を図 1 および図 2 に示す。

④ 評価

配布される「発表資料と発表者による解説」には詳細なデータが記載されている。工学部 FD 研修会は教授会の開始 1 時間前から開催されるため、教授会メンバーは全員が出席している。

教務主任による全体総括では、以下の事項が春・秋学期それぞれ報告された。

春学期：

・1 年生の春セメスター警告受理状況：これまで当該学期 GPA1.8 未満であった警告の判定基準が、平成 29 年度入学生より累積 GPA2.0 未満に変更された。工学部全体では警告制度の変更の前後で 1 年生の春セメスター警告受理者数に大きな変化は見られない。

・3 セメスター終了時警告受理学生数の推移：3 セメスターとしては平成 30 年度、令和元年度、令和 2 年度が警告制度改定後の学生である。3 セメスターよりほとんどが専門科目となるため、多くの学生は 3 セメスターで当該学期 GPA を大幅に下げる。その結果、当該学期 GPA が警告判定基準であった平成 29 年度以前では、多くの学生が初回の警告を受けている。一方、累積 GPA となった平成 30 年度以降では、1、2 セメスターで高い GPA を取得していた学生はその恩恵のため 3 セメスターで低い GPA を取っても救われている。3 回連続警告受理者数は警告制度の変更前後で大きな変化は見受けられない。

・5 セメスター終了時までに警告を 1 回以上受けた学生数：平成 27 年度から平成 30 年度までの入学生で 5 セメスター終了時までに警告を 1 回以上受けた人数について、当該学期 GPA で警告判定を行う旧制度では、学部全体で 4 割以上の学生が警告を

受理していたのに対し、累積 GPA で判定するようになってからは 3 割前後に減少した。

・平成 29 年度入学生 5 セメスター終了時累積 GPA：平成 28 年度から平成 30 年度入学生の 5 セメスター終了時における累積 GPA の分布について、警告制度の変更の前後において大きな変化は見られず、極端に GPA の低い学生は在籍していない。

・再入学生の動向：新しい警告制度となってから再入学した 5 名の学生のうち、3 名は再入学後も連続して警告を取り続け、退学している。令和 2 年春セメスターに再入学した学生は、今セメスターで警告を受けていない。新制度で再入学後に警告を受けないのは初めてである。

秋学期：

・警告受理状況と警告退学率：平成 29 年度に変更された「警告」の条件を示し、平成 27 年度から令和 2 年度入学生の各セメスター終了時の警告受理状況を表にまとめた。その結果、新制度となってからの特徴として以下の点が明らかになった。

・2 セメスターでの警告受理者数が減少した。

・3 セメスターでの警告受理者が大幅に減少した。3 セメスターより専門科目が増え、多くの学生が当該学期 GPA を落とす。新制度の累積 GPA になってからは 2 セメスター終了時までにある程度の GPA を取っている学生は、3 セメスターの当該学期 GPA が低くても累積では 2.0 を上回り、警告を受けないことが主な理由である。

・6 セメスター終了時までの警告制度による退学処分者が減った。しかし、6 セメスター終了時の退学処分者数については、新旧制度で大きな違いは認められない。

・平成 27～平成 29 年度入学の退学者数・4 年間での卒業者数：入学者のうち 7 割から 8 割の学生が 4 年間で卒業する。15%前後の学生が退学し、そのうち約半数は警告による退学処分である。

・2 セメスター終了時の累積 GPA 分布：平成 29 年度から令和 2 年度入学生の 2 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムを示している。この時点では、入学年度にかかわらず GPA が非常に低い学生が在籍している。しかし、ここ 2 年はそれ以前と比べ、累積 GPA が 2.0 未満の学生が少なくなっている。

・4 セメスター終了時の累積 GPA 分布：平成 28 年度から令和元年度入学生の 4 セメスター終了時の累積 GPA のヒストグラムを示している。この時期になるとどの年度の入学生も GPA1.0 を下回る学生はほとんどいない。1 年次で GPA が低い学生は退学、あるいは評価 C、F 科目の再履修による GPA の改善の効果が大きい。

・令和 2 年度秋セメスター終了時の累積 GPA 分布－警告受理回数別－：令和 2 年度在校生を対象として、警告受理回数別に、各学年の秋セメスター終了時の累積 GPA 分布を示している。1、2 年生では、累積 GPA2.0 未満の学生数が多いとともに、かなり低い値の学生が多数いるが、学年が上がるに連れ、低い累積 GPA の学生が減少している。

・再入学者の累積 GPA の推移：平成 29 年度の警告制度変更以降に再入学した 5 名の学生の再入学後の累積 GPA の推移である。平成 30、令和元年度に再入学した 3 名の学生は、再入学後の全セメスター終了時に警告を受け、既に全員が退学している。令和 2 年春に再入学した学生は、春学期の GPA は 2.0 を超えた。秋学期で学期 GPA

が 2.0 を下回ったが累積 GPA が 2.0 となりかろうじて警告を免れた。令和 2 年秋に再入学した学生の GPA は 3.0 を超えており，今後が期待される。

⑤　予算措置

工学部 FD 予算に計上したが、遠隔会議方式で実施されたため、使用なし。

2020 年度　第 1 回　工学部 FD 研修会

【解説／まとめ付】

日　時　：2020 年 10 月 15 日（木）17 時 00 分～18 時 30 分
場　所　：Zoom による遠隔会議方式
テーマ　：遠隔授業・GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目　的　：①　１年生においては遠隔授業・GPA・単位取得率による成績の過去との比較
②　２年生以上においては主たる専門科目の遠隔授業・成績動向の過去との比較
③　以上により、遠隔授業を鑑み、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内　容　：①　遠隔授業を鑑みた、学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）
②　遠隔授業を鑑みた、授業評価アンケート結果報告
③　担当教員による実施結果に関する意見交換
到達目標：遠隔授業を鑑み、全学科学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

１．　本年度春学期学習状況分析結果報告

（１）機械情報ｼｽﾃﾑ学科/情報通信工学科　教務担当　宮田 成紀

（２）ソフトウェアサイエンス学科　教務担当　塩澤 秀和

（３）マネジメントサイエンス学科　学科主任　佐藤 健治

（４）エンジニアリングデザイン学科　教務担当　川森 重弘

（５）数学系　マネジメントサイエンス学科　成川 康男

（６）物理学系　エンジニアリングデザイン学科　水野 貴敏

（７）学部全体の状況　教務主任　山崎 浩一

２．　教員による授業実施アンケート結果報告　授業運営課　中山 靖浩

３．　学生による授業評価アンケート結果報告　FD 委員　黒田 潔

４．　春学期の遠隔授業の実施状況等に関する意見交換会

〇．　解説／まとめ（各報告最終頁付記）

以上

図 1　2020（令和 2）年度春学期開催工学部 FD 研修会プログラム

2020 年度　第２回　工学部 FD 研修会

【解説／まとめ付】

日　時　：2021 年 3 月 11 日（木）09 時 00 分～10 時 10 分
場　所　：Zoom による遠隔会議方式
テーマ　：遠隔授業・GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目　的　：①　１年生においては遠隔授業・GPA・単位取得率による成績の過去との比較
②　２年生以上においては主たる専門科目の遠隔授業・成績動向の過去との比較
③　以上により、遠隔授業を鑑み、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内　容　：①　遠隔授業を鑑みた、学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）
②　遠隔授業を鑑みた、授業評価アンケート結果報告
③　担当教員による実施結果に関する意見交換
到達目標：遠隔授業を鑑み、全学科学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

１．　本年度春学期学習状況分析結果報告

（１）情報通信工学科	教務担当	宮田　成紀
（２）ソフトウェアサイエンス学科	教務担当	塩澤　秀和
（３）マネジメントサイエンス学科	学科主任	三木　秀夫
（４）エンジニアリングデザイン学科	教務担当	川森　重弘
（５）学部全体の状況	教務主任	山崎　浩一

２．　最近の専門科目受講者動向

（６）情報通信工学科	「情報工学実験」	政田　元太
（７）ソフトウェアサイエンス学科	「データ通信」	大崎　正雄
（８）マネジメントサイエンス学科	「プロジェクト・マネジメント」	根上　明
（９）エンジニアリングデザイン学科	「人間工学」	三林　洋介

３．　教員による授業実施アンケート結果報告　授業運営課　中山　靖浩

４．　学生による授業評価アンケート結果報告 FD 委員　黒田　潔

５．　春学期の遠隔授業の実施状況等に関する意見交換会

〇．　解説／まとめ（各報告最終頁付記）　以上

図２　2020（令和２）年度秋学期開催工学部 FD 研修会プログラム

(3－1－2) 知的財産権と教育研究倫理に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

過去数年間、知的財産権の中で現代の教育に必須である著作権に関する知識を FD 研修として扱ってきた。今年度は遠隔授業の手法向上と遠隔授業実施上の著作権等の取り扱いの注意喚起を目的とした。

② 到達目標

遠隔授業の手法能力の向上と著作権等の取り扱いの認識を確立させることである。

③ 活動内容

実施日：春学期　5 月 28 日 18:00～19:00

帝京大学共通教育センター教授 木村 友久 氏により、講演題目「遠隔授業における著作権と情報倫理の取扱」として実施され、非常勤も含め教員 55 名が参加した。

④ 評価

令和 2 年度より改正著作権法第 35 条が施行され、他人の著作物のサーバー等を介する異時公衆送信には補償金支払いが義務付けられた（ただし令和 2 年度はコロナ禍の混乱により無償で、令和 2 年度から学生一人当たり 720 円の支払い義務が生じている)。遠隔授業が主流である今年度は、授業を実施する教員はもとより、授業を受ける学生にとっても授業資料の著作権的な扱いには慎重になる必要があった。注意すべき内容が講じられ、時節に適合した研修内容であった。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、木村 友久 氏の前職の山口大学所管事業による講師派遣により、使用なし。

(3－1－2) 社会発信手法研修会　段落番号の調整未

① 概要（目的を含む）

3 年連続で開催しており、研究・教育を広報に繋げること、高校生の志願者分析と広報に関して、私大工学部における優秀人材確保（アドミッション）の戦略を共有することが目的である。

② 到達目標

本学工学部の今後の人材確保のあり方について教員自身が理解を深める。

③ 活動内容

コロナ禍による準備不足のため中止となった。

④ 評価

中止のため、評価なし。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、使用なし。

(3－2－1) 授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会

① 概要（目的を含む）

昨年度報告と同等である。セメスター末の学科ごとの会議体において、各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」

（ISO9001 運用上の教育クォリティ記録･様式 No.7301-05・平成 30 年度本学 FD 活動報告書に提示）と授業に関する評価事項を集計した結果表（平成 30 年度本学 FD 活動報告書に提示）を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施する。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

セメスター末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされた報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施する。「授業評価総合検討会」は「工学部授業評価総合検討会」と同義である。ここでは各学科からの報告を基に不具合や課題が議論される。その結果は、学部としての次期への授業改善の実施施策として各学科へフィードバックされ、各学科の改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした継続的な授業改善に資する。さらに、学科の授業カリキュラムの継続的検討を維持する。

③ 活動内容

実施日：春学期 11 月　5 日
　　秋学期　3 月 18 日

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

授業評価検討会は、各学科会で開催され、授業評価アンケート・授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表を用いて議論された。

工学部授業評価総合検討会では、各学科で議論された内容が ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表評価（様式 No.7301-04）・ISO9001 運用上の授業評価検討会議事録（様式 No.7302-05）等を用いて説明され、その内容を構成員である教務主任、各学科教務担当、および工学部 FD 担当が議論した。春・秋学期に関して議論された内容をそれぞれ図 3・図 4 に示す。ここでの検討項目は、再び各学科へフィードバックされ、次期の授業展開へ資することとなる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はなし。

令和２年度春セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和２年 11 月５日、18:00～18:45
場所：Zoom ミーティング
（以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科）

出席者：宮田（ICT 教務担当）、塩澤（SS 教務担当）、三木（MS 教務担当）、川森（ED 教務担当）、黒田（工学部 FD 担当）、山﨑（教務主任）
議事録作成：山﨑

資料： 2020 年度春学期 授業評価検討会議事録（ICT，SS，MS，ED）
2020 年度春学期 授業評価集計結果（ICT，SS，MS，ED）
2020 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業は無かった。
各科からの報告内容を以下に記す。

・ICT：一部の科目でチェックシートが提出されていない。今後改善が求められる。一つの科目で「授業評価：成績Ｂ以上が 60%」を満たさなかったが例年より良かった。再履修者が多いクラスであることが満たさなかった要因である。「授業評価実施結果評価（理解度）」は全科目で 3.0 以上であり、不満足授業は無かった。
・SS：プログラミング系の２科目でＢ評価以上の学生が 60%を下回った。これはプレースメントテストに基づくクラス分けの影響が大きい。コロナ禍のため、すべての授業でオンラインとなり、シラバスに記載されている評価の方法を試験からレポートに変更した科目が少なからずあったが学生への事前の通知が徹底され問題などは起きなかった。
・MS：すべての科目について検証している。２科目で授業評価アンケートが実施されていなかったが、当学科所属の常勤教員担当のすべての科目で授業評価アンケートの実施とチェックシートの提出は行われている。授業評価アンケート結果の「理解」と「説明」が３点未満の科目がそれぞれ一つずつあった。科目担当者としては想定外とのことであった。
・ED：学科専門科目ではプログラミングⅠと代数学Ⅰで「授業評価：成績Ｂ以上が 60%」を満足しなかった。これらはともに再履修者クラスであることがその要因である。代数学Ⅰでは「授業評価実施結果評価（理解）」が 1.0 であった。８名の履修者のうち、回答者が１名であったことが原因と考えられる。学科全体としてアンケート結果は例年と比べてよかった。
・全体：コロナウィルス感染症対策として、今回より授業評価アンケートをオンラインで実施した。他学部教員へのアナウンスが徹底できなかった反省もあるが、全体として回答率が低い。回答件数が少ないものについてはアンケートとして今後の改善に役立てることが困難である。来学期以降、最終授業中の実施を徹底するよう協力を求める。アンケート集計結果の「今期の総括と今後に向けて」は授業の見直しとして重要である。今期の記入率は 78.8%であった。全科目で記入されるようさらなる取り組みが必要である。

以上

図３　2020（令和２）年度春学期工学部授業評価総合検討会議事録

令和２年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：令和３年３月 18 日、11:00～11:45
場所：Zoom ミーティング
（以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科）

出席者：宮田（ICT 教務担当）、森（次期 ICT 教務担当）、塩澤（SS 教務担当）、三木（MS 教務担当）、成川（次期 MS 教務担当）、川森（ED 教務担当）、黒田（工学部 FD 担当）、山﨑（教務主任）
議事録作成：山﨑

資料： 2020 年度秋学期 授業評価検討会議事録（ICT、SS、MS、ED）
2020 年度秋学期 授業評価集計結果（ICT、SS、MS、ED）
2020 年度秋学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（ICT、SS）

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各科の取組みについて報告が行われた。MS で１ 科目の不満足が確認された。
各科からの報告内容を以下に記す。

・ICT：全科目で「授業評価：成績 B 以上が 60%」を満足した。「授業評価実施結果評価（理解度）」は全科目で 3.0 以上であった。最低である 3.0 となった電気回路入門では、アンケート回答率が低いことが一因である。面積分・線積分を含む電磁気学の開講学年が３年から２年に変更され、学生の理解状況は低下した。開講セメスター、授業期間などカリキュラムの見直しが必要と考えられる。
・SS：プログラミング系の２科目で B 評価以上の学生が 60%を下回った。学科の重要科目であり、厳しく評価していることと再履修クラスであることが主な原因である。「授業評価実施結果評価（理解度）」で 3.0 未満の科目は、難易度が高く、内容が盛りだくさんの傾向がある。作品を提出させる科目は履修取消率が高くなる傾向にある。遠隔授業の問題として、演習実施の難しさと、実験レポート作成において修正が必要な個所を指導しても直さない学生が多いことが挙げられる。後者の一因はプレッシャーを掛けにくいことにある。
・MS：3 科目で授業評価アンケートの回答率が 0%であった（担当はともに非常勤講師）。次年度以降はアンケートに回答するよう授業中に学生に説明することを求める。一つの複素解析Ｉは春秋両学期ともアンケートの結果が悪く、不満足科目とした。科目担当者を変更することで対応した。履修登録取消が 10%以上の２科目については、アンケート結果が良いので特に問題はない。
・ED：プログラミングＩと原価計算で B 評価以上の学生が 60%を下回った。前者の要因は遠隔による授業である。数値解析プログラミングは今年度から担当者が変わりよくなった。初回授業で前提とされる知識や難しさなどを説明することでやる気のある学生が残った。デジタル生産加工では「授業評価：成績 B 以上が 60%」が突然低下した。原因ははっきりしていない。科目担当者は今年度で退職する。数学系の３科目を含む、計６科目の非常勤教員がアンケートを実施していない。学生へアンケートのアナウンスをしていない。
・全体：FD 委員会では、授業評価アンケートの点数が低い科目担当者に反省文を求めている。回答数が少ない科目ではアンケート結果の信憑性が低いため適切ではないと考えられる。工学部では科目ごとに丁寧に検討することでこの問題に対応する。遠隔授業における演習と試験の難しさが共通意見として挙げられた。試験では、学生がカンニングしても証拠を示すことが難しいため持込みを認めざるを得ない場合も生じる。対面で試験を行った場合の対面辞退者の対応も検討する必要がある。

以上

図４　2020（令和 2）年度秋学期工学部授業評価総合検討会議事録

（3－2－2）研究授業（参観授業）

① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は全学 US 科目･他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は 8～9 名であるため、4～5 年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者（各学科教員または全学教職員）からの評価を授業改善につなげることにある。

上記の参観授業担当教員による参観授業と共に、要望があれば、事前通告により、どの授業を本学教職員のだれでも参観できるように今年度より変更した。

② 到達目標

参観者（工学部教員/全学教職員）の評価を基にした授業改善を継続的に検討する。

③ 活動内容

本年度はコロナ禍により一度も開催することができなかった。

④ 評価

未開催は、資料提供によるオンデマンド型遠隔授業が実施されていることと、Zoom 等よる遠隔授業の第 3 者による参観の制御が困難であったことによる。今後、遠隔授業は継続されることが予想され、遠隔授業における参観の実施方法について、議論を続けていく必要がある。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、使用なし。

（3－2－3）ISO9001 教育クォリティマネジメントシステム運用と審査停止

① 概要（目的を含む）

2 節で記述したように、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割において重要と思われるマネジメントシステムを残した上で、自己点検実施を運用・継続中である。

② 到達目標

PDCA サイクルを循環させ、教育改善を継続する。

③ 活動内容

各種会議体活動等で自己点検実施を運用・継続中である。

④ 評価

教授会・主任会・学科会・教務担当者会等の活動により、自己点検実施は有効に運用・継続中である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上せず、使用もない。

（3－3－1）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成 12 年度秋学期より学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前

の授業において実施している。

② 到達目標

工学部全開講（FYE を除く）科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

今年度はコロナ禍により Web 上で実施せざるを得なくなったが､アンケート項目は例年通りである。集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCA を継続中である。その流れについては、昨年度本学 FD 活動報告書に提示した通りである。

学内外向けには総括した内容を以下の大学 HP で公開し、学内向けには各科目の詳細な内容を冊子体である【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 40】、および【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 41】として工学部系建屋玄関ロビー等で閲覧公開している。

http://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_eng/

春学期は 186 授業数、受講者数合計約 6,300 名、秋学期は 190 授業数、受講者数合計約 6,000 名であった。

④ 評価

Web での実施のため回答率は低くなり、春学期 50%、秋学期 59%であった。来年度は授業最終回に回答する時間を与えるなど、回答率の上昇が望まれる。

本アンケート集計結果表には「（３） 今期の総括と今後に向けて」という項目があり、授業担当教員による記入が教務主任・教務担当を通じて各教員に依頼されるが、その過去数年の記入率は春学期 77%程度、秋学期 72～74%程度で推移している。この記入率は低いというのが我々の認識であり､最低でも 90%程度を超えることが次期以降の目標である。

全項目 5 段階評価の平均の最小値が大きく低下し、春学期 1.67、秋学期 1.00 となった。回答率が大きく低下した科目では、極端な場合、1 名のみの回答がそのまま平均となっている様子が見受けられるようになった。そもそもアンケートであるから平均化されるわけであり、評価の平均値が平均を体現しないことの改善には、回答率の上昇が望まれる。全項目の評価の平均の最大値と平均値は昨年度までと同様の傾向であり、遠隔授業の影響はみられない。

今年度春学期は自由記述への記入が多くみられた。一方、秋学期の記入量が春学期より減少したことから、教員の遠隔授業が順調化した可能性がある。

本アンケート項目は 10 年以上変更されておらず、今後、状況に応じて再検討する必要がある。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は、授業評価アンケート実施に伴う費用として「マークシート印刷費・マークシート読取費・印刷製本費・通信運搬費等」であった。

(3－3－2) 教員による遠隔授業実施アンケート

① 概要（目的を含む）

各教員がどのような手法で授業を実施し、どの程度の課題を課し、どのように評価をしたか、という情報は重要であると考え、教員による遠隔授業実施アンケートを春学期および秋学期ともに実施した。

② 到達目標

各教員の授業実施方法を工学部としてまとめ、各教員が情報交換できる素材とし、遠隔授業における教育改善を実施する。

③ 活動内容

春学期および秋学期の成績評価後に、常勤・非常勤を問わずエクセルによる回答方式で実施した。

④ 評価

授業形式として、オンライン双方向型が 75%を占め、その 46%の授業に Zoom が使用された。課題は 90%以上が提出され、出席率も 90%を超えた。教員が授業の準備に費やした時間は、対面で実施されていた時の 2 倍以上に増加したという回答が 85%を示した。集計結果は、回答者全員に提供されると共に、2 回の FD 研修会で授業運営課職員により報告された。本アンケートは他者の授業実施状況を知ることができ、授業改善に大変参考になる。今後もこのような開かれた FD 活動は非常に重要であると考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上せず、使用もない。

(3－4) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を FD 活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討する。

③ 活動内容

コロナ禍により現地への出張としての派遣はなし。一方、過去に参加の例がある「公益財団法人 大学コンソーシアム京都」主催の「第 26 回 FD フォーラム」は、今年度は参加費無料で、遠隔会議方式で開催されたため、FD 委員は申込み、2 月 20 日（土）・21 日（日）・27 日（土）・28 日（日）に Zoom にて参加した。

④ 評価

遠隔会議方式による開催で、且つ内容は遠隔授業による授業展開に関する講演が多

かった。いずれの大学も苦労してきた様子がうかがえた。遠隔授業は、実は反転授業のようなアクティブラーニングとは親和性が高い。遠隔授業では LMS は必須であるが、事前学修に LMS を使えばそのまま反転授業化できる。しかし、その後の学生間、または教員学生間のインタラクティブな関係を構築することが逆に困難になる。多くの大学教員がそれぞれに情報交換をする場は重要で、遠隔会議方式により容易化された効果は大きい。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、使用なし。

4　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）工学部の理念・目標に関する課題

16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進度チェック・卒業要件の下、改定カリキュラムにおける指導上の問題点の認識や結果の評価と効果的な改善を継続する。

（2）現状における課題

課題は以下の通りで、継続的に実施されている。

(1) 入学生の学力不足対応の充実化

(2) 基礎力を保持している学生の能力を伸ばす対応

(3) 高学年学生が能動的自主的に学修する環境づくり

学ぶことの本質的意味を学生と教員がともに議論し充実させていくことと、学科の枠内にとどまらない全学部横断的に学生を支援できる体制づくりが重要である。各教員が各種コンテスト・大会等へ学生参加を促したり、学生や教員の所属学科にとどまらない枠を超えた共同活動が数多く実施されたりしていることから、一定程度達成されている。

（3）FD 活動の在り方に関する課題

工学部 FD 研修会については、マンネリ化の傾向にはあったが、コロナ禍における遠隔化した授業を議論する場として有効であった。しかし、日程に余裕がなく、セメスターごとの FD 研修会以外に、余裕を持った議論の機会があるとよい。

FD 活動のそもそもを理解する機会を設ける点については、改善には至らなかった。

5　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

（1）現状における課題

これまで同様、以下の課題は継続的に実施されるべきである。

(1)入学生の学力不足対応の充実化

(2)基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応

(3)高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり

これらの手段として、授業評価検討会、工学部授業評価総合検討会、学生による授業評価アンケートは従来どおり継続する。遠隔による授業は今後も継続実施される可能性が高い。参観授業については遠隔授業でも実施できる方法を検討したい。また、遠隔授業の技術的実施方法の研修、および、遠隔授業そのものの改善が継続的課題である。

（2）FD 活動の在り方に関する課題と予定

工学部 FD 活動内容がマンネリ化してきており、新しい視点による実施が求められてい

る。FD 活動のもっとも大きな問題点である「ただこなす意識化」を払拭し、教員自ら、あるいは教員団としての FD 活動を継続することは継続的課題である。例えば、工学部 FD 研修会では、学生の学修すべき内容そのものについて、深く考察する時期であると考えられる。我々はどのような学生を育てるべきか、学問として若者は何を学ぶべきか、そのことが我が国と世界の持続的で平和的な発展にどのように資するのか、という議論ができるよう、内容の再検討をする。

また、FD 活動のそもそもを理解する機会を設けることが必要である。例えば、「FD 活動の分類」・「設置基準との関係」・「職業と業務としての FD・SD」・「TP との関係」・「カリキュラム改善のための FD」などの項目については、共通認識を持つ必要がある。

§　経営学部

1　FD 活動への取組理念・目標

（1）質の高い卒業生（経営学部のミッション･ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。

（2）玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。

（3）21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部－少子化時代･大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。

（4）玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3　令和 2 年度の活動内容

（1）研修会（令和 2 年 9 月 7 日（月））

① 概要（目的を含む）

コース学修の進捗状況の共有と支援体制の整備・強化を目的として研修会を実施した。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法を示す。

③ 活動内容

平成 27 年度入学生から実施している教育課程の英語及びコース専門分野の学修成果を共有するために、各コースにおける学修の状況、検定試験ならびに TOEIC の結果を経営学部の教員間で話し合った。その後、コースごとに教員が分かれて、コース代表の教員をまとめ役として、支援体制の整備・強化の方向性を議論した。

④ 評価

DLP（Dual Language Program）における取組によって、TOEIC におけるスコアの成果が見受けられた。また、専門基礎ゼミナール A、B、各コースのゼミナール A、B、C、D の講義では、学生が経営学に関連した英語を習得する機会を設けている。ゼミナールで展開されている学修状況について、学部全体で共有することができた。

DLP によって TOEIC のスコア等の成果が見られるものの、学部全体で目指すスコアに到達している学生の割合は十分とはいえない水準である。TOEIC のスコアを上昇させる支援策について、引き続き話し合っていきたい。

（2）研修会（令和 2 年 11 月 5 日（木））

① 概要（目的を含む）

9 月実施の研修会と同様に、コースプログラムによる学修の進捗状況の共有と支援体制の整備・強化を目的として研修会を実施した。また、昨年度に続いて講義内容の

改善方法について検討することとした。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法、講義内容の改善に関する活用方法を示す。

③ 活動内容

9月に続いて、コースプログラムの成果拡大に向けた今年度2回目の研修会である。各コースに教員が分かれて、コース内の 4 年生における TOEIC の成果を共有した。また、TOEIC のスコアが低い学生に対しての指導方法についても話し合った。

講義内容の改善については、例えば、①成績評価の明確化、②予習、復習を定着化させる講義運営、③講義内で学生に発表させる機会を増やすといったさまざまな意見を抽出することができた。

④ 評価

各ゼミナールの運営方法がコース目標に見合った形となっているかについては、教員の指導方法に差異が存在しており、改善の余地がある。DLP を基にしたコースプログラムを発展的に継続するためには、教員間の指導方法を共有し、より良い講義運営が求められる。

今後、講義内容の改善を推し進めていくために、授業評価アンケートで高評価を得ている教員に依頼し、学生指導等の事例を紹介する場が必要である。

（3）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

今回の授業評価アンケートは、UNITAMA を活用した Web 形式を採用した。経営学部で開講している全科目で実施した。アンケート集計は学内の業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付している。

④ 評価

すべての開講科目で授業評価アンケートが実施できている。評価結果のまとめを Web 上で公開している。今後、学生の成果拡大につなげるアンケートの活用、全学的な課題である学生へのフィードバックについて、昨年度に引き続き学部全体で検討したい。

（4）学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに教員を派遣する予定であったが、新型コロナウイルスの影響等を鑑みて、中止とした。次年度以降に教員を派遣する予定である。

４　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動は、学外セミナー以外すべて実施できている。コースプログラムの運用に関する取組を建設的に推し進めている。昨年度よりコースごとのゼミナール科目においては、TOEIC のスコアを評価基準に組み込んでおり、学生の TOEIC スコアの取得目標に役立っている。英語だけではなく、専門分野の成果については、経営学検定、販売士、BATIC（国際会計検定）®等の資格取得に向けた支援策もより強化していく必要がある。学生には、資格試験を自身の学習成果と連動させながら、DLP の修得に向けた学習スタイルを身につけてほしい。

ゼミナールの評価に関しては、経営学部長、コース代表者による会合を定期的に開催している。各コース 2 年次、3 年次のゼミナール科目（国際会計コースの専門基礎ゼミナール A と国際会計ゼミナール A を除く）において、TOEIC の評価基準を厳格に運営し、英語能力を向上させる講義内容を展開していくことは、教員間で了承されている。

５　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

これまでの活動を継続するとともに、DLP による教育効果の検証を踏まえて、課題等を明らかにし、経営学部が掲げる TOEIC のスコアを達成する学生数を着実に増加させていく予定である。また、令和 3 年度は令和 2 年度と同様に、オンライン講義が引き続いて行われる予定となっており、オンライン講義に関する指導方法等については、教員間で情報共有できる場を設けたいと考えている。経営学関連の専門性を身につけさせるプログラム運用の強化を図り、学生の成長を支援したい。

§ 教育学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、令和元年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 担当、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 担当が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 令和 2 年度の活動内容

（1）研修会等

① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、オンライン研修会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

令和 2 年度は､教員の ICT 化による授業の効率化やアクティブ･ラーニングの促進、またコロナ禍でのオンライン授業のために､「オンライン授業に有効なツール」について全体研修を行った｡「ハラスメント講習会」は、コロナ禍のために双方向型オンライン研修を行った。

研修名　:「オンライン授業に有効なツールについて」
講　師　:教育学部 教育学科 教授：富永 順一 先生
実施日　:令和 2 年 9 月 24 日（木）
場　所　:オンデマンド方式実施
時　間　:16:11 配信
研修名　:「ハラスメント研修 : ハラスメントのない大学に―リモートワーク・リモート授業における注意」
講　師　:弁護士：桑島英美 先生
実施日　:令和 3 年 2 月 16 日（火）

場　所　：Zoom による双方向オンラインでの会議実施
時　間　：17:00 配信

④ 評価

有効なツールに関してはオンデマンド式については、初めての試みであり、口頭ではないために質問しづらい可能性があるため、メールで質問を受け付け、オンライン授業で有効なツールや新しい授業のやり方について学ぶことができた。特にネット上の情報を取得し活用して、授業に活かし、学生の相互理解や自ら考える力を養うためにどのような方法があるかなどの知識を得ることができた。

（2）学生による授業評価アンケート

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。例年は、受講者が 10 名未満のゼミなどについては実施しなかったが、今年度から 10 名未満のゼミや授業であっても実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

今年度は、はじめてのコロナ禍での授業となり、学部授業は①双方向オンライン授業、②オンデマンド型（授業動画配信）授業、③資料配信＆課題中心型授業の 3 種類に分けられ、教員はそれぞれに工夫を凝らし、柔軟に対応して授業を行っていた。授業評価のアンケート項目には、①3 種類のうちのどのような方式の授業であったか、②孤立を感じたかどうかなどを尋ねる項目を学部独自に追加した。教員とは学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。アンケート結果から、コロナ禍で他の学生に会えない状況でも、Zoom のブレイクアウトルームを利用したディスカッションなどにより孤立感を解消することができることがわかった。また、教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが､実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなってい

るが、オンデマンド方式の授業などではより多くの時間を内容理解のために費やしている傾向が見えた。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることも考慮した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。また、この項目が高い教員の実施方法などを共有し他の教員の参考にしていきたい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックする。目的は、各授業担当者が授業改善につなげることにある。

② 到達目標

・専任教員、非常勤講師を問わず、すべてのスクーリング授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
・実施した授業評価のデータ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

・春学期に予定されていたスクーリングは新型コロナウィルス感染症による影響により、残念ながら中止となったが、開講された夏期スクーリング以降のスクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（科目）について、オンラインでの授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ 629 名。
・質問内容は、前年度と同一のものを使用したが、オンライン授業の課題を探るために教員への質問のしやすさや孤立感、ツール（基本的には Microsoft Teams を使用）の使いやすさなどについての項目を加えた。

④ 評価

各授業の結果は、スクーリングの担当教員本人に配付し、結果と課題を共有することができた。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。特に「基本的な知識が得られた」、「新しい考え方・発想に触れた」、「授業全体の目標は明確であった」といった項目は肯定的（「とてもそう思う」＋「そう思う」）に答えた人の比率が 96%以上を示していた。その他のほとんどの項目においても 90%以上が肯定的評価をしており、前年度よりも肯定的評価の割合が高かった。これは、慣れないオンライン授業においても授業担当者が様々な工夫を行い、学生の学びの質を保証することができたことによると考えられる。

オンラインによる遠隔授業となったことに関する項目においては、質問のしやすさについての肯定的評価が 63.0%、ツールの使いやすさについての肯定的評価が 64.7%、孤立感を感じた（「やや感じた」を含む）という回答が 36.9%と、他の項目に比べると肯定的な割合が低いものの、全体としては新しい授業形態に適応し、活用することができたと考えられる。

自由記述の内容を見てみると、遠方よりスクーリングに参加する必要がないことから費用や時間が有効に使えた、資料が見やすかったなどといった声に加え、オンラインだったからこそ新型コロナウィルスのことを考えずにグループワークが活発に行えたといった声も見られた。一方で、ネットワークや PC 操作などのトラブルについてのコメントも少なからず見受けられ、授業内容以外の部分におけるトラブルが授業理解を妨げることもあるという点が課題として見られた。特に、通信教育課程の学生は年齢や PC の使用経験が多様である上、スクーリングは 3 日間～6 日間という短期で行われるためにこれらのトラブルによる影響を受けやすく、操作面での不安を軽減するための支援が必要になってくると考えられる。

（3）教職員相互の授業公開と参観

【通学課程】【通信教育課程】

令和 2 年度は、新型コロナの影響により、対面の授業がほとんど行われず、オンライン授業となった。そのため、授業参観は物理的に困難となり、やむなく実施を見送った。

（4）FD 研修

【通学課程】

1）学園内研修–案内図と写真でたどる玉川学園

①概要

令和 2 年 9 月 7 日、玉川学園が所蔵する新旧の案内図と写真を手がかりに学園内をくまなく歩き、学園の発展・変化について理解を深め、それを各自の教育活動と研究活動に役立てるため学内研修を実施した。

② 到達目標

小原國芳が思い描き実現した玉川学園の主要な場所を巡り、90 年以上におよぶ学園の発展･変化について理解を深め､玉川の教員としての誇りと使命感を高め､それを日々の教育活動と研究活動に役立てることを目的とする。

③ 活動内容

新旧の学園案内図及び写真データをもとに､草創期から現在にいたる玉川学園内の主要な場所と建物（跡地を含む)、さらに残された銅像や碑文等を徒歩でたどり、必要に応じて撮影した。

④ 評価

学部教員による学園めぐりは、単なる研修にとどまらず、 自校史研究のフィールドワークとしての価値をもつ。特に古い学園案内図に記された建物など、そのほとんどは失われており、現地の変貌の様子を実地に確認できたことは意義深いことであった。また、古い学園案内図など、資料収集の過程で、年代特定の困難なものが見つかり、今後の研究課題も多数見出すことができた。なお、今回の研修成果の一部は、『教育学部全人教育研究センター年報』8 号（2021 年 3 月刊）に掲載された。これは今後の教育活動と研究活動に役立てられる。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修の情報を提供する。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

② 活動内容

本年度はオンラインでのスクーリングとなったことから、それぞれの教員が行なっている工夫について情報を収集し、共有するための資料を作成した。

③ 評価

自宅からオンライン授業を行うことがほとんどであったため、教員がそれぞれに学内外のコミュニティでの情報収集を行い、それをふまえて授業で様々な工夫を行うという状況であり、十分な情報提供や共有を行うことが難しかった。今回作成した資料をきっかけに､お互いがさらに情報共有を行う機会を設けていきたいと考える｡また、学外において提供される FD 情報についてもよりきめ細やかに情報提供を行っていきたい。

4 昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目（専任・非常勤）実施を目標にしていたが、US 科目との重複が春学期にあり、特に非常勤教員や数名の専任教員からどちらで実施すべきかわからないとの問い合わせがあった。その後、授業運営課とのメールでの確認により、秋学期には、それが改善された。

教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っているが、新型コロナウイルス感染防止のために実現できなかったことは残念である。令和 3 年度の計画で実施したいと考えている。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。ただ、オンラインでの実施であったこともあり、科目によっては回答者が多く集まらないものもあった。また、今年度はデータ分析の外部委託がなくなったこともあり、十分な分析を行うことができなかったが、各教員に対してもより迅速なフィードバックを行えるよう、次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、平成 28 年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5 今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理

念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を令和 3 年度も開催していきたい。

FD 研修の一つである香川研修において学部教員が創立者の縁の地である香川県を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する香川研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。令和 3 年度は対面でのスクーリングとオンラインでのスクーリングの双方が予定されていることから、それぞれのスクーリングにおける課題を明らかにするために、通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§　芸術学部

1　FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化、新技術の進展といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって急速に進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。新聞社の全国世論調査によると、「世界に通用する人材や、企業や社会が求める人材を大学は育てているか」の質問に 6 割を超える国民が否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわり、芸術学部の人材養成が社会の発展や改善に貢献できると確信している。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、現代は芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには多様化する社会の要請に応えうる柔軟性や機動性をもった組織として教員構成を編成しなければならない。教員たちが目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び大学 FD 委員会委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、学部全教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員会委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3　令和２年度の活動報告

（1）授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

令和 2 年度は、春学期、秋学期として年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている授業（卒業研究など複数のゼミを同じ授業名でまとめられた科目を除く）について UNITAMA による調査方法にて実施された。調査対象とした履修登録者数は春 4,466 人、秋 4,551 人である（延べ数）。

個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、総合的な内容については大学のポータルサイトにて公開される。

各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

昨年度までは学外の業者にデータ集計を依頼していたが、今年度から新たな仕組みとして UNITAMA による授業アンケート形式に変更となった。かかる経費の削減はもとより、調査項目の共通化などこれまでより他学部とのデータ比較が容易になった点を評価する。問題点としてはアンケートに対する回答率の低さである（春 66.8%、秋 48.0%）。これまでのような対面授業中でのアンケート用紙の配付・回収ではなく、Web での回答になったこと、学生・教員ともに回答方法が慣れていなかったことや学生の取り組み意識の不足などがその要因と考えられる。秋に回答率が下がったのは、1 年生の意識低下が大きいと考えられる。

（2）講演会・研修会・ワークショップなど

① 概要

英語による授業運営のための教員 FD 研修会。英語・日本語によるバイリンガル型の授業運営を計画する取り組みの一環として、担当教員 3 名が国際教育夏季研究大会 SIIEJ （Summer Institute on International Education,Japan） 「新型コロナ禍と国際教育の将来像」に参加した。9 月 1 日から 3 日の日程でオンラインにて実施された。

② 到達目標

現在のコロナ禍での留学関連の情報収集。令和 3 年度から開始予定の交換留学生に対する授業運営に対してのスキルアップとシラバス作成などについての情報収集とする。

③ 活動内容

1 日目、文部科学省佐藤邦明氏（文部科学省 高等教育局 国際企画室長）、フィオナ，ハンター氏（Universita Cattolica del Sacro Cuore, Italy）による基調講演ほか。

2 日目、3 日目、4 つのワークショップと 14 の個別セッションを開設。参加者は、それぞれ別のセッションに参加した。

④ 評価

参加者からの報告によると、留学の現在の状況確認、国際教育の学位と資格証書の電子化の内容、国際プログラム開発と評価の考え方、留学生に対する危機管理の事例

紹介、国際寮や RA（レジデント・アシスタント）について、帰国留学生との連携に関する課題などについてセッションが行われた。

学部としての実際の開講は令和 4 年度に延期となった。

（3）調査・研究など

1）

① 概要

遠隔授業の実施に伴う教員間での情報交換会。

② 到達目標

遠隔授業の実施方法やテキスト制作のスキルなどについて教員間が持つ情報を提供しあい、リモート授業スキルのレベルアップを図る。

③ 活動内容

メディア・デザイン学科の専任・非常勤教員に案内し、任意参加で Zoom により 1 時間程度の研究会を実施した。それぞれが抱える問題点の報告や、実際の授業運営の工夫などについて情報交換・質疑などを行なった。5 月 14 日（専任 5 名、非常勤講師 8 名参加)、6 月 4 日（専任 4 名、非常勤 7 名参加）の 2 回実施。議事録・参考資料を Blackboard に掲載し、参加できなかった教員にも情報の共有を図った。

④ 評価

急遽、大学からの遠隔授業実施の指示であったため、それぞれ迷いがある中で授業がスタートし､個々の教員からの質問等が頻発したため情報共有を目指して行なった。数種類のアプリケーションの使用状況に対する意見や、大学としての考え方の共有など、教員にとって価値の高い内容であった。

2）

① 概要

書籍「脳の創造と ART と AI」塚田稔（玉川大学名誉教授）著について、図書の購入・配布。塚田氏は本学工学部の脳研究のパイオニアであり、数多くの受賞作品がある洋画家としても有名。本書では、小原芳明学長による「玉川学園と脳科学研究」という項にて玉川大学での取り組みについての解説もある。

② 到達目標

STREAM Hall 2019 および Consilience Hall 2020 での芸・工・農を中心とした複合的学習環境において、共有できる教育研究を目的とする。創造力の脳科学的な理解、芸術と脳の関係などこれからの ESTEAM 教育研究につなげる。

③ 活動内容

上記書籍を美術・造形系の教員中心に配布した。内訳、メディア・デザイン学科専任教員 9 名、芸術教育学科専任教員 6 名、アート・デザイン学科専任教員 4 名、学部長の 20 名。

④ 評価

今年度から STREAM Hall 2019 校舎での授業も開始され、工学部、農学部など他研究分野との関連の中で複合的なテーマでの教育・研究活動がより活発に行われる。12 月には脳科学研究所とコラボレーションした作品展なども行われた。このような状

況で脳、IT、ART の領域全体についての共通の認識を得る機会を設けられた。

（4）学外セミナー等への教員派遣

1）

① 概要

全国高等学校美術工芸教育研究大会（令和 2 年 8 月 11 日 富山県)。全国から集まる高等学校教員による研究授業紹介およびワークショップ、生徒の作品展開催。

「再発見！～美術・工芸教育の可能性～ 」のテーマにて全体会、分科会での情報収集。研究授業やパネル展示、情報交換会にて高等学校教員との意見交換。

④ 評価

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で､一堂に会しての開催は行われなかった。よって、本学部からの参加者はなかった。参加希望者への冊子発送によって替えられた。

2）

① 概要（目的を含む）

全日本音楽教育研究会全国大会（川越市・東邦音楽大学）令和 2 年 11 月 14 日。音楽教育に関する研究を推進し、わが国音楽教育の向上発展に寄与することを目的とする。教員養成課程に携わる教員にとって重要な情報を収集し、学部・学科の教員と情報共有することで、授業運営や各授業の質の向上に役立てる。

音楽教育に関する研究、調査。音楽教育に関する国際交流。授業改善、授業づくり、指導と評価の工夫についての研究報告会。

④ 評価

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で､一堂に会しての開催は行われなかった。よって、本学部からの参加者はなかった。

4　昨年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度から授業アンケートの方法が変わり、学内組織でのシステム開発とデータ集計がなされ、これまで外部に発注していた経費が大幅に削減された。これにより各学部が統一されたデータをもとに集計されるため、全学的な比較データとしての情報価値が高まったと言える。

コロナ禍により、予定されていた研究会などが中止となり、また国内外への出張も制限されたことから、ほとんどの活動ができなかった。この傾向は次年度においても同様と考えられる。結果、予算として組まれた経費が未執行となった。次年度に向けて新たな FD の取り組みの方法を検討する必要がある。

実施された各 FD 活動に関しては逐次、芸術学部拡大教授会により報告された。

5　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

令和 3 年 4 月から芸術学部は学部改組が行われる。学部長が交代し、音楽学科、アート・デザイン学科、演劇・舞踊学科が新たな 3 学科としてスタートする。それに向け、新採用の教員を 9 名迎えることになり、新採用教員のサポート、新旧教員間の連携や情報の共有

化が必須となってくる。また、コロナ対策としての授業運営は新年度においても今年同様の対応が予想される状況下で、従来の UNITAMA、Blackboard、Teams などの遠隔授業ツールの運用がより重要度を増す事になる。

教育環境においても、今年度の STREAM Hall 2019 の運用に続き、芸術教育学科は Consilience Hall 2020 での授業が開始され、新しい芸術学部が本格的にスタートする年度となる。

今年度の重要課題であった留学生に向けての英語と日本語による授業開講の取り組みについては今年度一定の成果を得たものの、この度のコロナ禍の影響で 1 年見送りとなり令和 4 年度実施予定への変更となった。今後、授業資料やガイダンスの準備など具体的に動いていく予定であり、更なる FD 支援を必要と考える。

改組に対する教員全体の意識向上や新規教育施設での新しい教育活動に向けて各学科の取り組みや各プロジェクトの横断的な学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

§　リベラルアーツ学部

1　FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

学部で実施される専任教員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3　令和 2 年度の活動内容

（1）初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的プランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

4 月～翌 3 月にオンライン会議にて実施した。参加者は 1 年生担任教員で、必要な回には各主任が参加した。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- 遠隔授業と対面授業を組み合わせた一年次セミナーのクラス運営と学修・生活に関する早い段階での教育および指導方法
- 今年度新入生研修中止に伴う代替プロジェクト内容と指導方法
- 次年度以降の新入生研修のあり方
- 新入生研修の成果のまとめとアウトプット方法
- 秋学期「一年次セミナー102」の内容と指導方法

④ 評価

一年次セミナーは 1 年生全員（約 170 名）を複数クラスに分けて実施するため、クラス間の授業内容や学生指導、クラス全体の状況については、担任間で共有し連携をはかっていくことが重要である。特に今年度は大学キャンパスに来る機会が限定され、学生間のつながりがほぼ皆無であった 1 年生に対し、遠隔という多くの学生にとって

ほぼ未経験の形態での学修を一年次セミナーで方向づけしサポートする方法について、入学前から担当教員間で綿密かつ迅速な情報交換と指導方法の決定が行われた。入学後にも週 1 回程度、現状のまとめと今後に向けた意見交換が行われ、従来とは異なる授業形態へ急遽変更せざるを得なかった状況においても、効果的な初年次教育カリキュラムを整えることができた。学生による授業評価アンケート（5 段階評価）からは、春学期平均「意欲」4.0、「興味」3.8、「理解」4.1、秋学期平均「意欲」4.4、「興味」4.2、「理解」4.2 と学生の授業への取り組みに対する自己評価は概ね高く、秋学期にはさらに上昇した。以上から、目標を達成できたと評価できる。

（2）「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい 2 年次教育のあり方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋学期中に担任会を開催し、2 年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。特に今年度は以下の点を中心に検討を行った。

・アカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法。春学期はオンデマンド・オンラインの形式での実施となる中で、課題取り組みへのモチベーション維持や評価方法について、担任会で意見交換を行った。
・2 年次の学内・学外研修のあり方。内容とアウトプット方法。
・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方。特に海外留学やキャリアプランニングについて。

④ 評価

二年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。また、学生の大学での学びと社会に向けた態度姿勢に対する意識を高め、教育効果をさらに上げることができたと考えられる。学生による授業評価アンケート（5 段階評価）からは、春学期平均「意欲」4.2、「興味」4.0、「理解」4.2、秋学期平均「意欲」4.2、「興味」4.0、「理解」4.1 と年間を通して、学生の授業への取り組みの自己評価が高い傾向が示唆された。以上から、目標を達成できたと評価できる。

（3）学部将来構想の観点からの学部運営改善に関する研修会

① 概要（目的を含む）

学部運営改善の方針と具体案を検討する。

② 到達目標

学部将来構想に基づく学部運営改善の方針と具体案を策定する。

③ 活動内容

Tamagawa Vision の具体化のための基本的方向が検討・確認された。

④ 評価

Tamagawa Vision の具体化のための基本的方向にもとづいて学部カリキュラム改善の根本方針を定めることが次年度の課題として残された。

（4）リベラルアーツ学部防災訓練

① 概要（目的を含む）

教育および研究現場における災害発生時の教員による迅速かつ的確な対処方法を、実践的に理解し習得する。

② 到達目標

教育・研究現場において、災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

令和 2 年 7 月 22 日（水）にオンデマンド形式で実施した。

④ 評価

今年度は各自の資料閲覧による実施となったが､専任教員全員が必要事項を確認し、災害発生時の対処方法および緊急時の心構えについて具体的に理解することができた。到達目標は概ね達成されたと評価できる。

（5）令和 2 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部教育の今後の展望に関する意見交換等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

令和 3 年 2 月 25 日（木）10:00~16:00 玉川大学大学研究室棟 B104 会議室（オンライン併用）にて専任教員（25 名中 24 名出席）による研修会を実施し、以下のプログラムを実施した。

（ア）1 年・2 年生担任教員による学部教育の振り返りと今後の計画検討

（イ）学部共同研究報告

「リベラルアーツ的学際知を構成するための手法の開発」

（佐藤由紀教授、大嶌徹助教、山田亜紀助教）

「台湾と日本の文化的相互作用に関する学際的研究」

（船戸はるな助教）

（ウ）特別講演

「『ポストコロナ』時代の大学教育・リベラルアーツ教育」

（岡本裕一朗客員教授）

③ 評価

（ア）今年度の 1 年次・2 年次教育活動の振り返りから、問題点と改善点を教員間で共有し、令和 3 年度に予定される教育活動に関する検討を行った。

（イ）共同研究中間報告 1 件目「リベラルアーツ的学際知を構成するための手法の

開発」では、継続的に進められてきた学際研究手法の探究の一環として、学部内外の教員・研究員による月 1~2 回開催の研究会の報告と今後の展開に向けた提案が行われた。「学際性」を「目的をもって各分野からの知を集め、自他の研究に活用することである」と捉えた本共同研究によって、教員間の研究交流がさらに活性化したこと、教員間の心理的距離が近づき研究に関する議論を深められたことが報告された。さらに今後について、各分野の方法論を学びながら分野横断的な新しい研究テーマを発見することの必要性が提示された。教育活動に多くの時間とエネルギーを割く学部教員にとって、研究者の本分に立ち返って各自の研究テーマの間口を広げる意識をもつと共に、学内の異分野研究者との連携を通して研究活動を発展させるだけでなく、教育活動にもその学際知を還元できる力を養う場として、本共同研究の「学際研究会」が有効に機能していることが示された。

もう 1 件の報告「台湾と日本の文化的相互作用に関する学際的研究」では、昨年度に台北市で実施された、日本統治下で日本語教育を受けたインフォーマントへの聞き取り調査の追加分析の結果が報告された。本研究では、台湾の歴史的認識における、日本統治時代、国民党統治時代、民主化後の 3 つの「縦」の「断絶」に着目し、このうちの日本統治時代に幼少期を過ごしたインフォーマントの言語に根ざしたアイデンティティーとナショナリティーの認識について、言語学的分析に基づく考察が示された。リベラルアーツ学部では、フィールドワークやインターンシップ、海外研修受け入れなど台湾とのつながりが強く、日本語学・民俗学・社会学を含む多角的な視点から、台湾文化をリベラルアーツ学部で研究し、教育に取り入れていくことの意義について、改めて確認することができた。

（ウ）岡本裕一朗客員教授による特別講演では、数百年単位の大きな世界的変化である新型コロナウイルス感染症拡大によって、大学もまたシステムの変化に直面する事態になっていること、すなわち人々が集合して学び訓練を受ける「近代社会」の従来モデルが大学教育に当てはまらなくなり、人々が分散した状態でのコントロールが必要になる新しい時代が到来していることが論じられた。対面授業を基本としてきた大学教育がオンライン化することによって、教育コンテンツの制作は「タレント化」した一部の教員あるいは専門家に集約され、全国一律の講義が行われること、その配信は教員ではなく技術者や事務職員によって担われることが予測される。こうした状況下で、対面の問答を基本とするアカデメイアが起源であるリベラルアーツ教育は、いかなる方向へ向かうべきかという問題提起がなされ、学部教員からの質疑をもとに活発な議論が行われた。

今年度は対面とオンライン併用の 1 日開催となり、計画よりも内容を縮小せざるを得なかったが、限られた時間の中でも研究と教育の両面で多くの意見交換がなされた。学部教員が一堂に会して議論する機会はほぼ一年ぶりであり、大変有意義な会とすることができた。

（6）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

学科専門科目について学生による授業評価アンケートを実施し、教員間で授業運営の効果や問題点に関する認識を共有し、改善計画を議論し方策を立てる。

② 到達目標

現在の学部生の授業に対する意識を把握し、学部の教員間でアイデアを提供し合い、より良い改善に向けた授業運営計画を立てることができる。

③ 活動内容

春学期と秋学期それぞれ第 15 週目に Blackboard を使用して、受講生に対し授業評価アンケートを実施した。質問 17 項目のうち 16 項目は 5 段階評価、1 項目は自由回答であった。

自由回答 1 項目以外の 16 項目の集計結果を報告書（※本報告末尾資料）にまとめ、教授会にて学部専任教員に配付し報告を行った。さらにアンケート回答結果を踏まえて各教員が記入した授業改善計画書を FD 担当が回収し、内容を報告書にまとめて学部専任教員に報告した。

④ 評価

今年度新たに 17 項目から成る共通アンケートを作成し、Blackboard を使用して専任・非常勤の対象科目担当の全教員に実施を依頼した。初めての試みで教員にはアンケート掲載・回収の負担があったことが予想されるが、専任教員の 90%と高い提出率を得ることができた（春学期 35 科目、秋学期 49 科目、リベラルアーツセミナーなど複数クラス開講を個別にカウント）。一方非常勤教員の提出率が低かったことから、実施手順の改善と対象教員範囲の変更が今後の検討課題である。また授業改善計画書提出率は専任 50%にとどまったが、オンライン・オンデマンド授業を実施し始めた今年度において、授業の進め方や工夫点、改善点を教員間で共有できたことは意義が大きいと考えられる。以上から今年度の到達目標は概ね達成されたと評価できる。実施要領については次年度以降見直しを行い、さらに改善していく。

（7）学外 FD セミナーへの参加

① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握し、それを今後の FD 活動に活かしていく。

② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を得ることができる。

③ 活動内容

令和 3 年 2 月 20 日（土）～28 日(日)に大学コンソーシアム京都主催「第 26 回 FD フォーラム」（オンライン開催）、令和 3 年 3 月 17 日(水)～18 日(木)に京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 27 回大学教育研究フォーラム」（オンライン開催）へ学部 FD 担当（梶川）が参加した。

④ 評価

「第 26 回 FD フォーラム」では 2 月 21 日「第 2 分科会　開かれた教室、開かれた大学へ向けて~メディア授業の可能性について考える~」に出席し、向後千春氏（早稲田大学教授）、菅谷充氏（京都精華大学教授）、筒井洋一氏（筒井ラーニング Lab 合同会社代表）の講演を聴講した。これらの講演から、対面授業とオンライン授業の共通点と相違点を整理し、効果的な学びをもたらす授業の準備、運営、評価について、オンライン授業の先駆者らの知見から多くのヒントを得ることができた。

「第 27 回大学教育研究フォーラム」では 3 月 17 日シンポジウム「大学教育におけるニューノーマルを展望する」にて、田中優子氏（法政大学総長）、吉見俊哉氏（東京大学教授）、小林浩氏（リクルート進学総研所長・カレッジマネジメント編集長）、飯島透氏（京都大学高等教育研究開発推進センター長）による講演およびパネルディスカッションを聴講した。以下に議論の概要をまとめる。

吉見氏の講演では、これまでの大学は、グローバル化すなわち人々の自由な移動によって広まってきた「リベラルの知」に拠っていたが、コロナ危機によって移動の自由が禁止されたために、ニューノーマル（新しい日常）への転換が必要となったことが述べられた。ニューノーマルのもとでのオンライン化は空間的な距離を超えるが、時間の壁を超えない。このため時間の効率的・効果的なマネジメントが重要である。だが現在の大学では、過重な教育・研究・管理の負担をもつ教員側、数多い科目に出席するだけの学生側の両方において、時間管理の壁がある。これを解決するためには、意欲ある教師と学生の出会いの場を作ること、授業科目を「少なく重く」すなわち科目数を減らし週当たりの実施回数を増やすこと、コーチング型の授業を行うことが肝要である。またこれからの時代には、研究と教育と社会的実践のコラボレーションが一層重要になってくるのであり、「地球社会の大学」としてグローバルな人間知を備えた「地球人」を創るために、10 代、30 代、70 代と生涯 3 回の大学での学びを考えていくべきだろう。最後に、現代では人文社会学系の存在意義が疑問視されているが、上記の新しい地球社会、グローバルな人間知を涵養する上では、人文社会科学が重要になってくるものであると結ばれた。

小林氏からは、多くのリサーチ結果に基づき、高・大・社接続に向けた学修者のあり方が提案された。昨年の結果に顕著であった、高校生の受験大学選択基準、大学生の学修不安、就職状況の 3 つの変化を踏まえて、大学の独自性・個性・役割・価値の明確化、出口（進路）を明確に示した上でのカリキュラム明確化、それに沿った入学者に求める学力の明確化が必要である。さらに大学は、学生個々に寄り添った成長支援、学修者本位の教育を重視すべきであると述べられた。

田中氏は、学修の達成目標を立てること自体が学びであるとし、一人で時間を使い学ぶこと、予習・復習のような小学校の学習ではなく「一人で人生について考えること」を重視したい、それが大学ならではの学びであると論じられた。オンライン化によって学部・大学院教育の多様性が広がり、様々な学修方法が進化して、学生個々に適合した学修の個別最適化が進んできている。こうした中で、大学設置基準を見直し、学部教育と通信教育をつなぎ柔軟で自由な学びの場を作っていくことが課題であるとされた。

これらの議論は本学部 FD 研修会での岡本客員教授による特別講演にも重なるもの

があり、今後の大学教育の方向性とそれに関わる諸問題を認識すると共に、他大学の取り組みを知ることができ、大変有意義であった。

4　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

① 初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）、FD 研修会、防災訓練など講習会は、学部教員の FD に対する意識を高めると共に具体的な教育活動改善の重要な機会となっていることから、次年度も継続する。さらに学部新構想に向けた教育カリキュラム、特に学問分野や領域の再構成、また卒業プロジェクト（論文執筆等）の制作・作成の指導（ゼミのあり方）についての議論を継続し、本学の特色を生かしたリベラルアーツ教育のより効果的な実践をめざし、教員間の連携を深める。

② 令和元年度に新たにスタートした学部の科目共通の学生対象授業評価アンケートを、項目や実施方法などの問題点を修正しつつ継続する。結果の開示方法や授業改善計画書との関連づけ、授業資料や成果の共有方法等と併せて、授業内容の改善に向けより効果的な活用方法を検討する。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

① FD 研修会の実施、1 年・2 年次担任会、教員間の Blackboard 等をインターネットを主に使用した情報交換により、FD に対する意識を高く保つことができたと評価できる。

② 学科専門科目を対象に、学生による授業評価アンケートを科目間共通項目で春・秋学期末に実施した。また質問項目については教員からの提案を受け、秋学期にはより適切な内容に改善された。インターネット（Blackboard）を使用したため、一部の回答率が低かったことから、教員の負担軽減と学生への働きかけ、実施期間の見直し、対象教員（科目）範囲の変更が今後の課題として挙げられる。

5　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）、FD 研修会、防災訓練など講習会は、学部教員の FD に対する意識を高めると共に具体的な教育活動改善の重要な機会として効果を挙げてきていることから、次年度以降も継続して実施する。

また学科専門科目の学生による授業評価アンケートを、実施方法や回収率の問題点を修正しつつ継続する。より効果的・効率的な実施方法については、引き続き学部 FD 委員会を中心に学部内で議論を行い模索する。

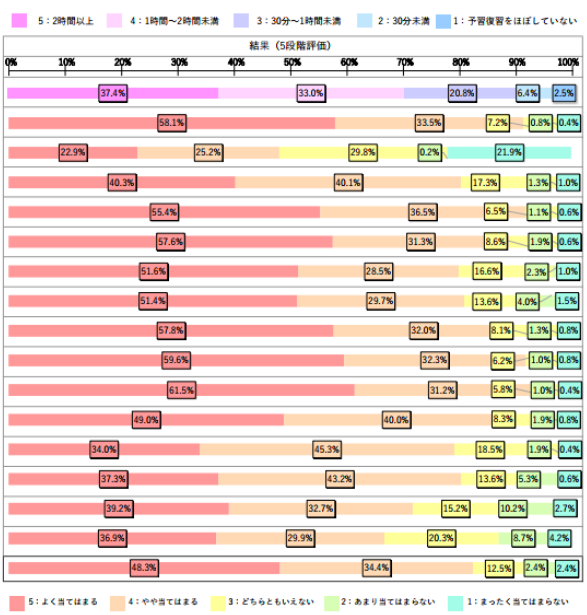
資料：令和２年度学生による授業評価アンケート結果

令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

回答数：　485 名

	設問	*平均値
1	授業1回あたり、予習・復習にどのくらいの時間を費やしましたか（課題を行う時間も含みます）？ 平均的な時間をお答えください。	4.0
2	この授業に積極的に取り組んだ	4.5
3	内容がよく理解できなかったときには、教員に質問・相談をした	3.3
4	この授業はシラバスに沿って進められた	4.2
5	各回の授業のねらい・内容は明確だった	4.5
6	授業用教材（教科書、資料、パワーポイントなど）が内容を理解する上で役立った	4.4
7	教員は、学生の質問などに対して的確に対応していた	4.3
8	オンラインの特性を考慮した授業の進め方になっていた	4.3
9	授業を通じて新しい考え方・発想に触れた	4.4
10	授業テーマに関する基本的な知識が得られた	4.5
11	授業を通じて、自分で調べ、考える力が身についた	4.5
12	授業テーマのもつ学問的意義を読み取れた	4.3
13	シラバスに書かれている到達目標を達成できた	4.1
14	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切だった	4.1
15	授業全体を通して、課題の量は適切だった	4.0
16	オンライン授業という形態でも、受講に支障が出ることはなかった	3.9
	総合評価	4.2

*平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)

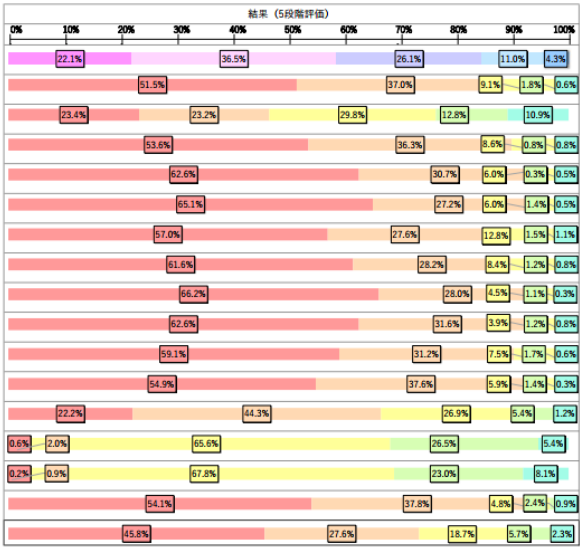


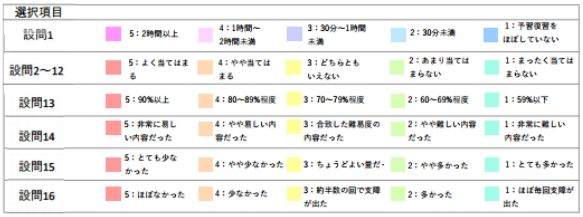
令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

回答数：　674 名

	設問	平均値
1	授業1回あたり、予習・復習にどのくらいの時間を費やしましたか（課題を行う時間も含みます）？ 平均的な時間をお答えください。	3.6
2	この授業に積極的に取り組んだ	4.4
3	内容がよく理解できなかったときには、教員に質問・相談をした	3.4
4	この授業はシラバスに沿って進められた	4.4
5	各回の授業のねらい・内容は明確だった	4.5
6	授業用教材（教科書、資料、パワーポイントなど）が内容を理解する上で役立った	4.6
7	教員は、学生の質問などに対して的確に対応していた	4.4
8	授業の実施形態（オンラインまたはオンライン＋対面）の特性を考慮した授業の進め方になっていた	4.5
9	授業を通じて新しい考え方・発想に触れた	4.6
10	授業テーマに関する基本的な知識が得られた	4.5
11	授業を通じて、自分で調べ、考える力が身についた	4.5
12	授業テーマのもつ学問的意義を読み取れた	4.5
13	授業全体を通して、設定された到達目標をあなたはどの程度（何パーセントくらい）達成できたと思いますか？	3.8
14	この授業の難易度は、設定された科目番号（100番台～400番台）のレベルに合っていたでしょうか？	* 4.4
15	授業全体を通して、課題の量は適切だったでしょうか。	* 4.4
16	この授業の実施形態（オンラインまたはオンライン＋対面）が原因で、あなたが受講する上で何か支障が出ることはありましたか？	4.4
	総合評価	4.3

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)
＊平均値＝（「3」回答数×5＋「2＆4」回答数×3.5＋「1＆5」回答数×1.5）/回答数（小数点第2位を四捨五入）





§　観光学部

1　FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2　学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3　令和 2 年度の活動内容

（1）講演会「『入学者の現状と背景分析』～今、入学してくる学生の理解と対策について～」

実施日　：　令和 2 年 9 月 7 日（月）　13：00～15：00（質疑応答含）

講　師　：　株式会社ナガセ（東進ハイスクール）

上級執行役員ビジネススクール本部長 麻柄真治氏

場　所　：　大学教育棟 2014 611 教室

① 概要（目的を含む）

大学 1 年生が入学時に持っているはずの学力や知識量を理解する。教員が高校生だった頃と現在の高校での科目構成や学習内容を比較することで、「私が高校の頃には」という思い込みを解消し、効果的な学修指導の一助とする。

② 到達目標

入学時の標準的な(または期待できる)学力や知識量を的確に予測することができる。また、その予測をもとに、適切な授業シラバス作成や学修指導を行うことができる。

③ 活動内容

ナガセの麻柄氏を招き、小学校から高校に至るまでの学習の質量における劣化の歴史や、大学入学時の学力の長期低落傾向などについて説明をうけた。

④ 評価

過去に使用された教科書と現在の教科書の内容を具体的に比較しながら、学習指導要領の変遷、広義の「ゆとり教育」がもたらした学習内容の低下について理解を深めることができ、今後の初年次教育や各教員の授業に大きな示唆が得られた。

また、指摘や分析がエビデンスに基づくものであったり、現在、小中学校で進めるタブレットの導入について、その効果に疑問を投げかけられたりするなど、麻柄氏の講演を通じて知的な面白さがあり、教員から大変好評であった。

（2）講演会「図書館の賢い使い方」

実施日　：　令和 2 年 11 月 26 日（木）　15：00～16：00（質疑応答含）

講　師　：　教育学術情報図書館　栗山美和課長補佐

場　所　：　オンライン（Zoom）

① 概要（目的を含む）

令和 2 年入試改革における学修内容の変化と今後の大学に求められる教育を理解する。

② 到達目標

教員が自身の研究教育のために図書館の積極的かつ効果的な利用ができるようになる。また、学生に対し、図書館の実践的かつ有効な利用方法を説明できるようになる。

③ 活動内容

図書館の栗山課長補佐（観光学部担当）を招き、教員自身のための図書館の利活用方法と、学生に指導する際のポイントなどについて説明をうけた。

④ 評価

在職が長くとも積極的に図書館を利用していない教員にとっては教育学術情報図書館の利用方法をリフレッシュする、逆に着任間もない教員にとっては教育学術図書館の利用方法をまとめて知る、大変良い機会となった。他学部における図書館利用に関する指導など参考になる情報もあって概ね好評であった。

（3）研修会「ハイブリッド授業講習会」

実施日　：　令和 3 年 3 月 25 日（木）15：00～17：00

場　所　：　大学教育棟 2014 512、513 教室

① 概要（目的を含む）

春学期から予想される対面と遠隔の同時対応授業（ハイフレックス授業）の実施方法について教員間で知識を共有し、不安なく新学期の授業に望めるようにする。

① 到達目標

対面と遠隔の同時授業を円滑に実施できるための、機材・アプリの設定方法を習得する。

② 活動内容

中村哲教授からハイブリッド型授業の区分に関する解説をうけた後、小林等准教授から実際にハイフレックス授業を教育棟の教室で行う際の PC と機材の接続方法を学んだ。

③ 評価

登校辞退者を想定してハイフレックス授業の準備が必要であることが教員から提起され、教員が自主的に知識の共有を行おうとした大変有意義な FD 活動であった。各自が PC を持参し、実際に接続してみる、どのように学生に見えているか、聞こえているかまでの確認を行った。学部に前にもまして協力的な雰囲気が醸成されたことも大変好ましい。

（4）学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

今年度から大学による Web 方式のアンケートを利用して観光学部開講科目で学生による授業評価を行った。データの集計結果は UNITAMA で科目担当教員が参照できる。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度 1,066 に対して、今年度は 983 と減少した。主な原因は、授業がオンラインだけとなったうえ、アンケートが Web 方式に変更されたため、アンケートへの回答を学生の自主性にゆだねることになったことによる授業評価アンケートの回答数の減少と思われる。なお、授業外学修の時間が昨年度と比較して顕著に増加していた。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度 649 に対して、今年度は 1,915 と著しく増加した。春学期の低調な回答を反省し、学生に回答を根気強く呼びかけた結果と考えられる。春学期と同様に、授業外学修の時間が前年度と比べ増加しており、オンライン授業の良い意味での副作用と推測できる。

2020年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果

観光学部全体

回答者（のべ）983人　回答率 46.4%

あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）

	比率
4時間以上	4%
3時間～4時間未満	7%
2時間～3時間未満	32%
1時間～2時間未満	46%
1時間未満	10%

2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	14%
そう思う	44%
どちらともいえない	30%
そう思わない	7%
全くそう思わない	4%

3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	40%
そう思う	50%
どちらともいえない	8%
そう思わない	1%
全くそう思わない	0%

4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	41%
そう思う	46%
どちらともいえない	11%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	32%
そう思う	51%
どちらともいえない	14%
そう思わない	3%
全くそう思わない	0%

6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）

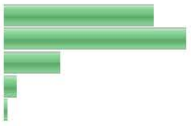
	比率
とてもそう思う	20%
そう思う	50%
どちらともいえない	27%
そう思わない	2%
全くそう思わない	0%

7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）

	比率
とてもそう思う	25%
そう思う	55%
どちらともいえない	18%
そう思わない	2%
全くそう思わない	0%

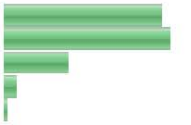
教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか（必須）



	比率
とてもそう思う	37%
そう思う	45%
どちらともいえない	14%
そう思わない	3%
全くそう思わない	1%

9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか（必須）

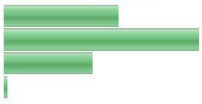


	比率
とてもそう思う	39%
そう思う	41%
どちらともいえない	16%
そう思わない	3%
全くそう思わない	1%

10. 教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか（必須）

	比率
とてもそう思う	37%
そう思う	45%
どちらともいえない	16%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

11. 授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか（必須）

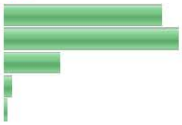


	比率
とてもそう思う	28%
そう思う	48%
どちらともいえない	22%
そう思わない	1%
全くそう思わない	0%

12. 授業時間を有効に使っていましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	34%
そう思う	49%
どちらともいえない	13%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

13. 質問に適切に対応してくれましたか（必須）

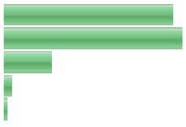


	比率
とてもそう思う	39%
そう思う	43%
どちらともいえない	14%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか（必須）

	比率
とてもそう思う	36%
そう思う	46%
どちらともいえない	16%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか（必須）



	比率
とてもそう思う	42%
そう思う	44%
どちらともいえない	12%
そう思わない	2%
全くそう思わない	1%

2020年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果

観光学部全体

回答者（のべ）1915人　回答率51.4%

あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか（必須）

	比率	人数
4時間以上	5%	52人
3時間～4時間未満	6%	56人
2時間～3時間未満	25%	242人
1時間～2時間未満	43%	420人
1時間未満	22%	214人

2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	22%	218人
そう思う	38%	374人
どちらともいえない	28%	272人
そう思わない	8%	83人
全くそう思わない	4%	37人

3. 授業に意欲的に取り組みましたか（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	42%	410人
そう思う	46%	454人
どちらともいえない	10%	103人
そう思わない	2%	15人
全くそう思わない	0%	2人

4. 授業の内容に興味は持てましたか（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	45%	444人
そう思う	43%	419人
どちらともいえない	10%	97人
そう思わない	2%	17人
全くそう思わない	1%	7人

5. 授業の内容を十分に理解できましたか（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	36%	352人
そう思う	50%	492人
どちらともいえない	11%	112人
そう思わない	2%	21人
全くそう思わない	1%	7人

6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか（必須）

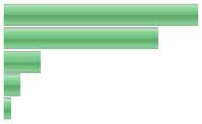
	比率	人数
とてもそう思う	28%	278人
そう思う	49%	485人
どちらともいえない	21%	204人
そう思わない	1%	12人
全くそう思わない	1%	5人

7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	31%	308人
そう思う	51%	504人
どちらともいえない	16%	154人
そう思わない	2%	15人
全くそう思わない	0%	3人

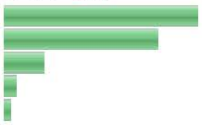
教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか（必須）



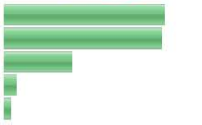
	比率	人数
とてもそう思う	48%	472人
そう思う	38%	371人
どちらともいえない	9%	84人
そう思わない	4%	35人
全くそう思わない	2%	22人

9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか（必須）



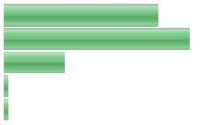
	比率	人数
とてもそう思う	48%	477人
そう思う	38%	372人
どちらともいえない	10%	95人
そう思わない	3%	25人
全くそう思わない	2%	15人

10. 教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか（必須）



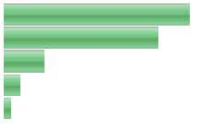
	比率	人数
とてもそう思う	40%	391人
そう思う	39%	379人
どちらともいえない	17%	169人
そう思わない	3%	27人
全くそう思わない	2%	18人

11. 授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか（必須）



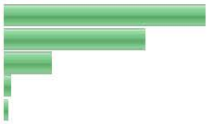
	比率	人数
とてもそう思う	38%	372人
そう思う	46%	448人
どちらともいえない	15%	146人
そう思わない	1%	13人
全くそう思わない	1%	5人

12. 授業時間を有効に使っていましたか（必須）



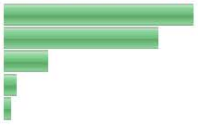
	比率	人数
とてもそう思う	46%	449人
そう思う	38%	376人
どちらともいえない	10%	100人
そう思わない	4%	37人
全くそう思わない	2%	22人

13. 質問に適切に対応してくれましたか（必須）



	比率	人数
とてもそう思う	50%	495人
そう思う	35%	342人
どちらともいえない	12%	114人
そう思わない	2%	20人
全くそう思わない	1%	13人

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか（必須）



	比率	人数
とてもそう思う	47%	460人
そう思う	38%	370人
どちらともいえない	11%	108人
そう思わない	3%	25人
全くそう思わない	2%	21人

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか（必須）

	比率	人数
とてもそう思う	53%	524人
そう思う	37%	363人
どちらともいえない	7%	68人
そう思わない	2%	19人
全くそう思わない	1%	10人

４　昨年度（令和２年度）に提案された予定・課題の達成度について

大学教員が「ものを知らない」と嘆く学生の基礎学力の低下の深い意味合いと背景を解き明かしていただいた麻柄氏の講演は興味深く、かつ非常に有益であった。「そこまで学習内容が劣化していたのか」と教員を驚かせ、嘆くばかりでは済まない実情を理解させたことで、今後の授業内容や進め方に大いに参考になった。十分に目標を達成できたと言えるだろう。

2 つ目の講演会で Teams の利用方法に関する解説を予定していたが、秋の時点では令和 3 年度の Teams の位置づけや授業形態が明らかでなかったことから、広義の FD として必須である図書館の利用促進にテーマを変更した。受講後の教員の感想からも「知っているはず」と思われる知識の再確認や更新が必要であると痛感され、開催意義があったと思われる。

予定外で、教員間から自発的に提唱されたハイブリッド授業方法を知る研修会は、内容も充実し目標を達成したが、それ以上に FD 活動が「やらされるもの」ではなく、自主的に企画・実行されたことの意味が大きかったと考える。今回学部に生じた建設的な動向を大切にし、今後の FD 活動の基礎としていきたい。

５　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

令和 2 年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、授業評価アンケートを実施する。コロナ禍対応に追われる中で過ぎた令和 2 年度ではあったが、今後のハイブリッド授業の効果的な運営方法など今後も必要と思われる新しい教育方法への習熟が課題であることを浮き彫りにした。一方で、観光学部では教員とカリキュラムの入れ替わり時期に差し掛かり、学部の教育力を見直し改めての向上を目指すという課題にも直面している。これら大きな 2 つの課題解決に向けて、適切な方向づけをしながら地道にかつ高速に PDCA サイクルを回転させていきたい。

３．教師教育リサーチセンターの活動

１　教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

２　教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、次長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

３　令和 2 年度の活動内容

（1） 教師教育フォーラム

① 概要（目的を含む）

社会の変化に対応すべく、教育現場では、新たに英語やプログラミング等を教科化する動きが進み、また、学校現場のみならずその周辺で起こる様々な事例にも、的確に対応することが、教員としての責務となってきている。

こうした状況に対応すべく、先般、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会より「教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取り組みについて」が示された。GIGA スクール構想により、児童生徒「1 人 1 台端末」の教育環境が充実することで、児童生徒の個別最適な学びと協働的な学びを実現することが重要となっており、さらに、児童生徒の ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の力も求められている。教員養成大学においては、学生が教師の ICT 活用指導力を身につけることも必要となっており、加えて、新型コロナウイルス感染症に係る最新の動向も踏まえながら、その対応スピードも求められている。

ついては、今年度の教師教育フォーラムでは、このような状況下における、養成・採用・研修の一体的改革を踏まえ、ICT を活用した学びについて講演者、出席者がともに考えるフォーラムとして開催した。

② 到達目標

オンライン開催となり、200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

日　時：令和 2 年 12 月 13 日（日）9：30～15：30　於：大学教育棟 2014 より配信

テーマ：『ICT を活用した学び　―効果的な ICT 活用に向けて―』

【プログラム】

午前の部

○講演「生涯にわたって能動的に学び続けるための 1 人 1 台端末の活用とは」

東京学芸大学　准教授　高橋　純　氏

○シンポジウム

・「玉川学園における ICT を活用した授業の実際」

玉川学園低学年　教諭　溝口　広久　氏

・「養成段階における ICT 活用の指導」

玉川大学教職大学院　教授　佐藤　修　氏

・「町田市教育委員会の ICT 教育への取り組み」

町田市教育委員会教育センター　所長　林　啓　氏

【コーディネーター】玉川大学教師教育リサーチセンターリサーチフェロー

教育学部教授　森山　賢一

午後の部

○分科会:教職大学院

①道徳　②ICT ③英語教育　④国語　⑤特別支援教育　⑥算数

④ 評価

ICT を活用した学び　―効果的な ICT 活用に向けて―」をメインテーマに掲げ、午前の部では、「生涯にわたって能動的に学び続けるための 1 人 1 台端末の活用とは」と題し、東京学芸大学 高橋純准教授を迎えた講演、続いて私立小学校の取り組み、養成大学における ICT 活用の指導の実際、さらに教育委員会から、公立学校での具体的な取り組みについて、ご講演をいただいた。午後の部では、本学の教職大学院教授による分科会を行い、ICT 教育、英語・国語・算数教育、特別支援教育について、シンポジウム、講演、演習等を行い、ご参集の皆様と考える機会を持つことができた。

新型コロナウイルス感染防止対応により、初めてのオンライン開催となったが、近隣地域だけでなく、遠方の現職教員等学校関係者、教員養成に携わる大学教職員、教員志望学生、教育研究者、教育委員会関係の方々等、教育に携わる方々にも参加して頂くことができたことは有益だった。

午前の部、午後の部を併せ、約 200 名の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

（2） 令和 2 年度教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

いよいよ本格始動する GIGA スクール構想の具現化に向けて、児童生徒「1 人 1 台端末」が配備されつつある。こうした教育環境の充実による個別最適な学びと協働的な学びを実現すること、ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、さらに教員養成大学には ICT 活用指導力の養成が求められていることについて、文部科学省の取り組み指針等の最新情報を提供する機会としたく、オンライン配信にて研修会を開催した。各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

急速に進む GIGA スクール構想の具現化による「個別最適な学びと協働的な学び」の実現により変わっていく教育現場と新たに教師に求められる事項を共有し、教員養成大学として、これからの教育活動への意識を高める。また、具体的に電子黒板等の

ICT 教育機器の仕様等を知し、今後の教員養成教育の手法研究を目指す。

③ 活動内容

日　時：　令和 3 年 3 月 2 日（火）10：00～11：30

場　所：　オンライン配信（Zoom）

テーマ：　「ICT を活用した児童生徒の個別最適な学びの実現」

1.ICT 活用指導力充実に向けた文部科学省の今後の取り組み指針

教師教育リサーチセンターリサーチフェロー/教育学部 教授　森山 賢一

2.電子黒板の活用 ※動画配信

シャープマーケティングジャパン株式会社　石川 万美子 氏

対　象：　大学教員、事務職員

内　容（目的）：いよいよ本格始動する GIGA スクール構想の具現化に向けて、児童生徒「1 人 1 台端末」が配備されつつある。こうした教育環境の充実による個別最適な学びと協働的な学びを実現すること、ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、さらに教員養成大学には ICT 活用指導力の養成が求められていることについて、文部科学省の取り組み指針等の最新情報を提供する機会とする。

【プログラム】

講　　演 1.「ICT 活用指導力充実に向けた文部科学省の今後の取り組み指針」

教師教育リサーチセンターリサーチフェロー/教育学部 教授 森山 賢一

2.電子黒板の活用 ※動画配信

シャープマーケティングジャパン株式会社　石川 万美子 氏

④ 評価

文部科学省が推進する GIGA スクール構想とそれによる「個別最適な学びと協働的な学び」の実現に向けた現状の確認。さらに、教育現場と新たに教師に求められる ICT 活用指導力を共有し、教員養成大学としての、これからの教育活動への意識を高める機会となった。また、近年、学校に多く設置されている電子黒板の仕様等を知り、教育活動の中での具体的な使用方法のイメージを持つことができ、今後の教員養成指導時に欠かせない知識を持つことができた。

（3） 令和 2 年度教師教育リサーチセンター客員教授対象 研修会

① 概要（目的を含む）

先の FDSD 研修を受け、改めて GIGA スクール構想と Chrome の使用体験をすることにより、今後の教員養成にかかわる具体的なイメージを持つことを目的とする。

② 到達目標

教師教育リサーチセンター客員教授の積極的な参加と、Chrome の実機使用体験を共有する機会を持ち、今後の教員養成指導とその手法を検討する機会を作る。

③ 活動内容

【プログラム】

日　時： 令和 3 年 3 月 25 日(木) 9 時 30 分～11 時 30 分　12 時 30 分～14 時 30 分

（同内容を 2 回実施）

テーマ： 1.GIGA スクール構想について（教職大学院 佐藤修教授）
2.Chrome Book の活用について（株式会社 JMC）
対　象： 教師教育リサーチセンター教職サポートルーム 客員教授
内　容(目的)： 教育現場で見られる GIGA スクール構想の具現化と Chrome Book の使用を体験し、今後の教員養成指導に活かす。

④ 評価

同内容を2回開催し、参加者合計18名。教育現場及び教員養成大学で見られるGIGAスクール構想具現化の現状を知り、Chrome Book の使用体験をすることにより、今後の教員養成を担う教員の意識を高める機会となった。

4　昨年度（令和元年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和元年度の「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」は、新型コロナウイルス感染防止対応により、いずれも開会を延期したため報告事項なし。

5　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

なお、独立行政法人教職員支援機構「玉川大学センター」としての研修等についても、今後は FD 活動として報告をしていきたい。

以上

４．ELF センターの活動

1　FD・SD 活動への取組理念・目標

COVID-19 のパンデミックにより、世界中の教員は対面教育から急きょ遠隔教育に移行することを余儀なくされ、教員研修が特に重要になった。さまざまなバックグラウンドを持つ教員が行うリンガフランカ（ELF）教育として、英語を豊かにするユニークなプログラムで知られる玉川大学の ELF センター（CELF）も、これらの変化のなか、教員をどのように支援するかという課題に直面した。

CELF 教員研修（FD）は、教員のニーズをサポートし、遠隔教育のスキルを向上させるために、さまざまな FD ワークショップ、講義、特別セミナー、オンラインディスカッションを 31 回提供し、教員がプログラムを提供できるように支援を行った。可能な限り最高のオンライン学修の環境と、リンガフランカとしての英語の理解と使用を促進する。このレポートでは、教員研修活動と研修成果について説明し、過去 1 年間の CELF FD 調査の結果を明らかにする。 令和 3 年度の CELF FD のいくつかの計画も提示する。

ELF プログラムの成果にとって重要なことは、各教員の教育の質である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業を非常勤講師が担当しているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。ELF センターには世界初の共通語としての英語を学ぶ ELF（English as a Lingua Franca）プログラムに誇りを持ち、さまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる。 令和 2 年度は外国語の学修と教育に豊富な経験を持ち、資格のある 59 名の ELF 教員が授業を担当した。教員の出身国は、21 ヶ国（オーストラリア、ブラジル、ブルガリア、カナダ、中国、エジプト、フランス、ドイツ、インド、アイルランド、イタリア、日本、韓国、ニュージーランド、フィリピン、ロシア、スリランカ、タイ、英国、米国、ベトナム）からなり、アラビア語、ブルガリア語、中国語、英語、フィンランド語、ドイツ語、日本語、韓国語、ポルトガル語、ロシア語、シンハラ語、タガログ語、テルグ語、タイ語、ベトナム語など、さまざまな母国語を持つ。それらすべてが協力して、リンガフランカとしての英語の使用の認識が強調される言語学修環境を提供している。

FD 活動は彼らにとって互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2　ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、

e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELF Journal, CELF Forum, Research, CELF Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3　令和 2 年度の活動内容

（1）講演会・ワークショップの開催

1) CELF-ELTama Forum for English Language Teaching

①概要

ELF センターは令和 2 年度も ELTama と合同で CELF-ELTama Forum for English Language Teaching を開催した。

②達成目標

・ELF 教員が授業で活用できるリソースを共有する。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
・学園内の英語教員を集める。
・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
・これらの活動によって ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・玉川大学 ELF センターの国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を広める。

③活動内容

以下のワークショップや発表大会がオンラインにより開催された。

・令和 2 年 8 月 22 日（土）CELF-ELTama Forum for English Language Teaching フォーラム

④CELF-ELTama フォーラムの評価

COVID-19 のパンデミックの影響で令和 2 年度の CELF-ELTama フォーラムは、今回初めてオンラインで行われた。参加者が減って 70 名程になったが、ELF センター所属の教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。今年度の発表件数は 13 件で、昨年度より ELF 非常勤講師の発表が増え、ゲストスピーカーの発表も素晴らしく、また学内の英語教員達が協力できたことが非常に良かったとの感想をいただいた。

・開催 1 ヶ月前にはイベントのポスターを完成させ、昨年度より早めに広報を始めることができた。
・インターネット上でさまざまなホームページ（玉川大学のホームページ、JACET SIG、ELT Calendar）にイベントの広報ができた。
・E メールリスト（CELF Mailing List, JACET SIG Mailing List）に CELF-ELTama フォーラムのイベントの広報ができた。

2) 講演会、CELF　特別講演会

①概要

ELF センターは令和元年度に引き続き CELF Special FD 特別講演会を開催した。昨年度より多く、オンラインクラスの内容を中心に、英語教育、ELF 教育、言語政策、など、さまざまな研究分野の研究者や教員を CELF Special FD 特別講演会に招待した。

CELF FD は、教員の研究と業績、および年間を通じての専門能力開発を奨励し、強化するのに役立つ。今年は、すべての FD 特別ワークショップで、教員が自分の研究を紹介し、Zoom を介して専門知識を共有する機会が提供された。上記の CELF Special FD 特別講演会に加えて、次のようにいくつかの My Share 特別ワークショップが開催された。

②達成目標

・ELF 教員の国際共通語としての英語（ELF）教育の研究や教育法を高める。
・ELF 教員や学園内の英語教員を集める。
・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
・これらの活動により ELF センターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
・これらの活動によって ELF センターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。
・国際共通語としての英語（ELF）研究、言語政策、言語教育への応用に関する知識を深める。

③活動内容

1)講演会の開催

・ELF Special Workshop- My share ①

講　演 : Practical approaches to evaluating writing produced in a process-product writing classroom

実施日：令和 2 年 6 月 19 日（金） 17：00～18：00

講　師：ロバートソン，チャールズ　エドワード　 ELF センター非常勤講師

・ELF Special Workshop- My share ②

講　演：PearDeck: An interactive presentation tool

実施日：令和 2 年 6 月 22 日（月） 17：00～18：00

講　師：ビーバーフォード，カーティス　大学院教育学研究科 教育学専攻 教授

・ELF Special Workshop- My share ③

講　演：Possible uses for Flipgrid in ELF courses

実施日：令和 2 年 6 月 29 日（月） 17：00～18：00

講　師： ビーバーフォード，カーティス　大学院教育学研究科 教育学専攻 教授

・ELF Special Workshop- My share ④

講　演:Learning with texts: Expanding extensive reading options for the With Corona Era

実施日：令和 2 年 10 月 6 日（火） 17：00～18：00
講　師：フェリーズ，ジョナサン　 ELF センター非常勤講師

・ELF Special Workshop- My share ⑤
講　演：Using TED-talks to create ELF-oriented lessons
実施日：令和 2 年 6 月 26 日（金） 17：00～18：00
講　師：マティカイネン，ティーナ　観光学部准教授

・ELF Special Workshop- My share ⑥
講　演：Topic: Making and editing videos for online classes with iPad/iPhone
実施日：令和 2 年 11 月 2 日（月） 17：00～18：00
講　師：キム，ミソ　ELF センター助教

（2）研究会・研修会・ワークショップなど
①概要
・Blackboard の使い方に関しての理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

②達成目標
・非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
・ELF 研究について最先端の知識を深める。
・ELF の理念について教員間で知識を深める。
・言語教育について教員間で知識を深める。

③活動内容
1)ワークショップ・講演会等
・Blackboard ワークショップ（2 回）
実施日：令和 2 年 4 月 27 日（月）17：00～18：00　参加者 57 名
令和 2 年 9 月 28 日（月）17：00～18：00　参加者 7 名
講　師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・Zoom and Online teaching FD ワークショップ：オンライン授業（3 回）
実施日：令和 2 年 4 月 28 日（火）17：00～18：00　参加者 24 名
令和 2 年 5 月 4 日（月）17：00～18：00　参加者 7 名
令和 2 年 11 月 2 日（月）17：00～18：00　参加者 10 名
講　師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・成績評価 and UNITAMA FD　講演会、ワークショップ（2 回）

実施日：令和 2 年 5 月 8 日（金）17：00～18：00　参加者 17 名
令和 3 年 1 月 18 日（月）17：00～18：00　参加者 9 名
講　師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

・ELF Discussion Session（2 回）
実施日：令和 2 年 10 月 16 日（金）17：00～18：00
令和 3 年 1 月 15 日（金）17：00～18：00
講　師：チャイクル，ラサミ　ELF センター助教

④評価

ELF センターの教員は Blackboard を学内で活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF 教員の多読と M-Reader の仕組みの理解と円滑な利用をサポートする ELF および言語意識に関するワークショップは、教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に活かすかについて考慮していることがわかった。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見ることができた。

ELF Discussion Session は平成 30 年度から新しく FD セッションとなった Lunch Time Meeting に基づいて、ELF センターの FD 担当と非常勤講師が、クラス管理、ELF 教育法、学生評価の質問、問題、問題解決について、直接話し合うことができ、また、さまざまな研究テーマや FD の感想や次年度の提案を聞くことができた。

（3）ELF センター教員オリエンテーション

①概要

・ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。この行事は単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動などさまざまな FD 活動を含んだ内容となっている。

②達成目標

・ELF 研究について最先端の知識を深める。
・ELF の理念について教員間で知識を深める。
・ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。

③活動内容

ELF 教員の次年度オリエンテーション

・令和 2 年度秋学期 ELF 教員の次年度オリエンテーション①
実施日：令和 2 年 9 月 18 日（金）10：00～15：30
新任非常勤講師のオリエンテーション（10：00～12：30）
非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（14：00～15：30 オ

ンラインビデオ）

講　師：マクブライト，ポール　ELF センター長代理

鈴木　彩子 ELF 副センター長、ELF センター専任教員

・令和 3 年度春学期 ELF 教員のオリエンテーション②

実施日：令和 3 年 3 月 22 日（月）11：00～16：30

新任非常勤講師のオリエンテーション（14：30～16：30）

非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（13：00～16：30 Zoom）

講　師：マクブライト，ポール　ELF センター長代理

鈴木　彩子 ELF 副センター長、ELF センター専任教員

④評価

秋学期開始前の 9 月 18 日と次年度春学期開始前の 3 月 22 日に開催された。午前のセッションでは各教員に ELF プログラム、オンラインクラス、教科書、カリキュラム、CELF チューター制度、クラス管理、テクノロジー指向が提供された。午後のセッションでは、プログラム説明、年間授業計画に関する説明、教員の育成、クラスの管理と評価、広範囲にわたる読書、新たな ELF のオリエンテーションに関する情報、そしてキャンパスツアーに焦点を当てた。参加者にとっては非常に有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員で実施内容についての改善点を協議することにしている。

当日参加できなかった非常勤講師は、後日別途実施するため、参加率は 100%となる。年度途中の新任講師へのオリエンテーションも実施している。

（4）学生による授業評価アンケート

①概要

令和 2 年度の秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生には授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示した。アンケートは 18 項目あり、学生は、教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF 教育、ELF Study Hall 2015 に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

②達成目標

授業評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあった。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあった。

③活動内容

秋学期授業評価アンケートでは、1,994 名にアンケートを実施し評価回答を得た。

④評価

これらのアンケートのデータはELFプログラムに対する評価として使用され、令和3年度の教育プログラムの構築のために使用される。おおむね学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。令和3年度は授業評価アンケート調査を春学期と秋学期（年2回）に行い、それぞれの教員に学生 からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらう。

（5）教員による授業内容アンケート

①概要

令和2年度の秋学期の最後に、ELFセンター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。アンケートは14項目あり、教員は、教科書、教授方法、Blackboardシステム、TOEIC、ELFに対する意識、ELFセンターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの改善計画や研究の目的で使用される。

②達成目標

・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。
・カリキュラムを改革すること。

③活動内容

秋学期アンケートは42名（71.1%)から回答を得た。

④評価

CELF FD調査の結果

CELF FDは、CELFの教員がELFの認識を教え、強化すると同時に、専門能力の開発、学業成績、生涯学習を促進することを目的としている。この目的のために、CELFは令和2年度にさまざまなFDイニシアチブを実施した。FDをチェックおよび改善するために、CELF FD調査が年に2回実施され、CELF教員調査が学年末に実施され、教員が対応し、CELF FDのトレーニングとサポートを評価している。

教員の調査では、CELF FDトレーニングへの満足度と、CELF教員として受けたサポートに関連する5つのリッカート尺度の項目に匿名で回答するよう教員に求めた。今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。

（6）他大学との言語教育交換研究会

①概要

大学の言語教育および英語カリキュラム、日本の教育の課題と展望について今後の教員養成における指導や教育実践に活かすため、他大学と連携を図り言語教育交換研究会を実施した。

②達成目標

・ELF 研究について互いに最先端の知識を深める。
・ELF の理念について互いに知識を深める。
・ELF センターの教育法を効果的に運営する知識を深める。
・ELF センターの教育法を効果的に運営する知識を広める。
・参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③活動内容

CELF コラボ FD

CELF と大学英語教育学会（JACET）の言語政策研究会（SIG）との特別な共同会議が、令和 3 年 2 月 6 日に Zoom を介して開催された。CELF からの参加者は鈴木彩子 ELF 副センター長、参加大学は福岡大学、浜松学院大学、桜美林大学、名城大学、武蔵高等学校中学校、獨協大学、東京工科大学、津田塾大学、早稲田大学であった。ゲストスピーカーは次のとおりである。

講師：マクブライト，ポール　ELF センター長代理
講演：“ELF-aware pedagogy: Areas of convergence with language policy.”
「ELF を意識した教育学：言語政策との収束分野」

講師：杉野俊子氏　元英語教授、国防アカデミー、工学院大学、浜松学院大学講師。第二言語習得（SLA）と言語政策について幅広く発表している。The Language Teacher の日本語編集者を務め、体育連盟に所属している。 FIEP のワールドディレクターボード、および JACET 言語ポリシーSIG の責任者。
講演：“Focusing on the Development of Quality of Life: Is it the aim of EFL and EFL education?”
「生活の質の向上に焦点を当てる：それは EFL と EFL 教育の目的ですか？」

講師：波多野一真氏　経営学部准教授、創価大学国際部副部長。ニューヨーク州立大学バッファロー校で認知心理学の修士号、TESOL の修士号、第二言語および外国語教育の博士号を取得。現在の関心には、言語政策、機械翻訳、英語教育が含まれる。
講演：“ELF-aware pedagogy: Areas of convergence with language policy.”
“Global Communication Plan 2025: Machine Translation and the Future of English Education in Japan.”
「グローバルコミュニケーションプラン 2025：機械翻訳と日本の英語教育の未来」

講師：小田眞幸 文学部長、JACET 副学長、ELF センター前センター長
講演：“Educational Policy and Social Practices: The Teacher Education Core Curriculum.”
「教育政策と社会慣行：教師教育コアカリキュラム」

閉会の挨拶は、ELF 副センター長の鈴木彩子教授が述べた。この特別なコラボレーションイベントは大成功を収め、30 人以上の参加者があった。

④評価

他大学との言語政策、外国語プログラムの知識交換については初めての試みであり、非常に重要なことを再認識した。特に言語政策に関する講義や意見交換を実施する機会ができた。ELF センターの言語教育プログラムは、日本において世界の共通語としての英語を学べる ELF 教育がよく知られており、さまざまな大学から研究や知識交換の提案をいただく。今回も他大学の教員と ELF センターの専任教員による特別コラボレーションイベントが開催された。開会の挨拶として、ELF の紹介を行うことができた。加えて、他大学の教員と ELF センターの教員が英語の教育と学修や言語政策について意見交換を行った。この機会に互いの言語教育プログラムの活動内容や知識を交換し、また参加者同士のネットワークを構築するという目標も達成できた。

（7）ジャーナルの出版

ジャーナルを出版することは、ジャーナルの論文が数多く引用をされた場合、玉川大学が世界におけるランキングをアップグレードするのに役立つため、大学名を国内および国際レベルで宣伝するための重要なツールになる。今年から、The Center for ELF Journal　にかわって、The Center for ELF Forum を発行し、オンラインジャーナルに変更することとした。

①概要

令和 2 年度は、ミリナー，ブレット ELF センター准教授とコーテ，トラヴィス観光学部准教授がジャーナル担当となり、新たな The Center for ELF Journal をオンライン出版した。 ELF センターの教員 10 名が査読者となりそれぞれの投稿論文を審査し、The Center for ELF Forum の第 1 号を発行した。

https://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/journal.html

②達成目標

・授業運営を改善する。
・自発的学修についてのアイディアを共有する場を設ける。
・教員間で高い学識を探究する。
・ELF に対する学識を共有する。
・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③活動内容

・The Center for ELF Forum 第 1 号をオンライン出版した。

今年度はコロナの影響で、オンライン出版し、学内や学外にオンラインリンクを公開した。ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載する。さらに、教員のアカデミッ

クポータル（academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など）にも掲載する。

④評価

The Center for ELF Forum は各教員に配付され、投稿者自身も満足度が高いものになった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手に取ることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

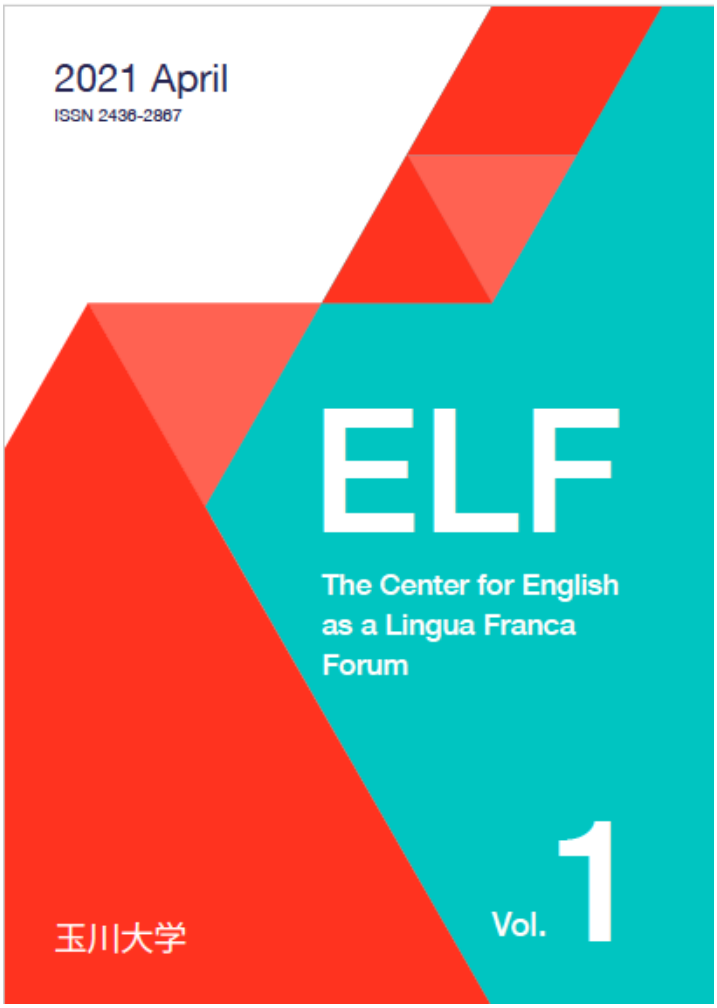


図 1. The Center for ELF Forum 第 1 号

4　今年度（令和 2 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度はコロナパンデミックの影響で、初めて急なオンライン授業への変更となったが、提出された全ての予定・課題が実施された。FD Workshop に関しては、少なくとも毎月 2 回行われ、多い月は 5 回も行われた。特に、オンライン授業の対応方法の Workshop や勉

強会の開催、日々のオンライン授業の課題について非常勤講師と共に話し合える場を設けるなど、新たな取り組みを行った。

日本国内の会議やその他の学術イベントでは 18 件の発表があった。これらは、パネルディスカッションと多数のポスタープレゼンテーションで構成された（表 1 を参照）。特に、愛知大学フォーラムでは、チャイクル，ラサミ ELF センター助教と鈴木彩子文学部教授・ELF センター副センター長が講演者として招待された。CELF のセンター長代理であるマクブライド，ポール准教授は、CELF および JACET 言語政策 SIG 合同セミナーとして英語センターの主要なプレゼンターとなった。

今年度の ELF センター発刊のジャーナルでは ELF スキルや評価に焦点を当て、トレーニングや活発な研究活動について記載している。表 1 は令和 2 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。

表 1. 令和 2 年度 4－9 月の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国外オンライン発表	9
国内オンライン発表	18
論文を投稿・出版	18
科学研究費助成事業	12

表 2. 令和 2 年度の ELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
無	Chaikul, R., & Milliner, B. (2020). A report on faculty development and research at the Center for English as a Lingua Franca. *The Center for English as a Lingua Franca Journal, 6*, 54-82. http://doi.org/10.15045/ELF_0060112	Rasami Chaikul & Brett Milliner
有	Milliner, B. (2020). “Forced pleasure reading may get you neither”: A reply to Jeff McQuillan. *Language and Language Teaching, 9*(2), 1-4.	Brett Milliner
有	McBride, P. (2021). Considering English teaching in the context of ELF. In H. Lee & B. Spolsky (Eds.*), Localizing global English: Asian perspectives and*	Paul McBride

有	Kuroshima, S. (2020). Therapist and patient accountability through tactility and sensation in medical massage sessions. *Social Interaction: Video-Based Studies of Human Sociality, 3*(1). https://doi.org/10.7146/si.v3i1.120251	Satomi Kuroshima
有	Ishikawa, T. (2021). Global Englishes and 'Japanese English'. *Asian Englishes, 23*(1).	Tomokazu Ishikawa
有	Borlongan, A. M., & Ishikawa. T. (2021). English in Japan and Japanese English: Introduction to the special issue. *Asian Englishes, 23*(1).	Ariane Borlongan & Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2020). EMF awareness in the Japanese EFL/EMI context. *ELT Journal, 74*(4). 408-417. https://doi.org/10.1093/elt/ccaa037	Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2020). Liven up the English classroom with academic learning: Examples from cognitive psychology. *Center for English as a Lingua Franca Journal, 6*, 67-77. http://doi.org/10.15045/ELF_0060107	Tomokazu Ishikawa
有	Ishikawa, T. (2021). Rigour in ELF language attitude research: An example of conversational interview study. In K. Murata (Ed.), *ELF research methods and approaches to data and analyses: Theoretical and methodological underpinnings* (pp. 258-275). Routledge.	Tomokazu Ishikawa
有	Okada, T. (2020). How did we end up here? Narratives of Filipinas teaching English in Japan. In D. H., Nagatomo, K. A. Brown, & M. L. Cook (Eds.), *Foreign female English teachers in Japanese higher education: Narratives from our quarter* (pp. 257-272). Candlin & Mynard. https://doi.org/10.47908/11	Tricia Okada

有	Milliner, B. (Ed.) (2020). Yokohama JALT MyShare2019 [Special issue]. *AccentsAsia,12*(2),1-46..	Brett Milliner
有	Kim, M. (2020). A qualitative analysis of EFL learners' discrimination of nearsynonyms in a data-driven learning task. *English Teaching, 75*(3), 25-47. https://doi.org/10.15858/engtea.75.3.202009.25	Miso Kim
有	Leichsenring, A. (2020). English L2 university teachers' perceptions on the influence of academic honesty on their teaching and teaching philosophies. In B. Montoneri (Ed.), *Academic misconduct and plagiarism: Case studies from universities around the world* (pp. 23-46). Lexington Books.	Andrew Leichsenring
有	Glasgow, G. P., Ng, P. C. L., Matikainen, T., & Machida, T. (2020). Challenging and interrogating native speakerism in an elementary school professional development programme in Japan. In S. A. Houghton & J. Bouchard (Eds.), *Native-Speakerism. Intercultural Communication and Language Education.* Springer. https://doi.org/10.1007/978-981-15-5671-5_9	Gregory Paul Glasgow, PAtrick Ng, Tiina Matikainen, Tomohisa Machida
有	Okada, T. (2020). Gender performance and migration experience of Filipino transgender women entertainers in Japan, *International Journal of Transgender Health*. https://doi.org/10.1080/26895269.2020.1838390	Tricia Okada
有	Textbook Jenks, D., Mikami, A., Ohyama, N., Takahashi, S., & Suzuki, A. (2020) *Real-time basic English*. 朝日出版社 [Asahi Press]	Daniel Jenks, Akira Mikami, Nakakatsu Ohyama, Sadao Takahashi & Ayako Suzuki
有	Okada, T. (2020). Negotiations in the gendered experiences of transpinay entertainers in Japan. *Journal of Contemporary Eastern Asia, 19*(2), 40-60. https://doi.org/10.17477/jcea.2020.19.2.040	Tricia Okada

有	Milliner, B. (2021). Stories of avid extensive readers in a university-level EFL course. *Journal of Extensive Reading, 8(1), 1-16. http://jalt-publications.org/content/index.php/jer/ issue/view/8*	Brett Milliner

５　今後（令和 3 年度以降）の予定・課題について

令和元年度に、全ての学部・学科が ELF 科目を履修することになり、ELF の授業規模が拡大した。全 8 学部・17 学科で ELF プログラムの履修が必修化され、春学期は約 2,300 名、秋学期は約 2,000 名の学生の ELF 教育を担うことになった。令和 3 年度、ELF センターは専任教員 10 名、非常勤講師 42 名、兼担教員 2 名、計 54 名の多彩な国籍の教員陣で構成されることになる。

FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. ELF センター主催の FD ワークショップを学内公開
2. Open Journal of Englishes in Practice ジャーナル出版
3. ELF の概念に関する講義
4. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
5. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
6. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
7. 学生や教員による授業評価アンケート
8. 効果的な教員オリエンテーション
9. 他大学との言語教育交換研究会
10. オンライン授業のサポート

５．ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

１．アンケート実施概要

（１）概要

令和2年度春学期・秋学期において、それぞれ最終授業日から学内ポータルサイト「UNITAMA」にて実施した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である（但し、各学部にてアンケートを実施する科目は除く）。

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答件数（延べ数）は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝268 名
　　秋学期＝276 名
実施開講クラス数：春学期＝444 クラス
　　秋学期＝472 クラス
回答件数：春学期＝17,663 件／11,328 件（64.1%）
　　秋学期＝18,683 件／9,313 件（49.8%）

（２）実施時期

春学期：7 月 13 日（月）～8 月 14 日（金）
秋学期：1 月 18 日（月）～2 月 12 日（金）
※上記期間中であれば学生は回答を修正し、再提出することができる。

（３）実施方法

令和 2 年度春学期より「UNITAMA」の Web アンケートにて実施した。春学期・秋学期ともに、学生には事前に「UNITAMA」掲示板において周知を行った。

（４）調査用紙　（p.140 参照）

２．集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群、人文科学科目群、社会科学科目群、 自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群

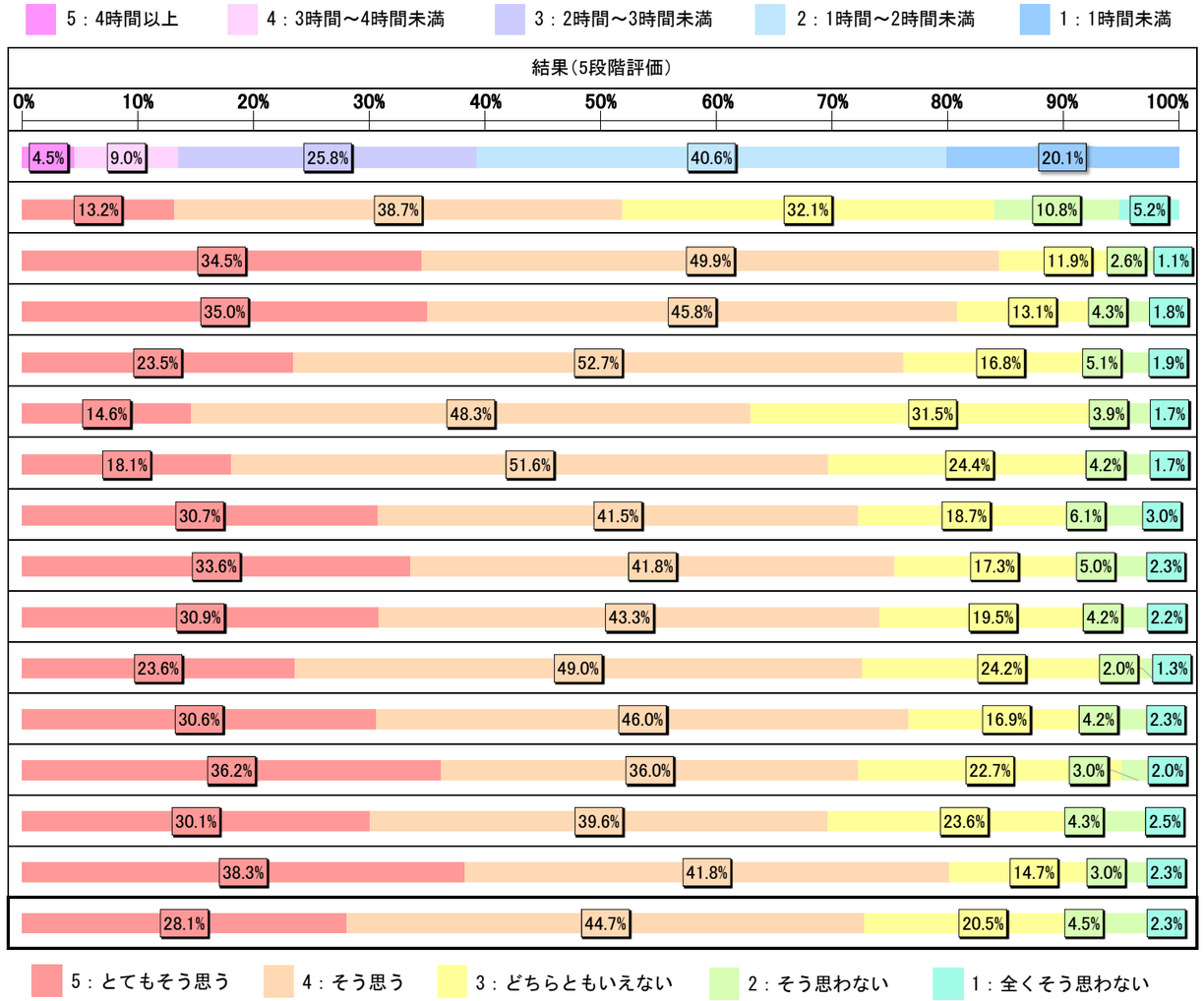
また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者及び各学部にフィードバックし、科目群ごとの平均値をホームページで公表している。
（https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/）

令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

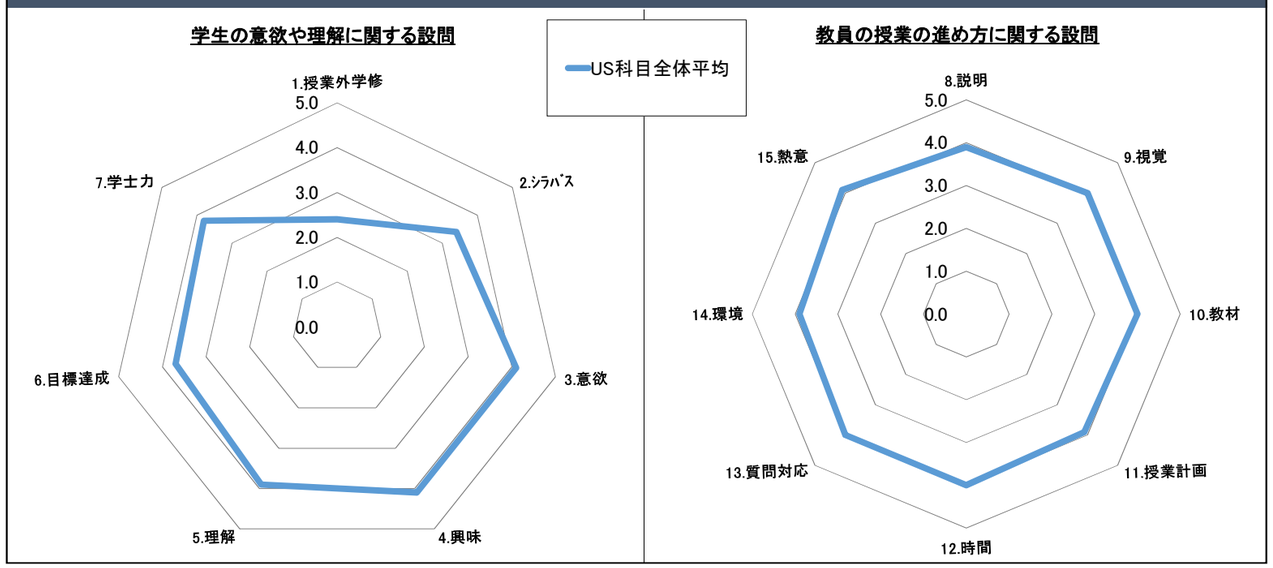
US科目全体　　履修者数： 17,663 名　　回答者数： 11,328 名　　回答率： 64.1 %

			設問	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1
総合評価				3.8

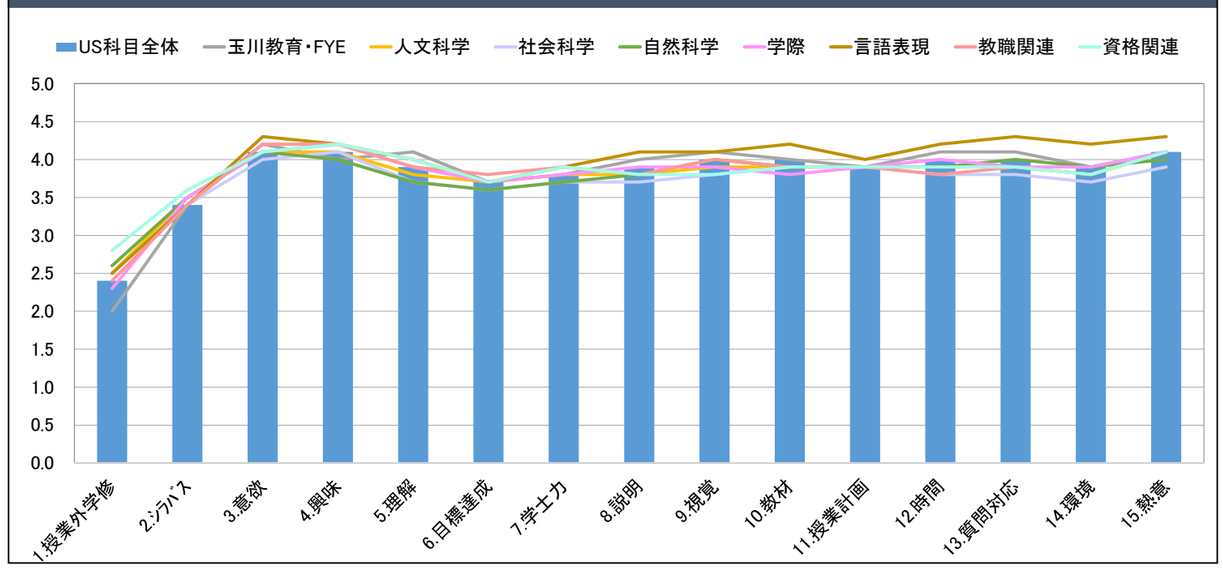
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

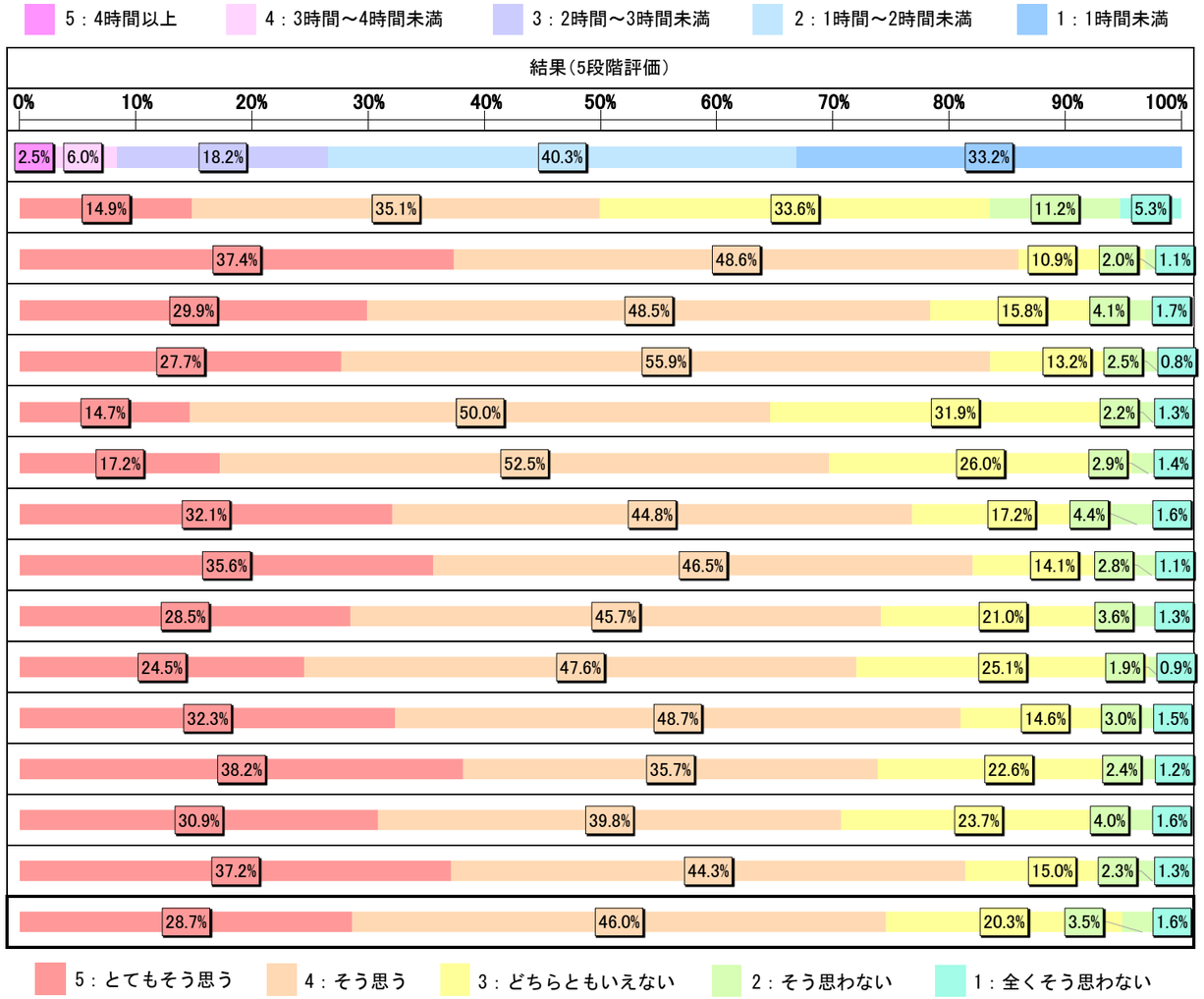


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

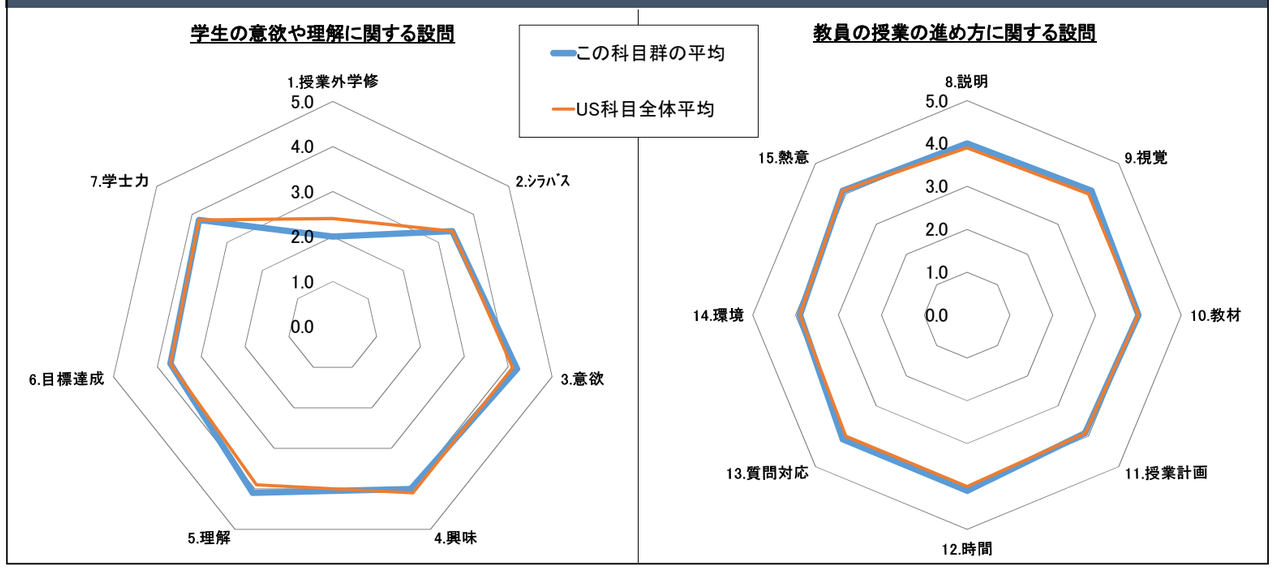
US科目　玉川教育・FYE科目群　　履修者数： 3,717 名　　回答者数： 2,809 名　　回答率： 75.6 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.0	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.4	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.8	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.9	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.1
総合評価				3.8	3.8

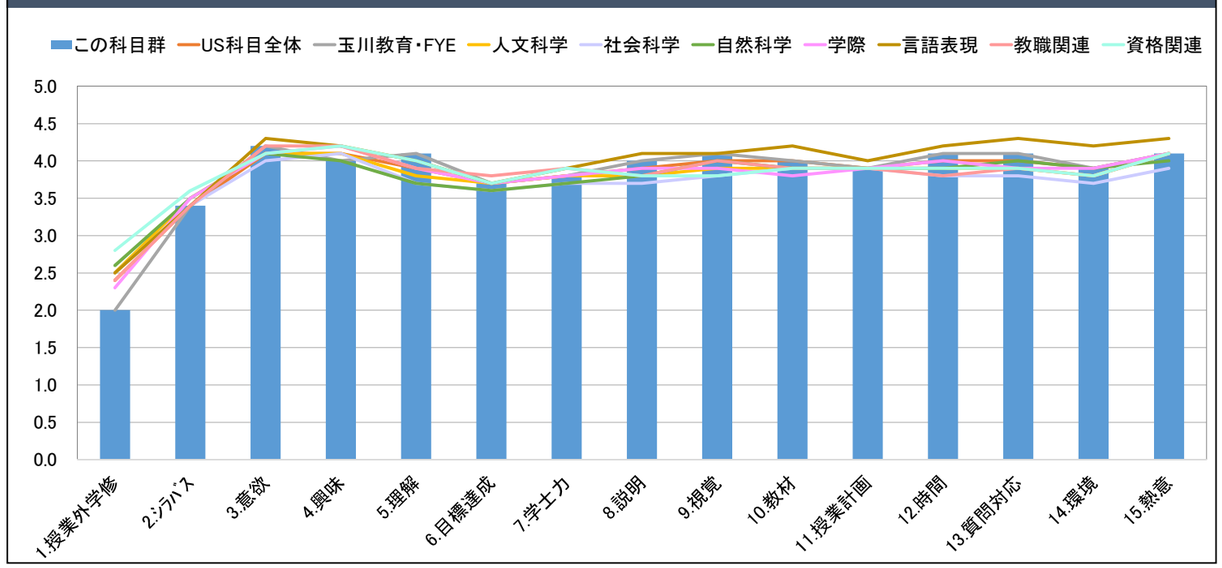
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

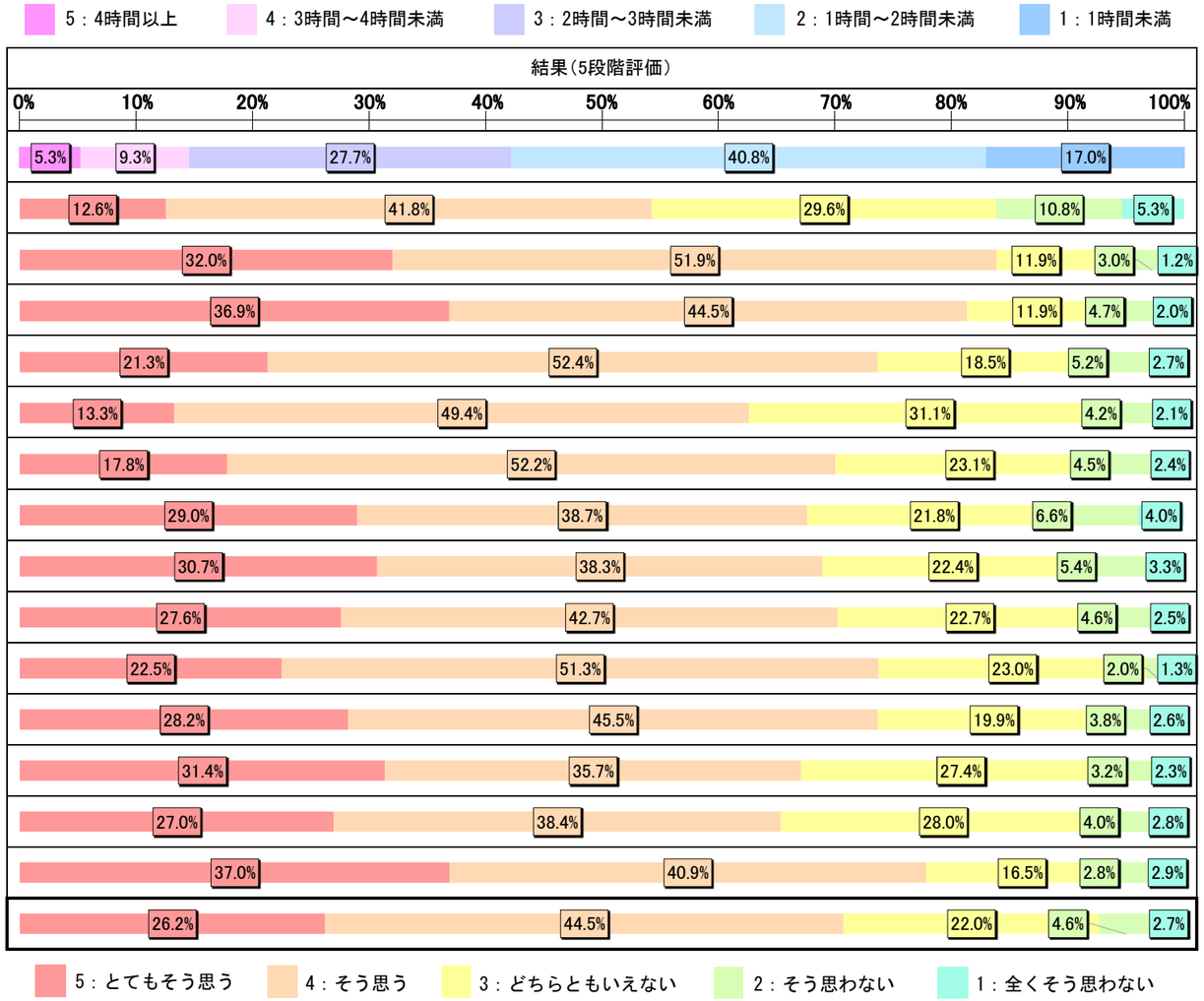


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

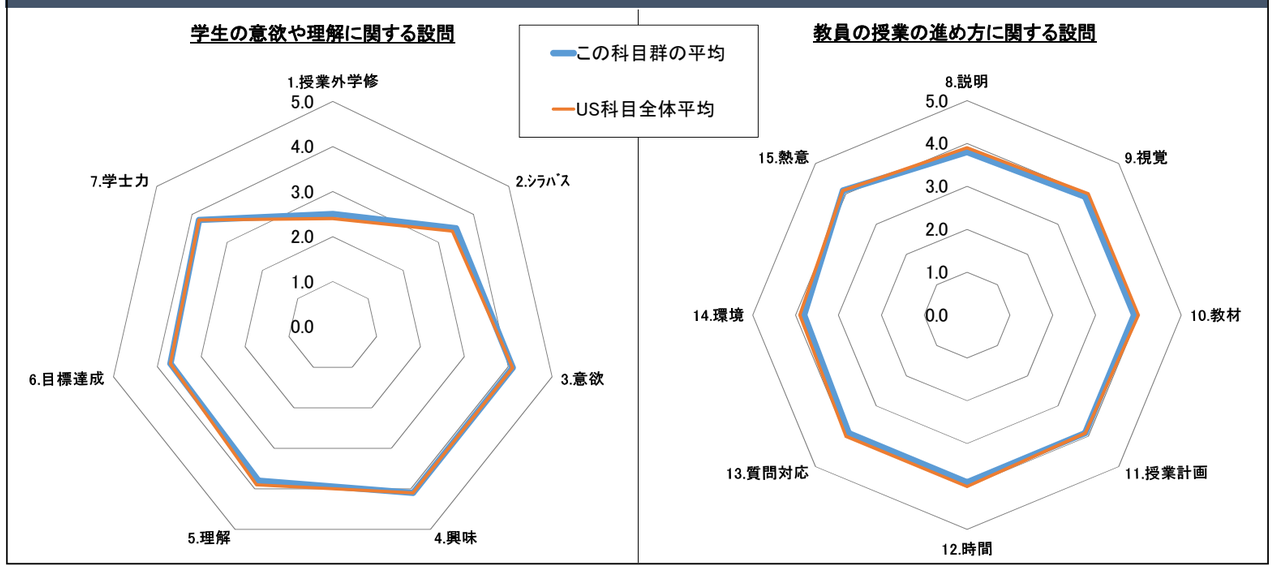
US科目　人文科学科目群　　履修者数： 2,959 名　　回答者数： 1,746 名　　回答率： 59.0 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.8	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.8	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.8	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.9	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	3.9	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	3.9	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.8	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.1
総合評価				3.8	3.8

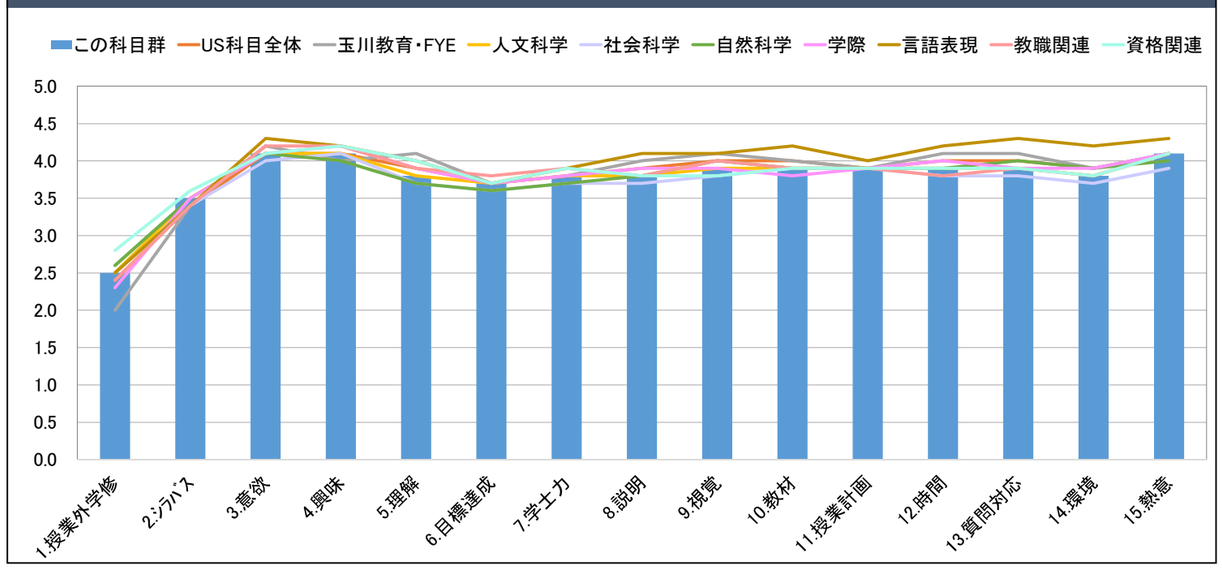
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

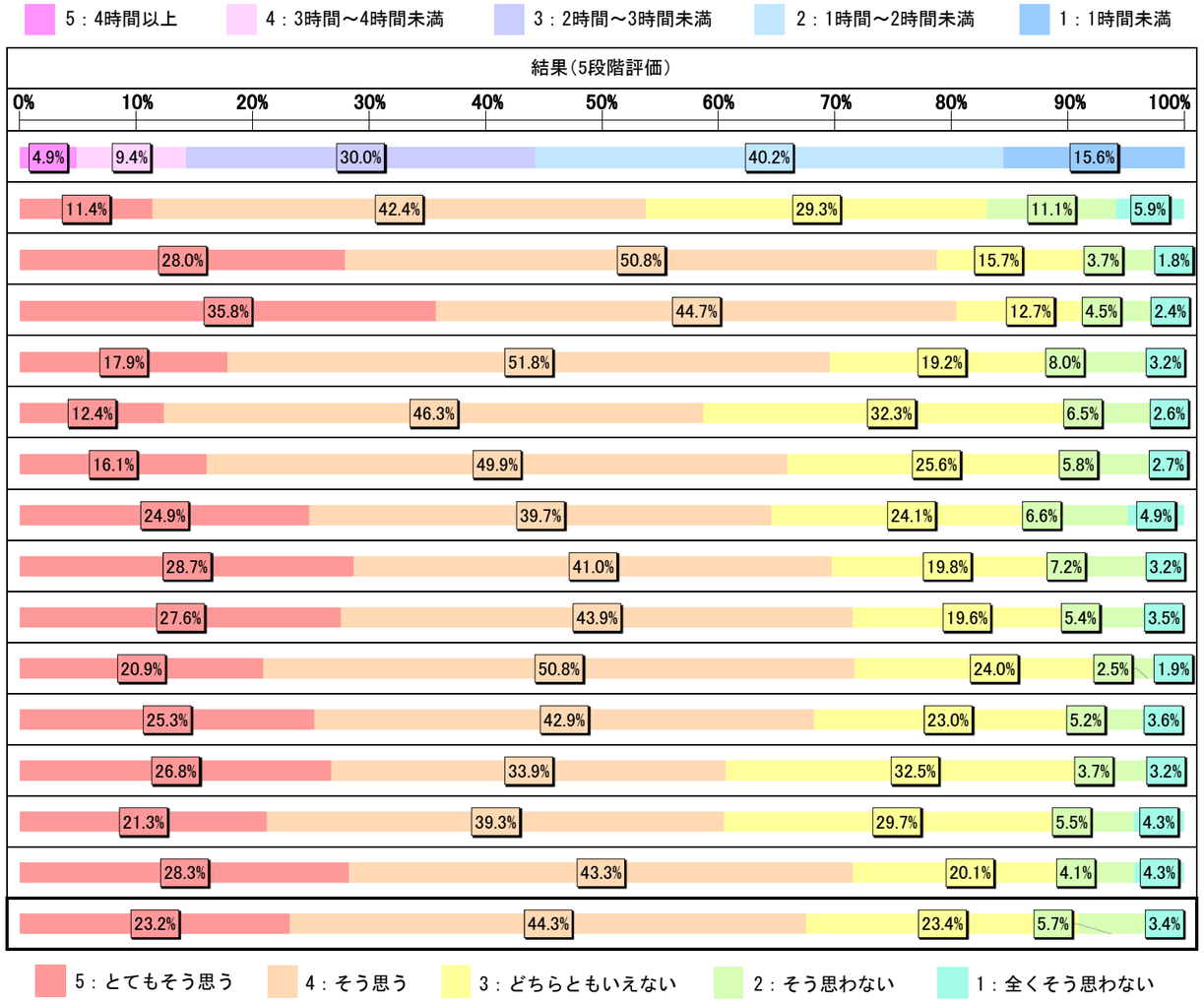


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

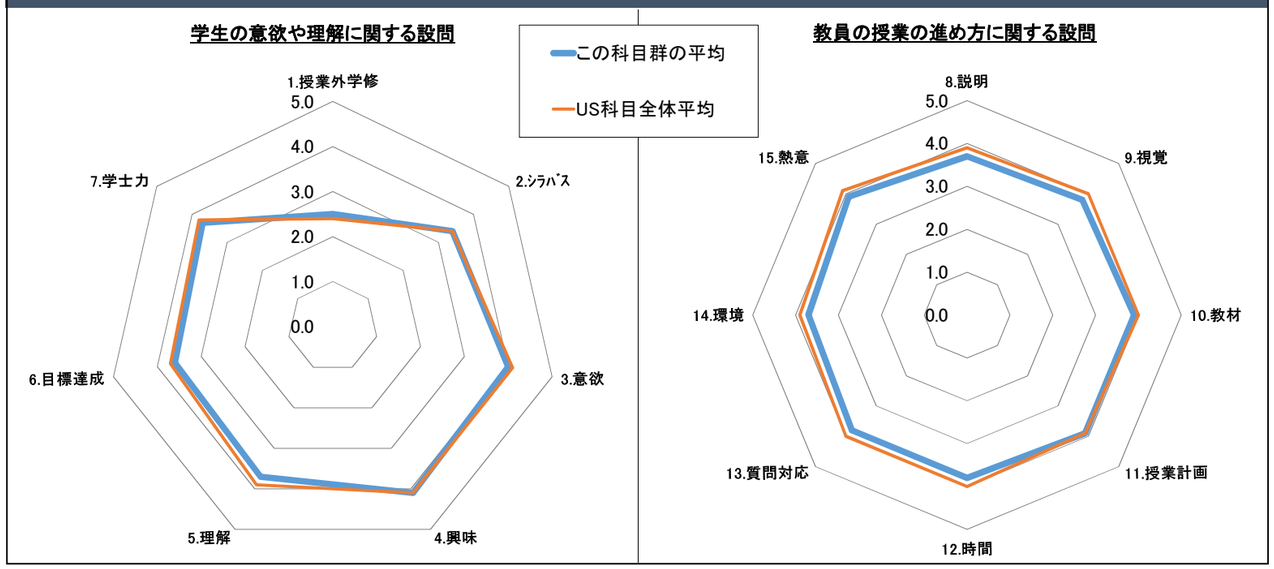
US科目　社会科学科目群　　履修者数： 2,090 名　　回答者数： 1,177 名　　回答率： 56.3 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.4	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.0	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.7	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.6	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.7	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.7	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.8	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	3.8	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	3.8	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.7	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	3.9	4.1
総合評価				3.7	3.8

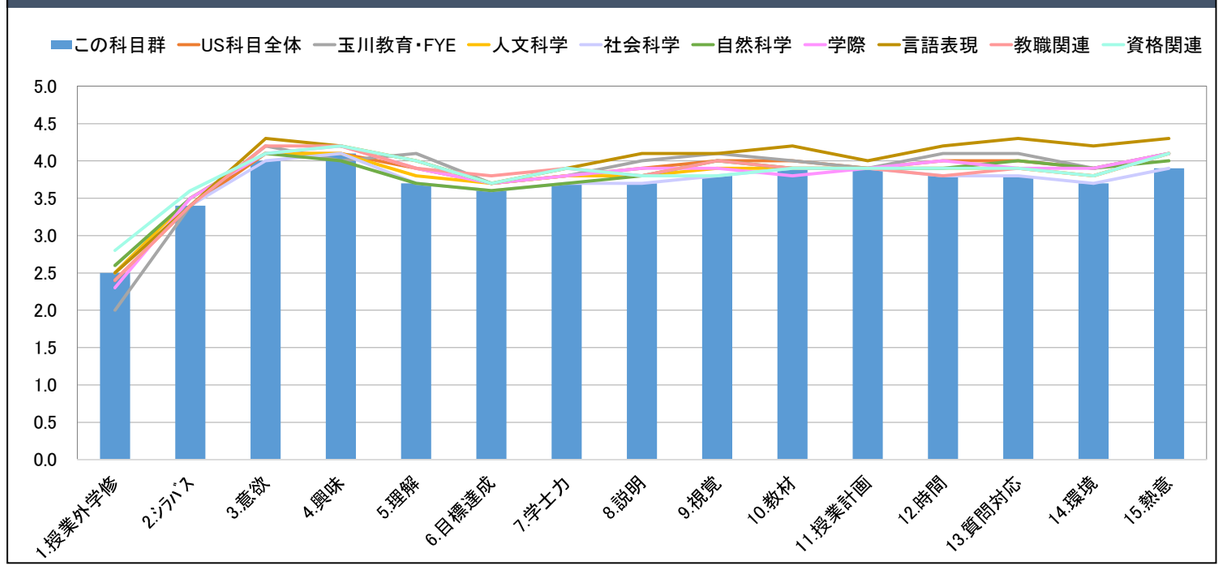
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

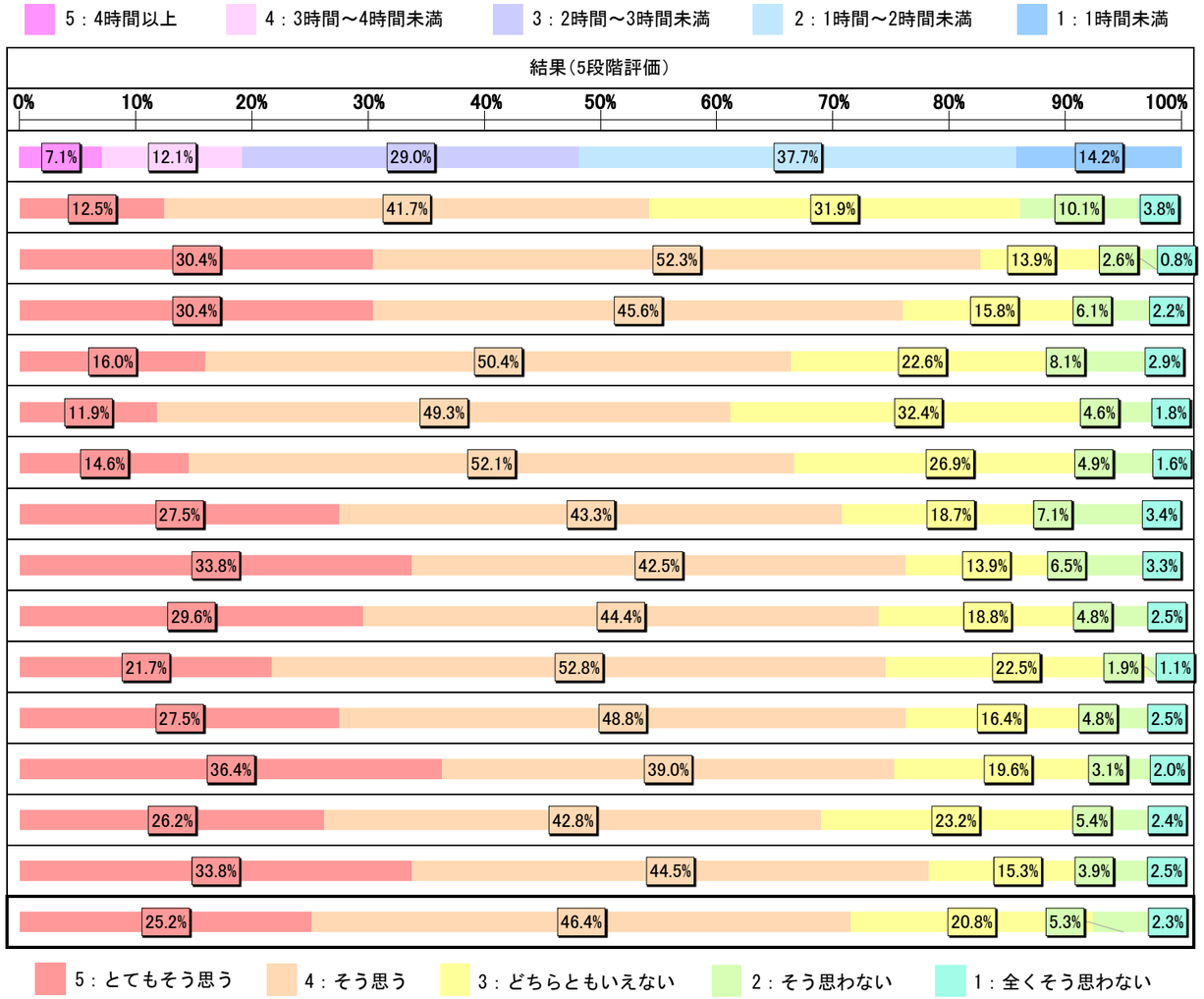


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

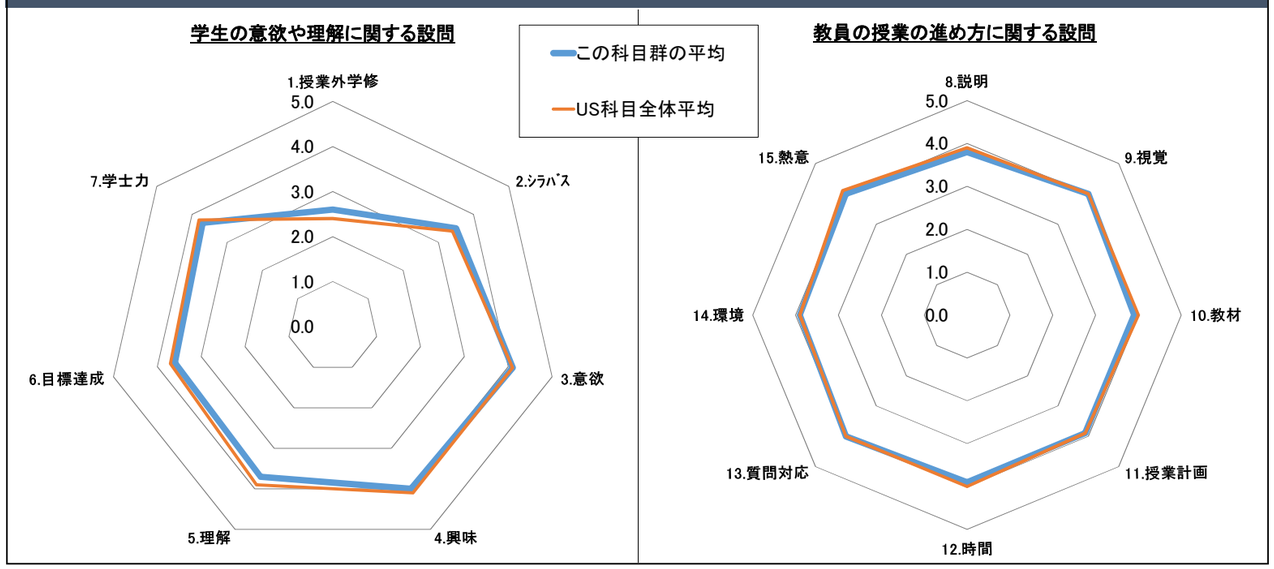
US科目　自然科学科目群　　履修者数： 2,643 名　　回答者数： 1,620 名　　回答率： 61.3 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.6	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.7	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.6	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.7	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.8	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	3.9	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.0	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.9	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.0	4.1
総合評価				3.8	3.8

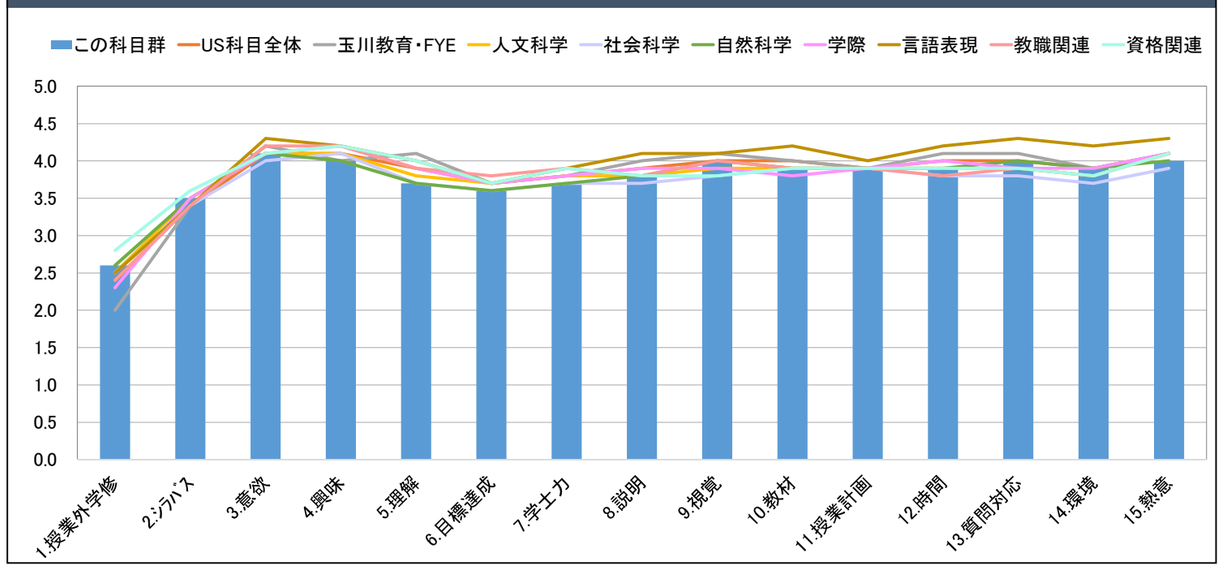
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

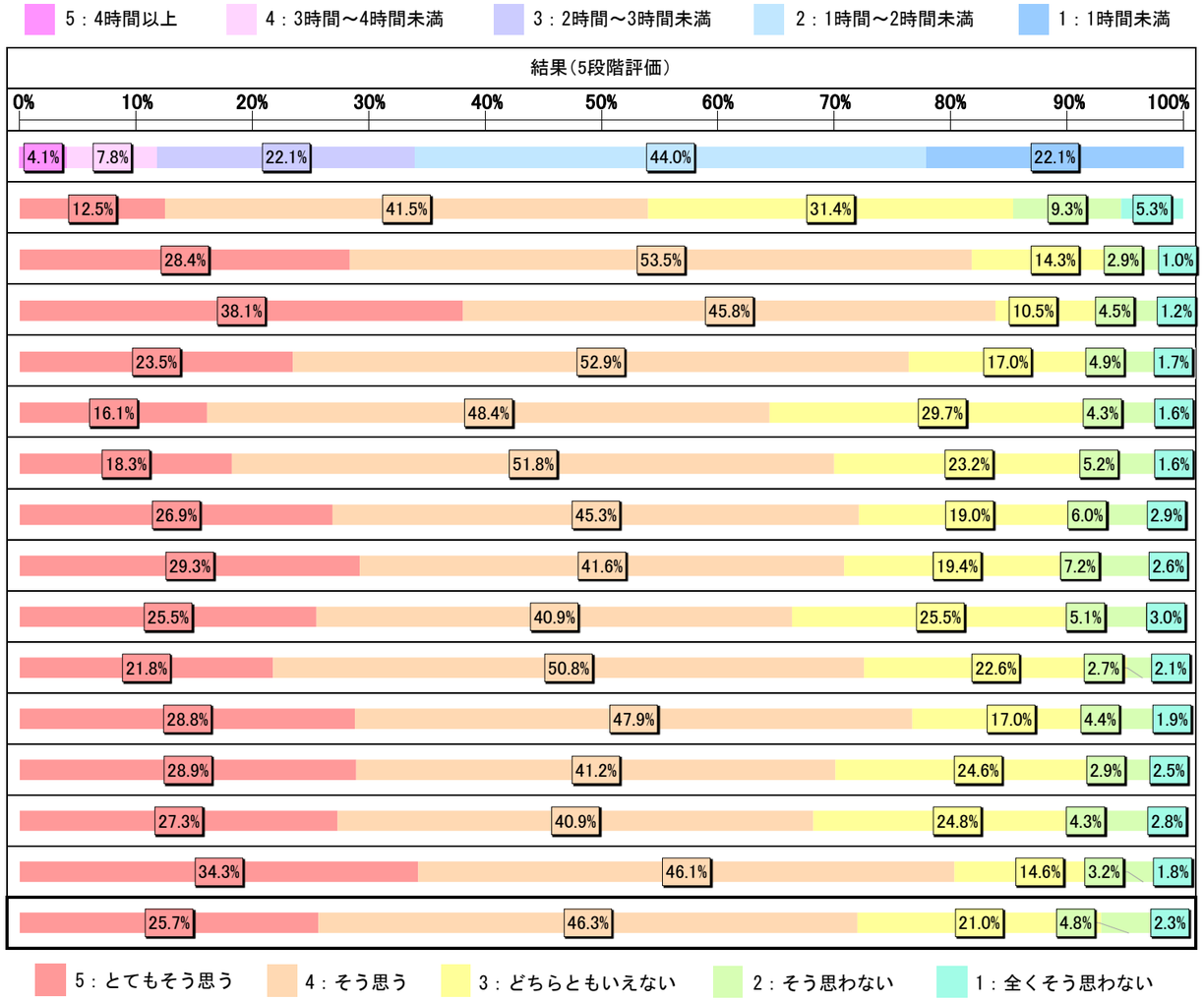


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

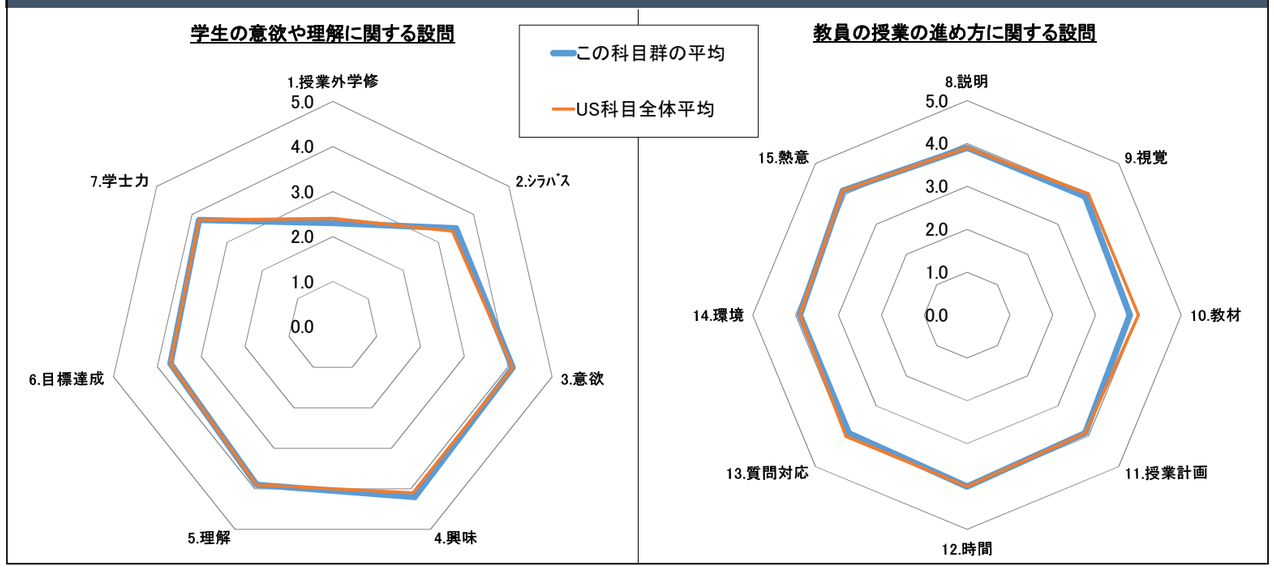
US科目　学際科目群　　履修者数： 1,699 名　　回答者数： 937 名　　回答率： 55.2 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.8	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.9	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.9	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.8	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.0	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	3.9	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.9	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.1
総合評価				3.8	3.8

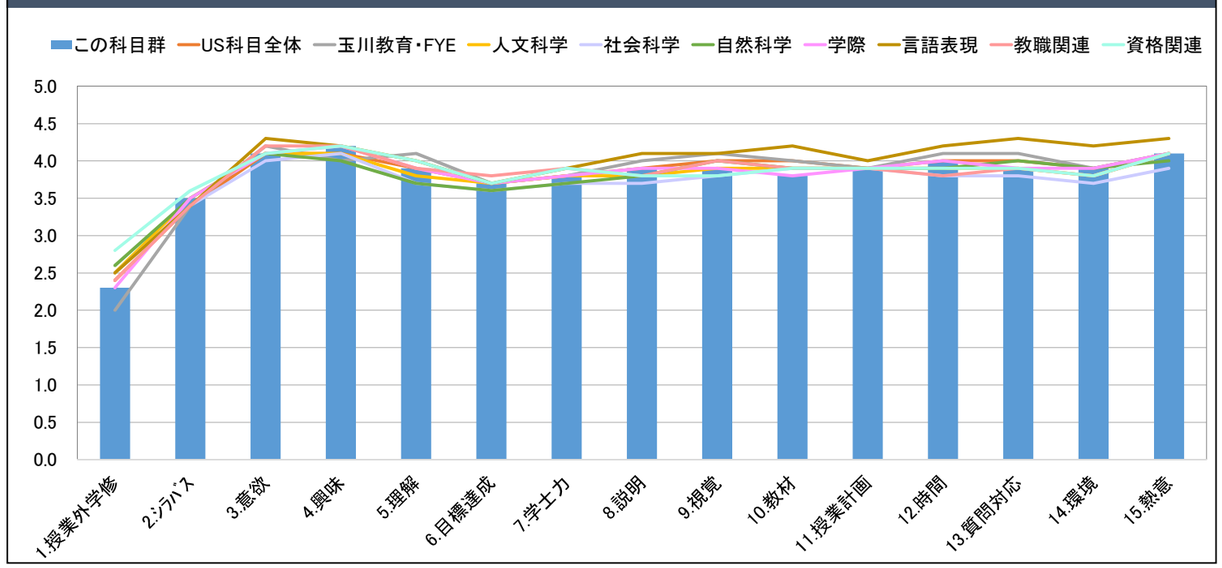
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

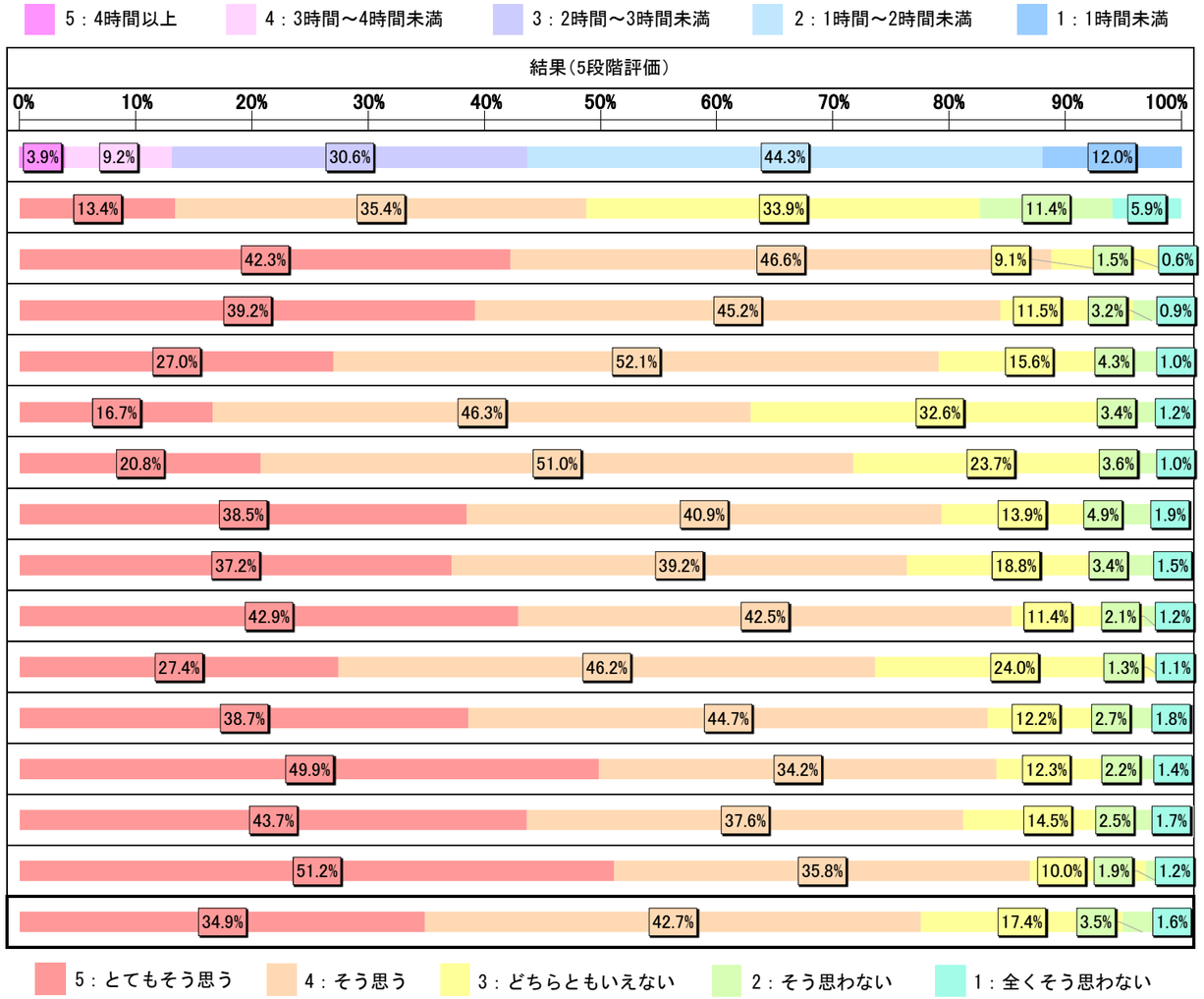


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

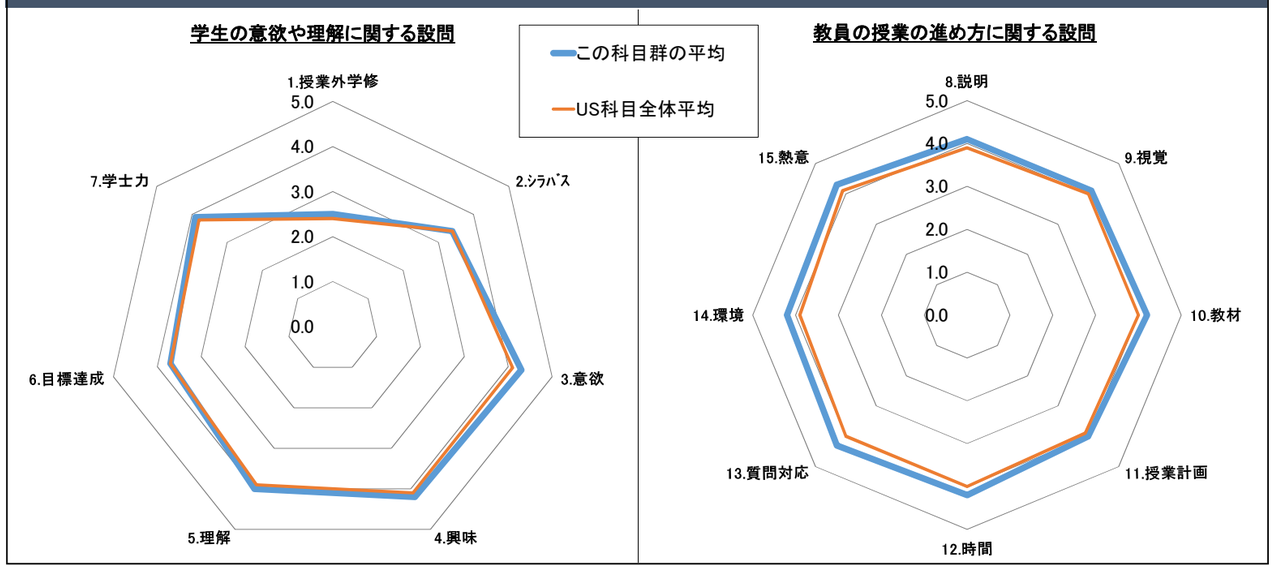
US科目　言語表現科目群　　履修者数： 2,614 名　　回答者数： 1,754 名　　回答率： 67.1 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.4	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.2	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.0	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.1
総合評価				4.0	3.8

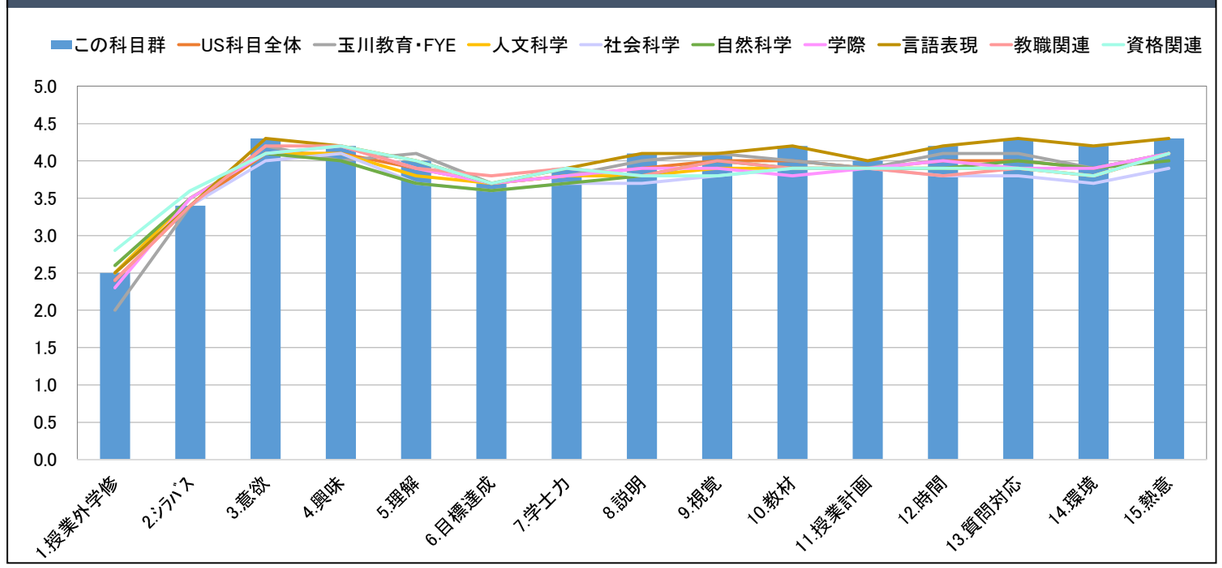
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

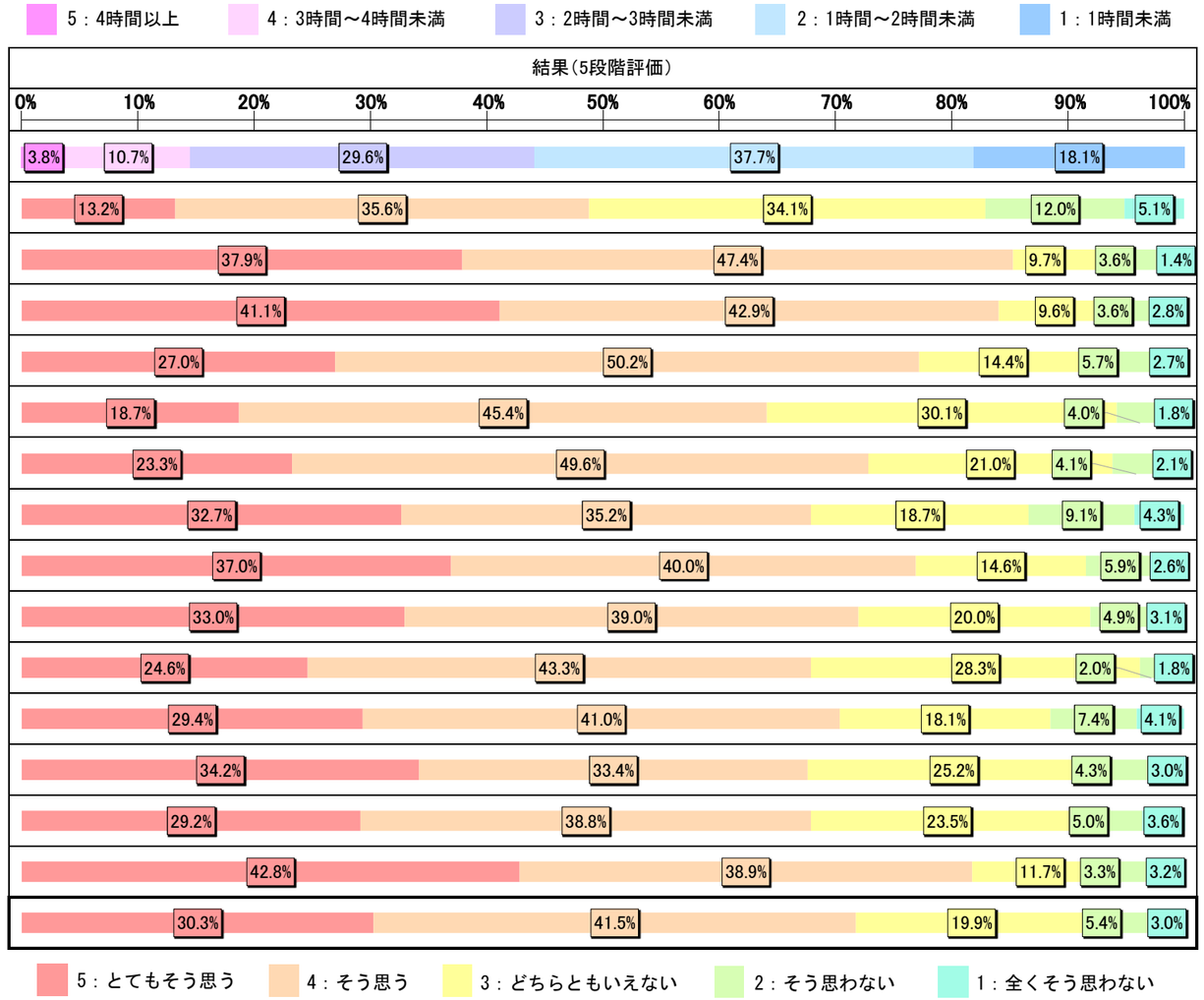


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

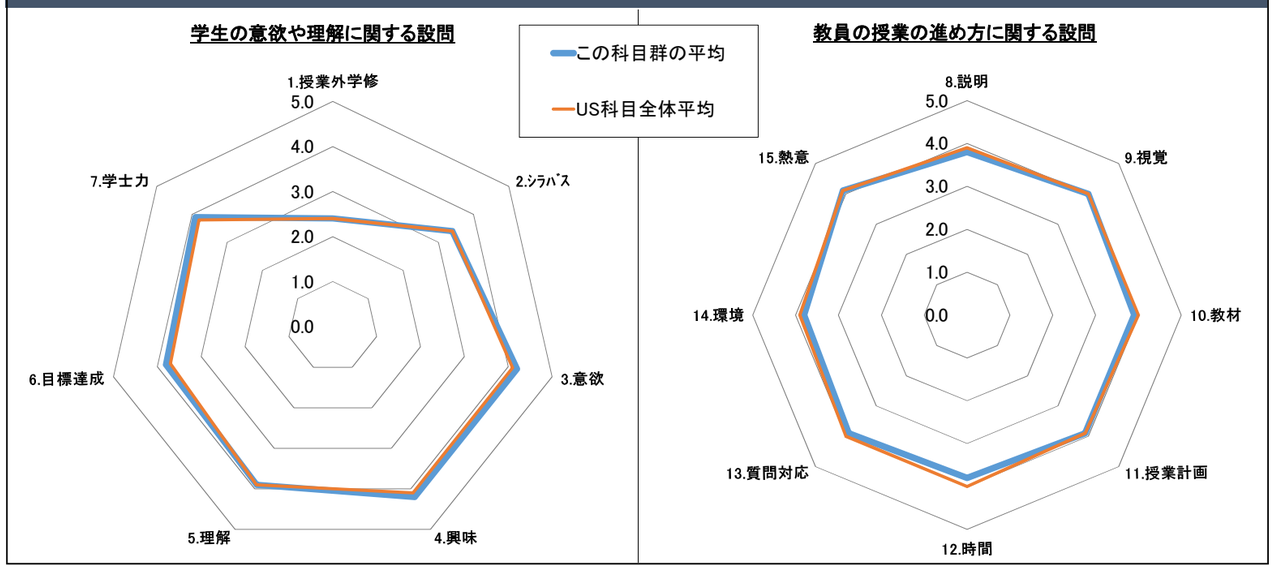
US科目　教職関連科目群　　履修者数： 1,549 名　　回答者数： 1,053 名　　回答率： 68.0 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.4	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.8	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.8	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	3.8	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	3.9	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.8	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.1
総合評価				3.8	3.8

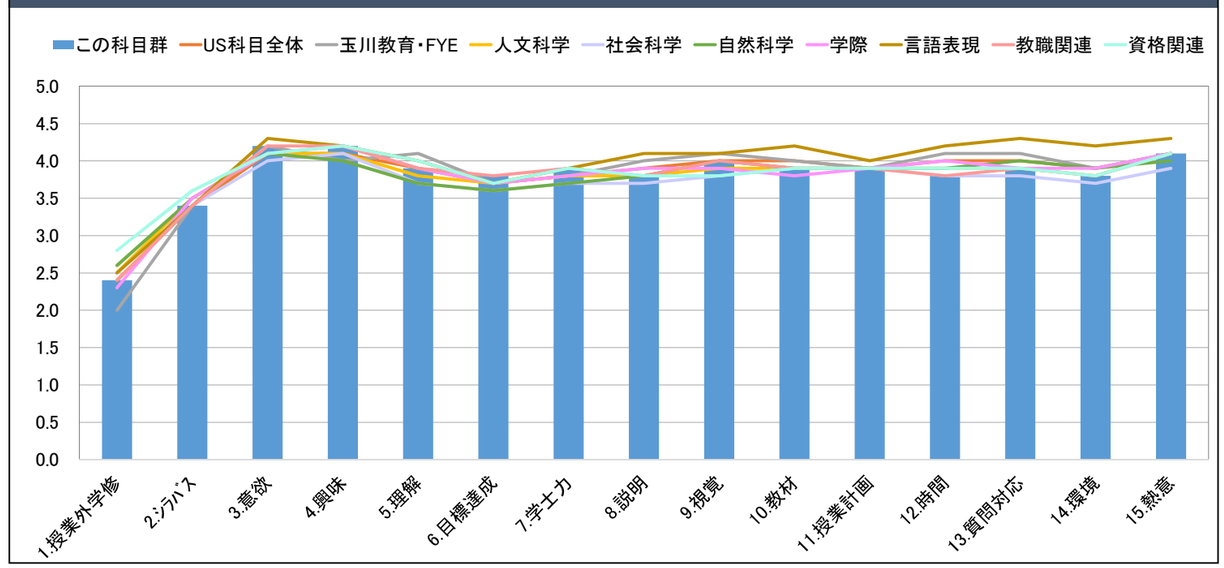
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

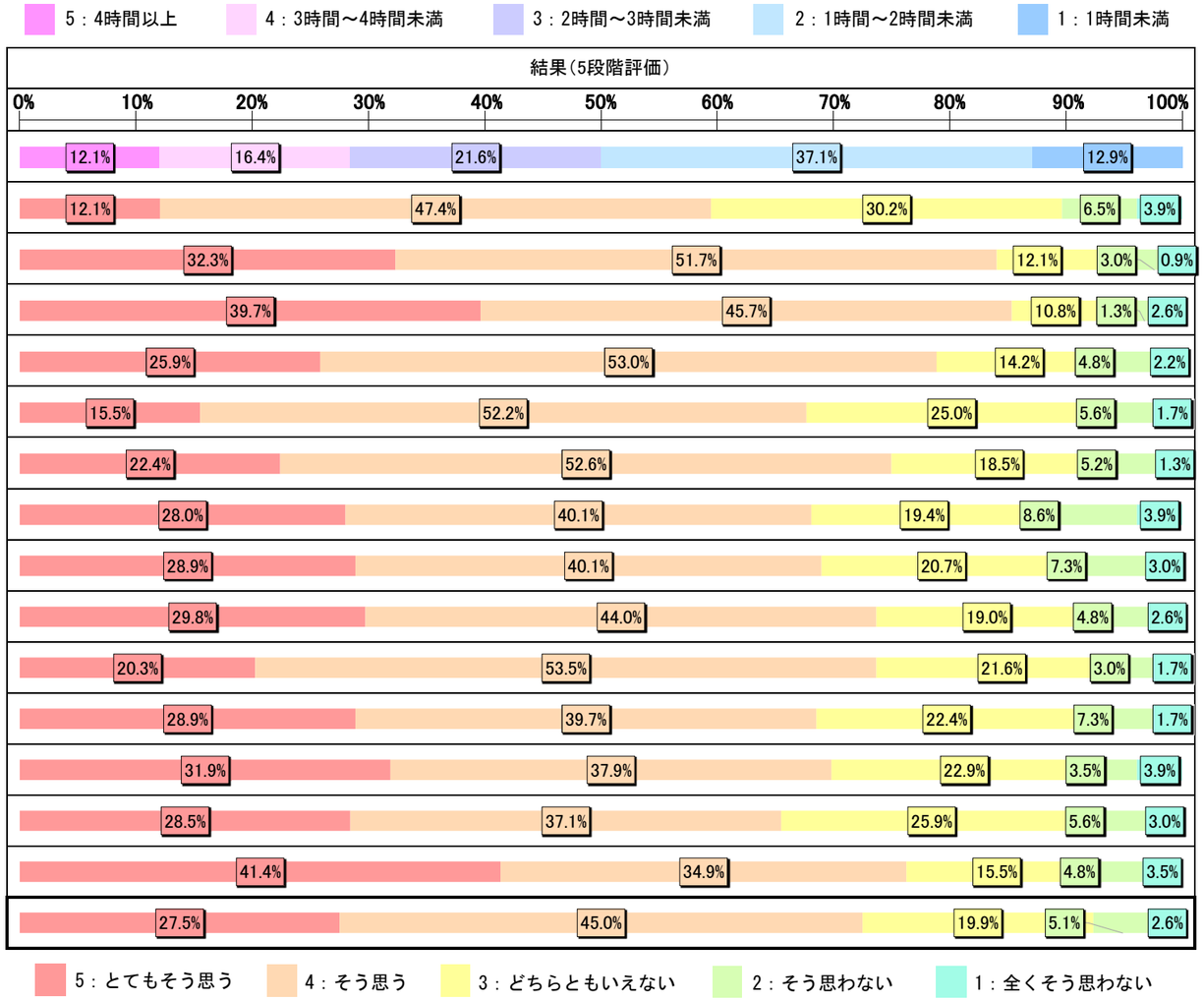


令和2年度　春学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

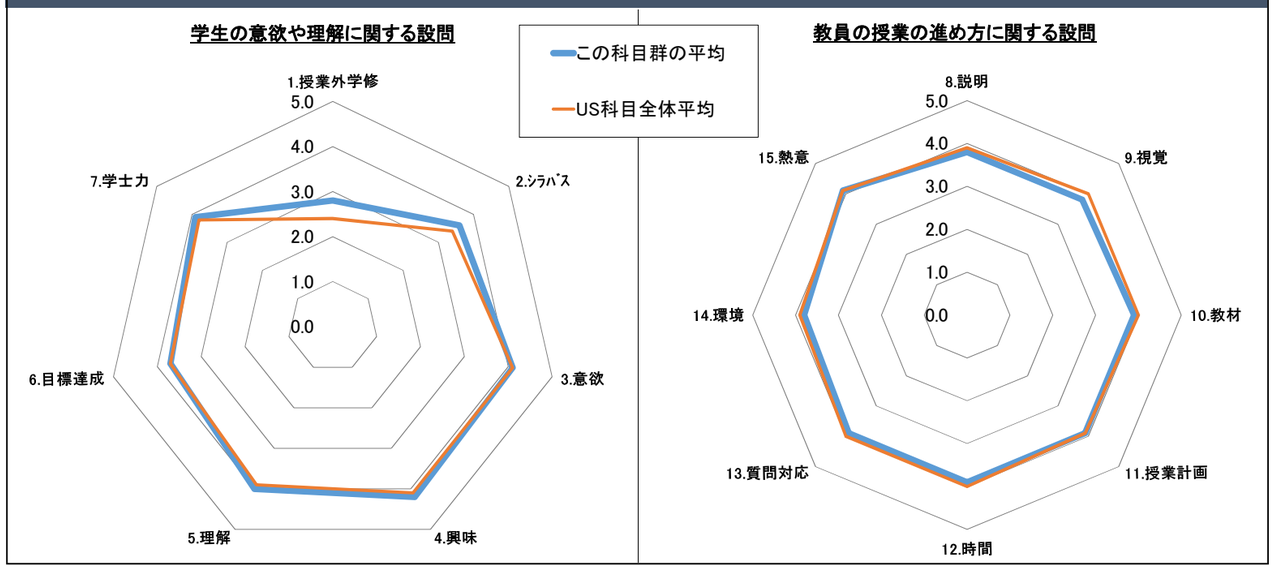
US科目　資格関連科目群　　履修者数：　392 名　　回答者数：　232 名　　回答率：　59.2 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.8	2.4
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.4
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.1
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	3.9
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.7	3.7
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	3.8
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.8	3.9
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.8	4.0
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.0
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	3.9	3.9
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	3.9	4.0
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	3.9	4.0
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	3.8	3.9
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.1	4.1
総合評価				3.8	3.8

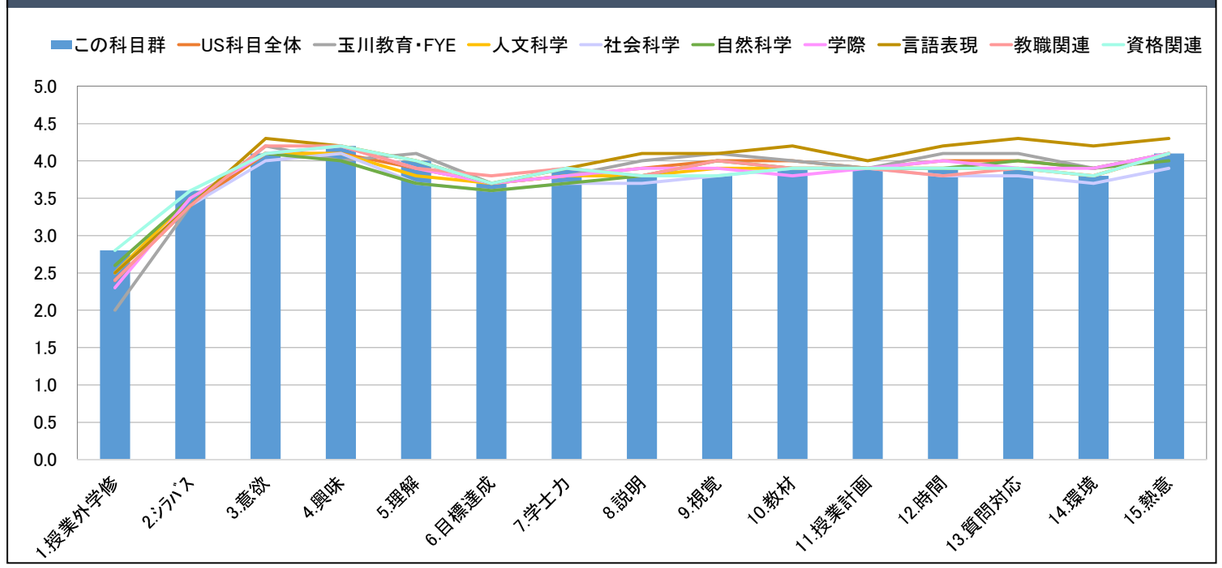
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較



令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

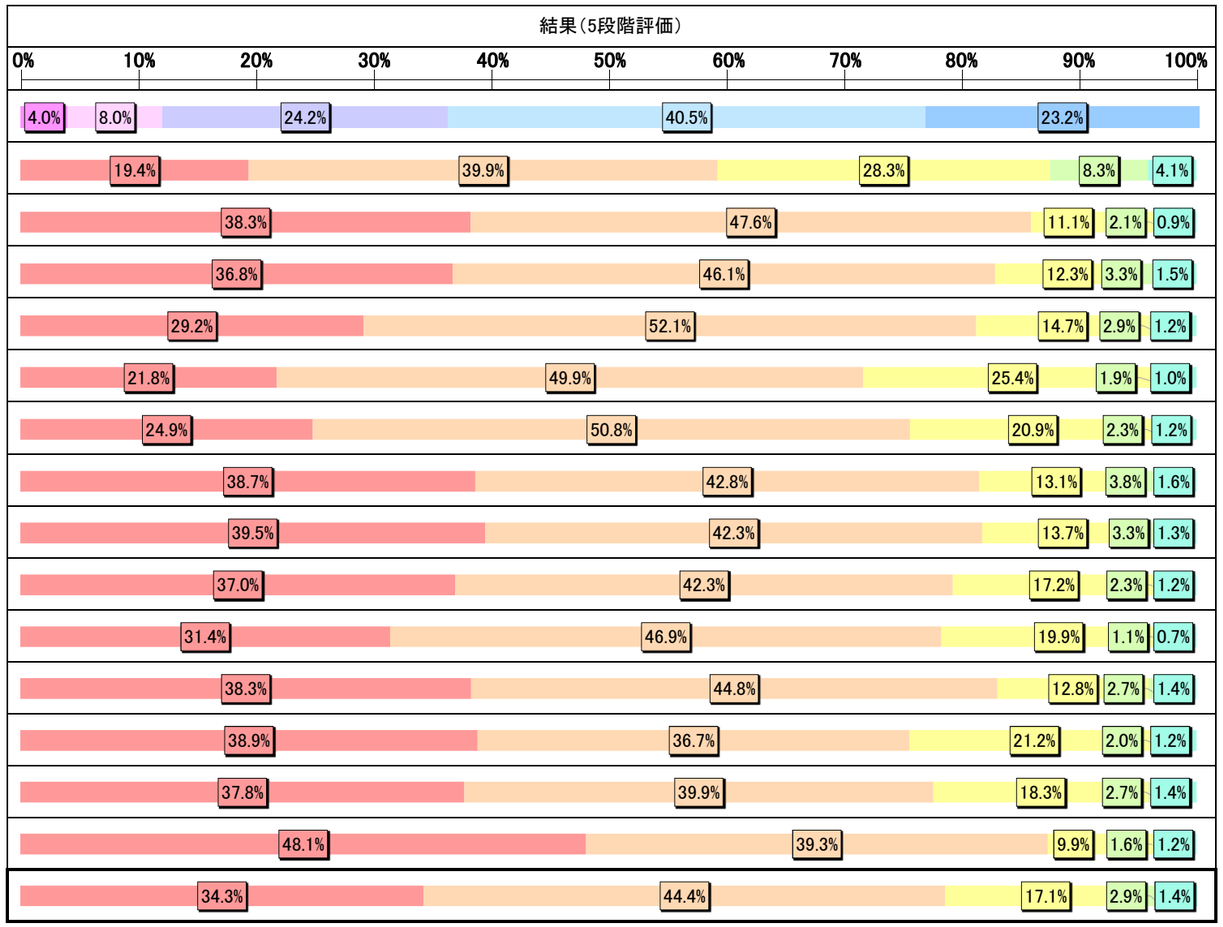
US科目全体　　履修者数： 18,683 名　　回答者数： 9,313 名　　回答率： 49.8 %

			設問	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3
総合評価				4.0

平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）

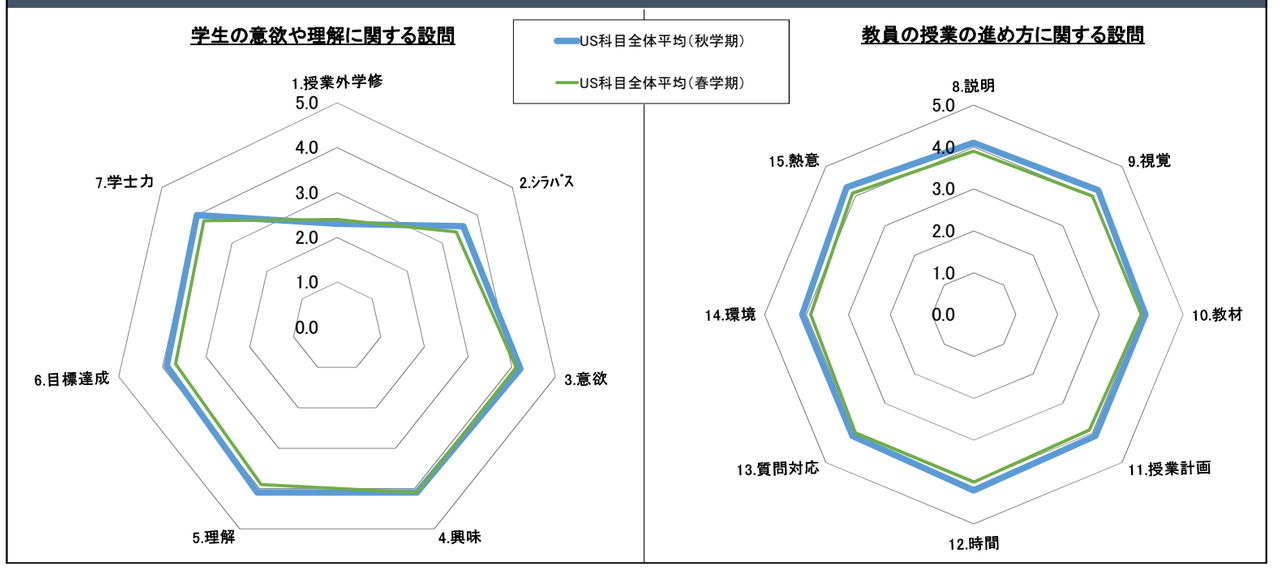
5：4時間以上　4：3時間～4時間未満　3：2時間～3時間未満　2：1時間～2時間未満　1：1時間未満

結果（5段階評価）

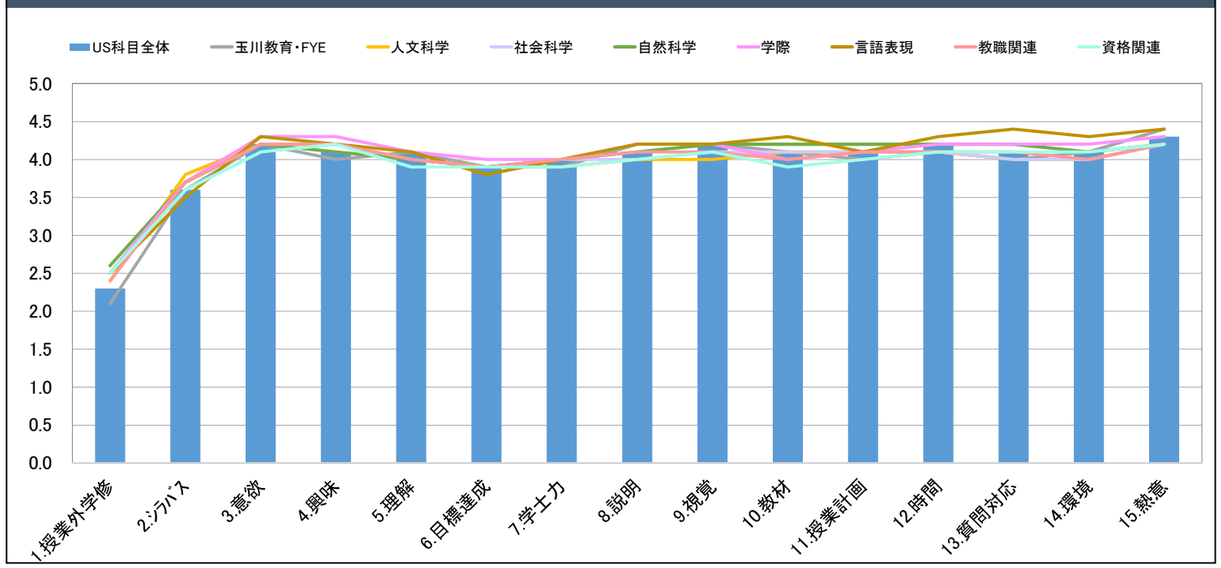


5：とてもそう思う　4：そう思う　3：どちらともいえない　2：そう思わない　1：全くそう思わない

質問別評価平均レーダーチャート



US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

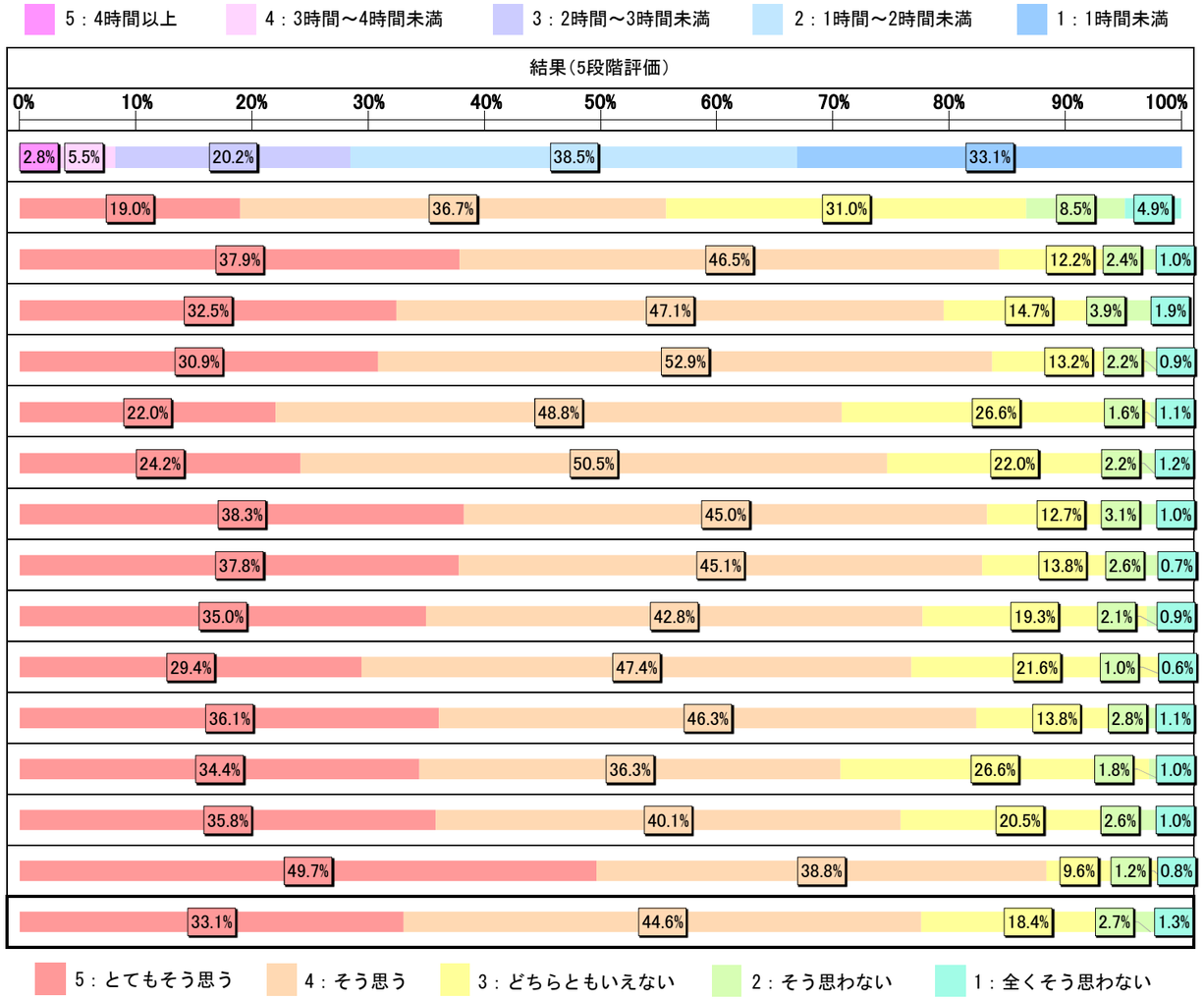


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　玉川大学

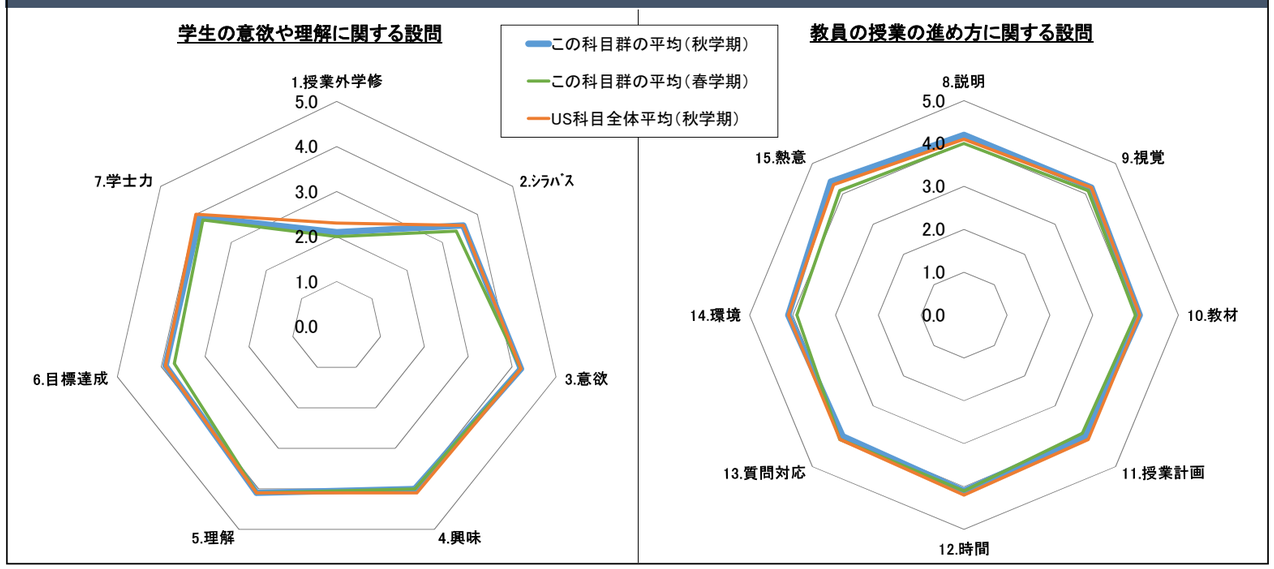
US科目　玉川教育・FYE科目群　　履修者数： 7,012 名　　回答者数： 4,068 名　　回答率： 58.0 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.1	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.0	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.0	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価				3.9	4.0

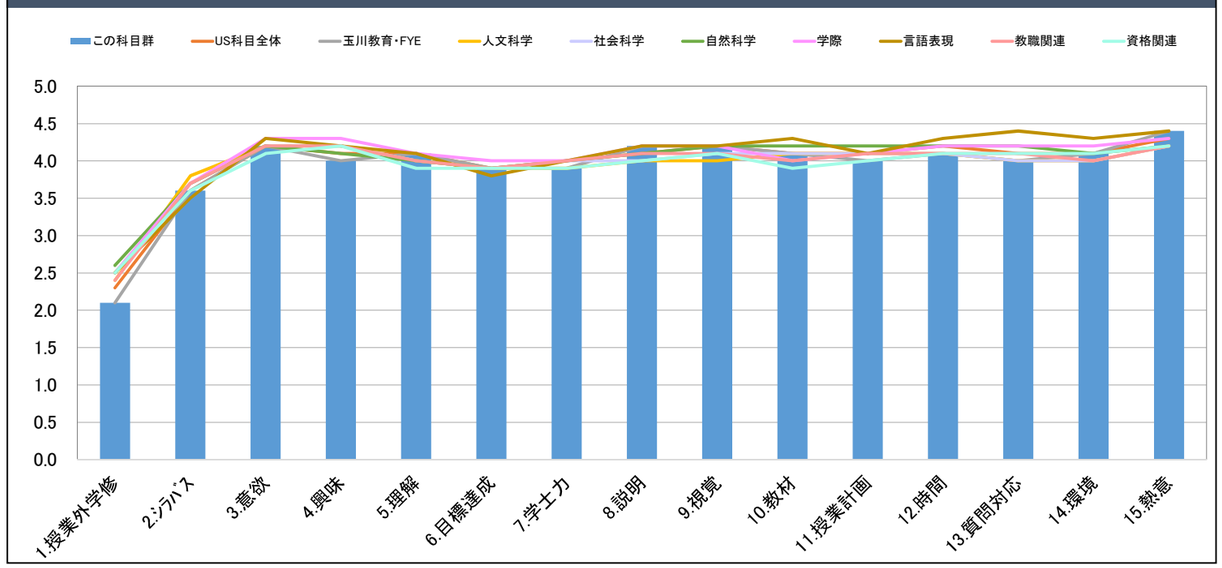
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

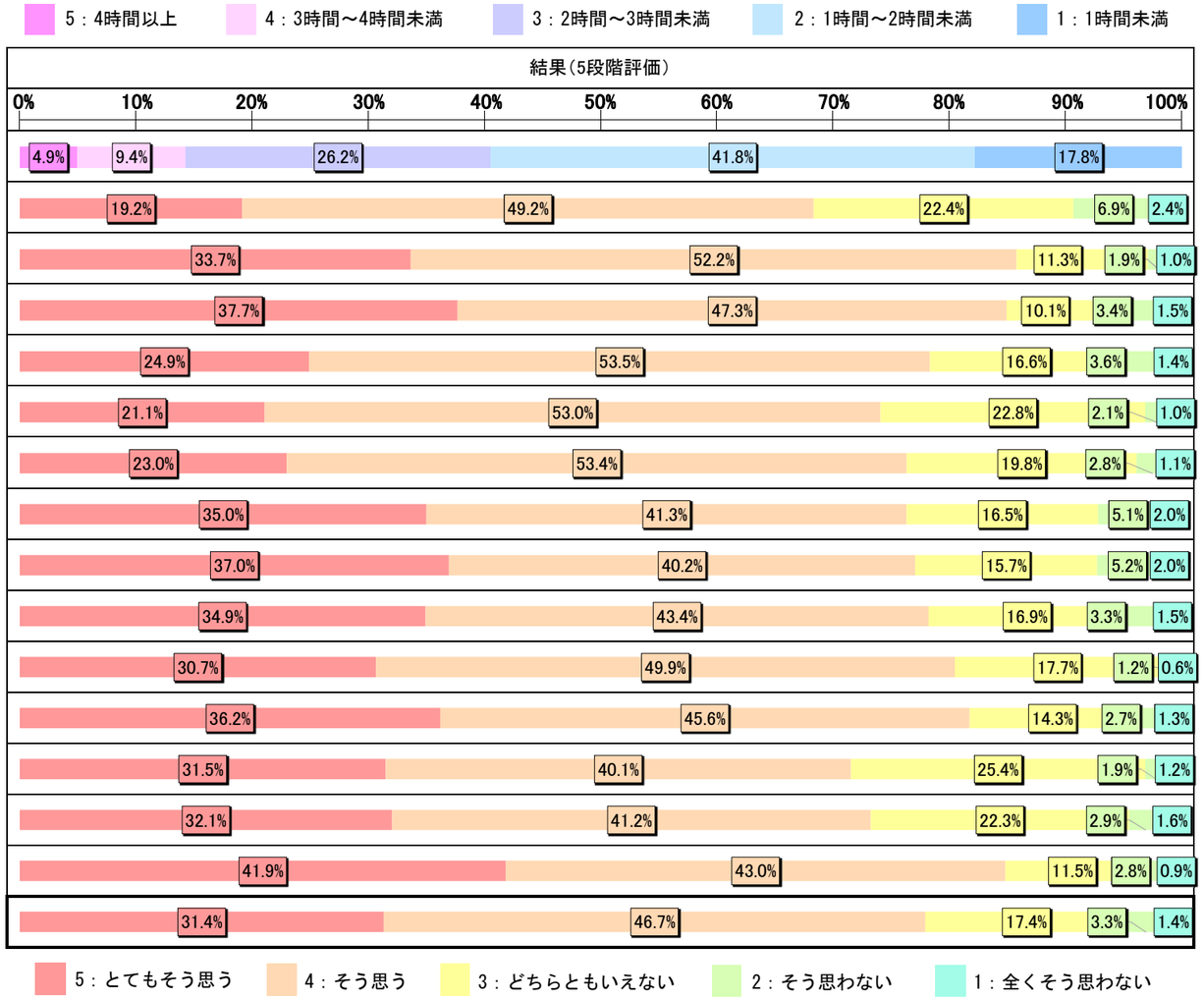


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

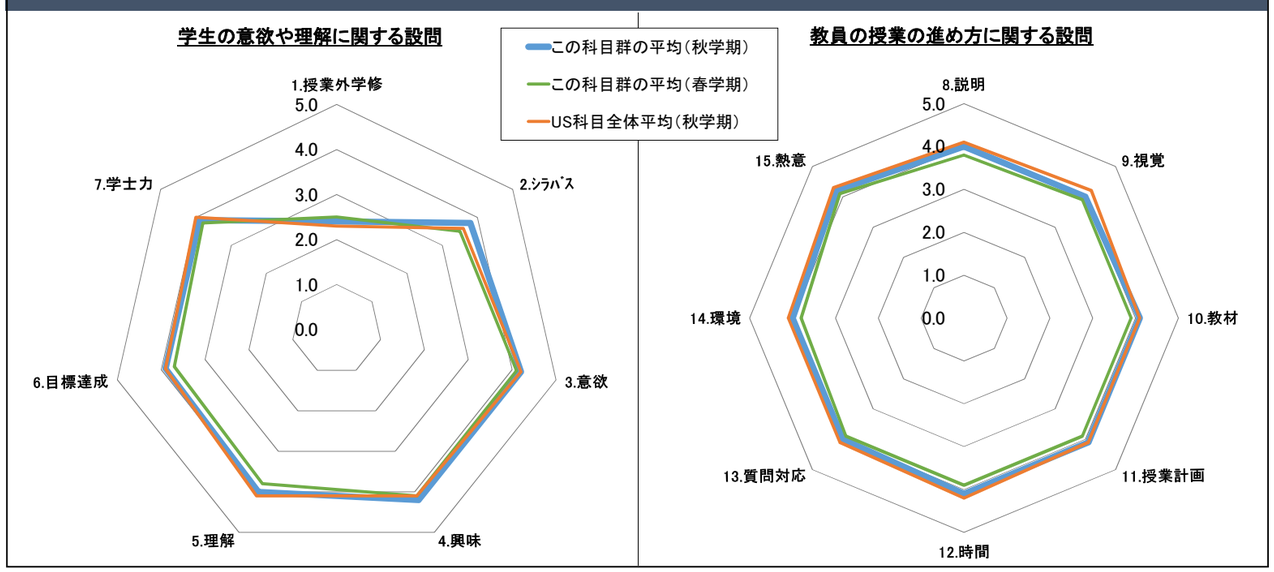
US科目　人文科学科目群　　履修者数： 2,251 名　　回答者数： 939 名　　回答率： 41.7 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.0	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

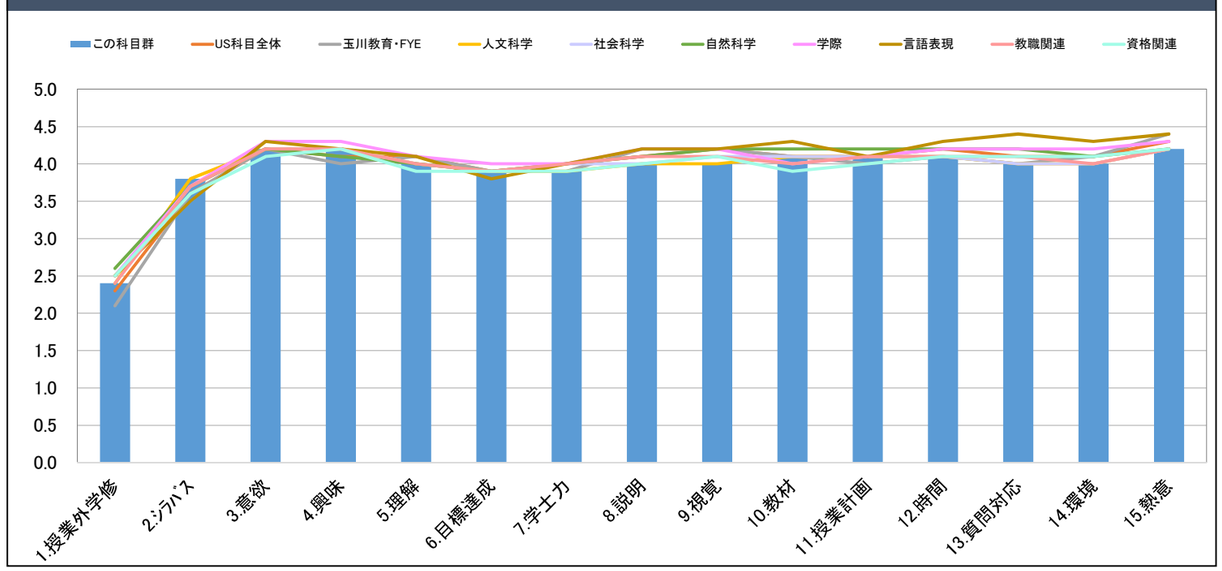
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

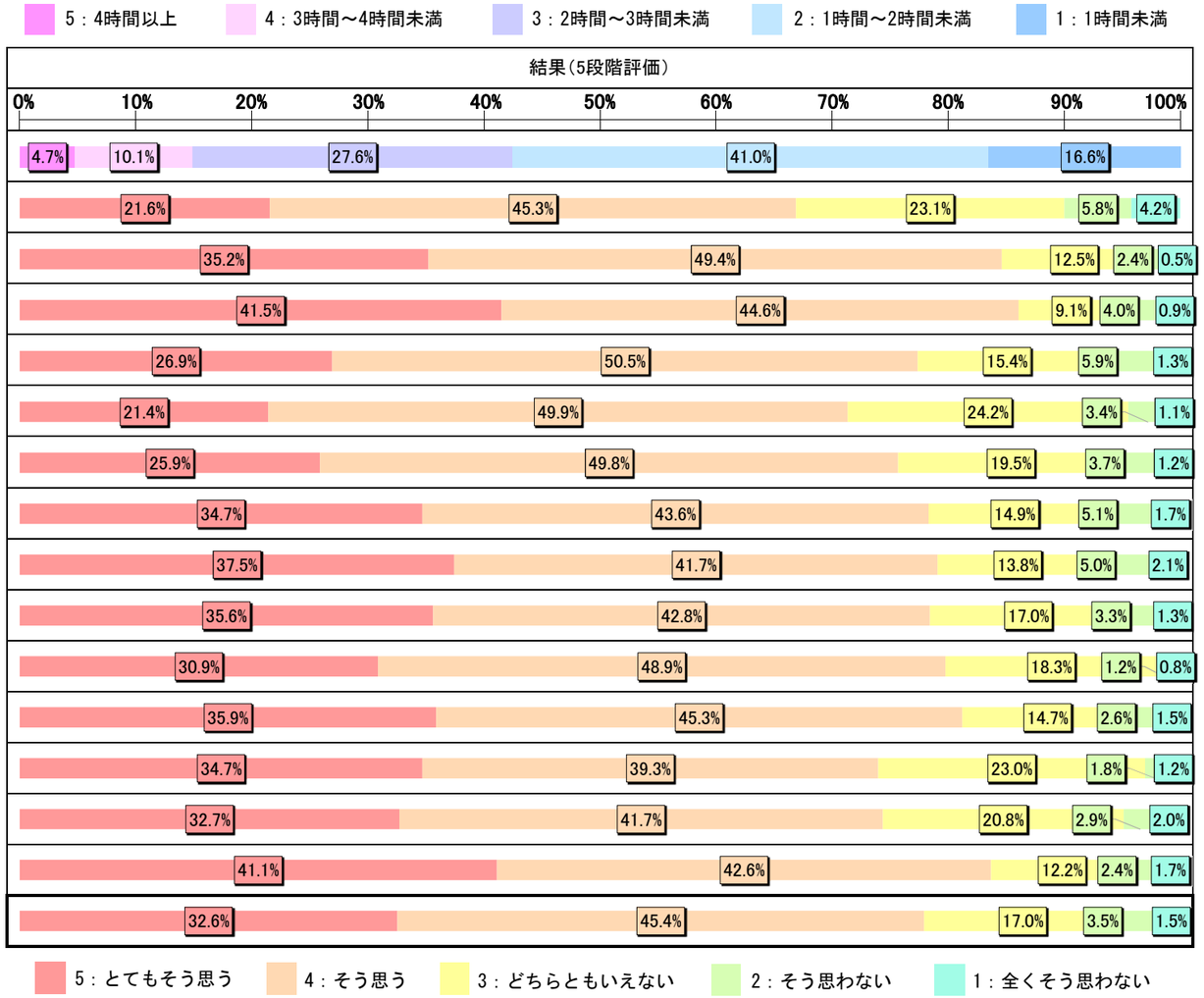


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

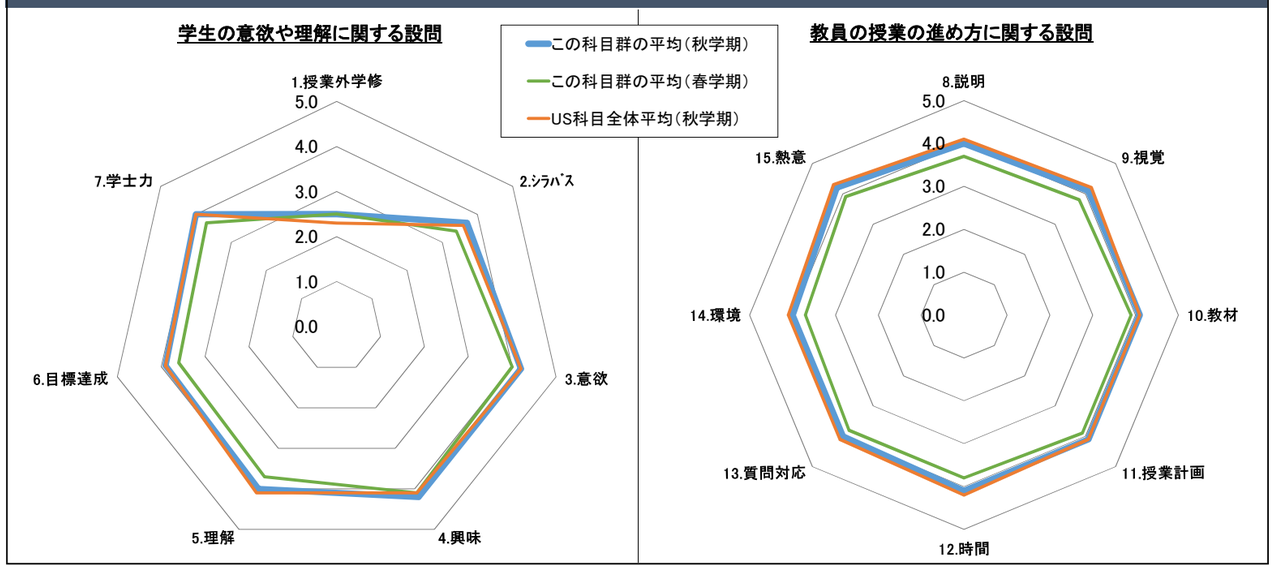
US科目　社会科学科目群　　履修者数：1,755 名　　回答者数：761 名　　回答率：43.4 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.1	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.0	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

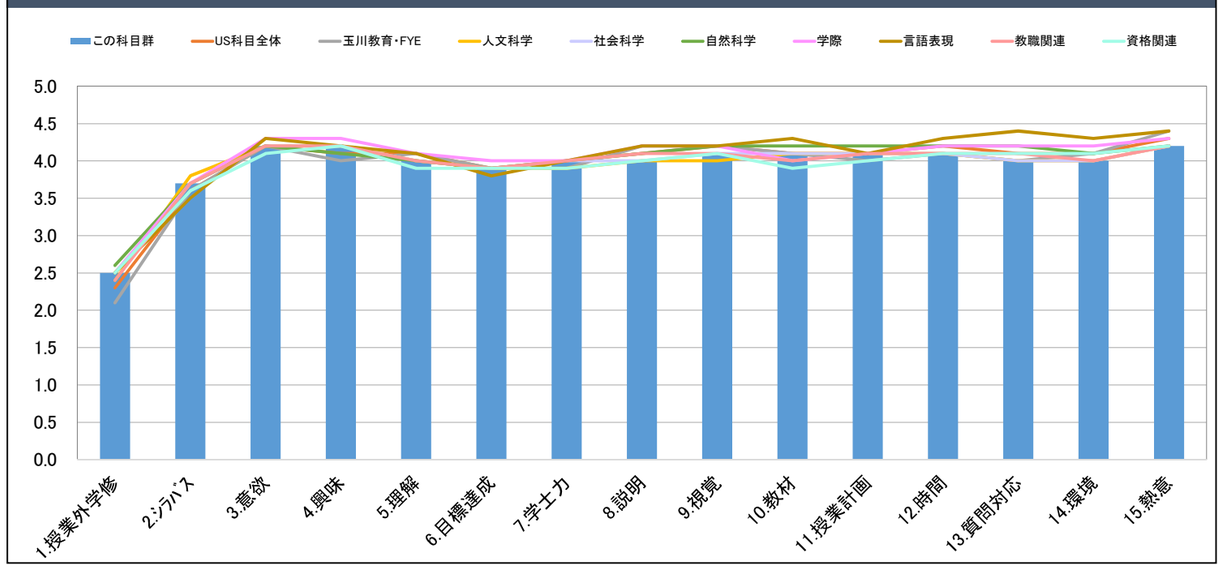
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

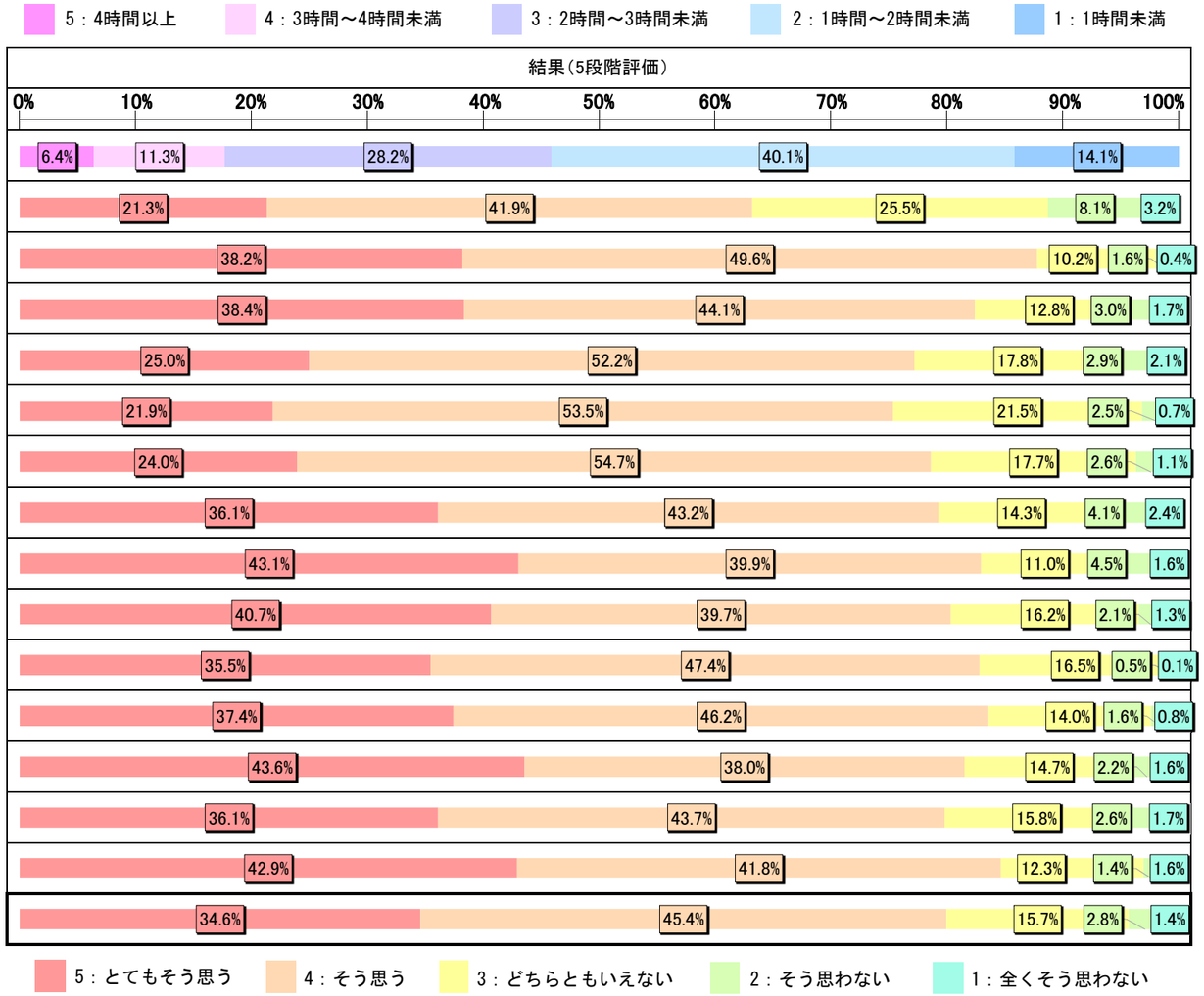


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

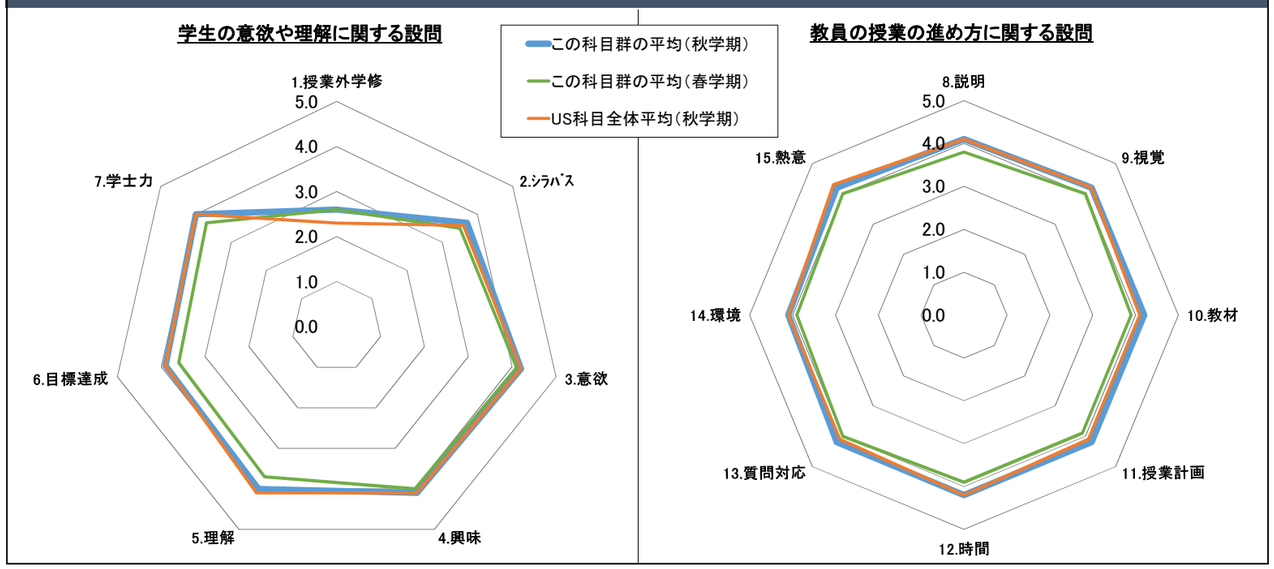
US科目　自然科学科目群　　履修者数： 1,685 名　　回答者数： 764 名　　回答率： 45.3 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.6	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.2	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				4.0	4.0

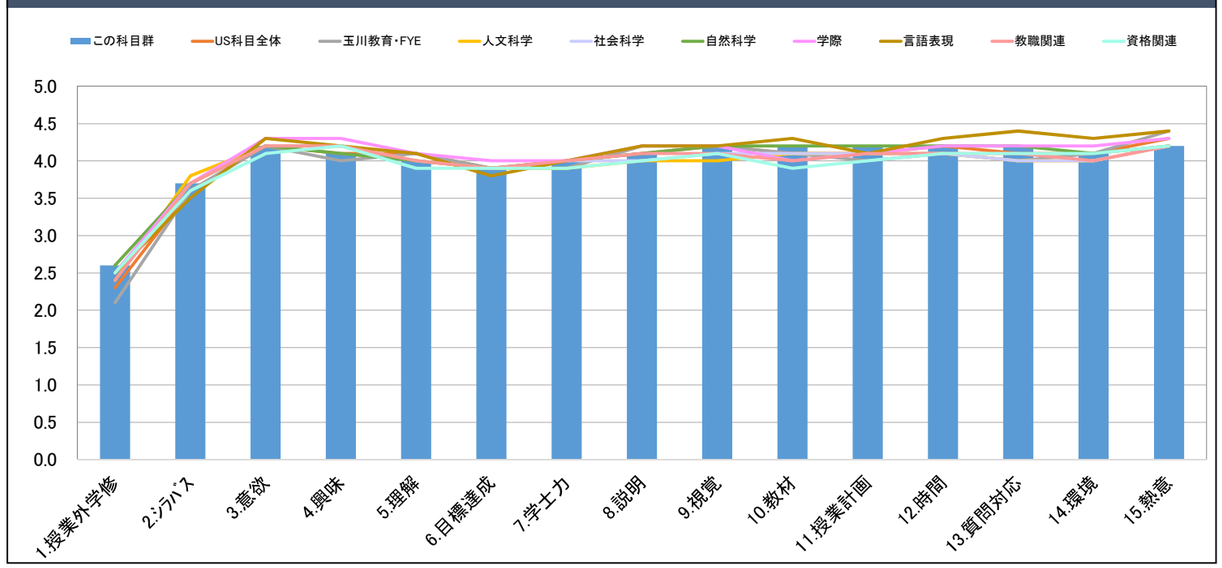
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

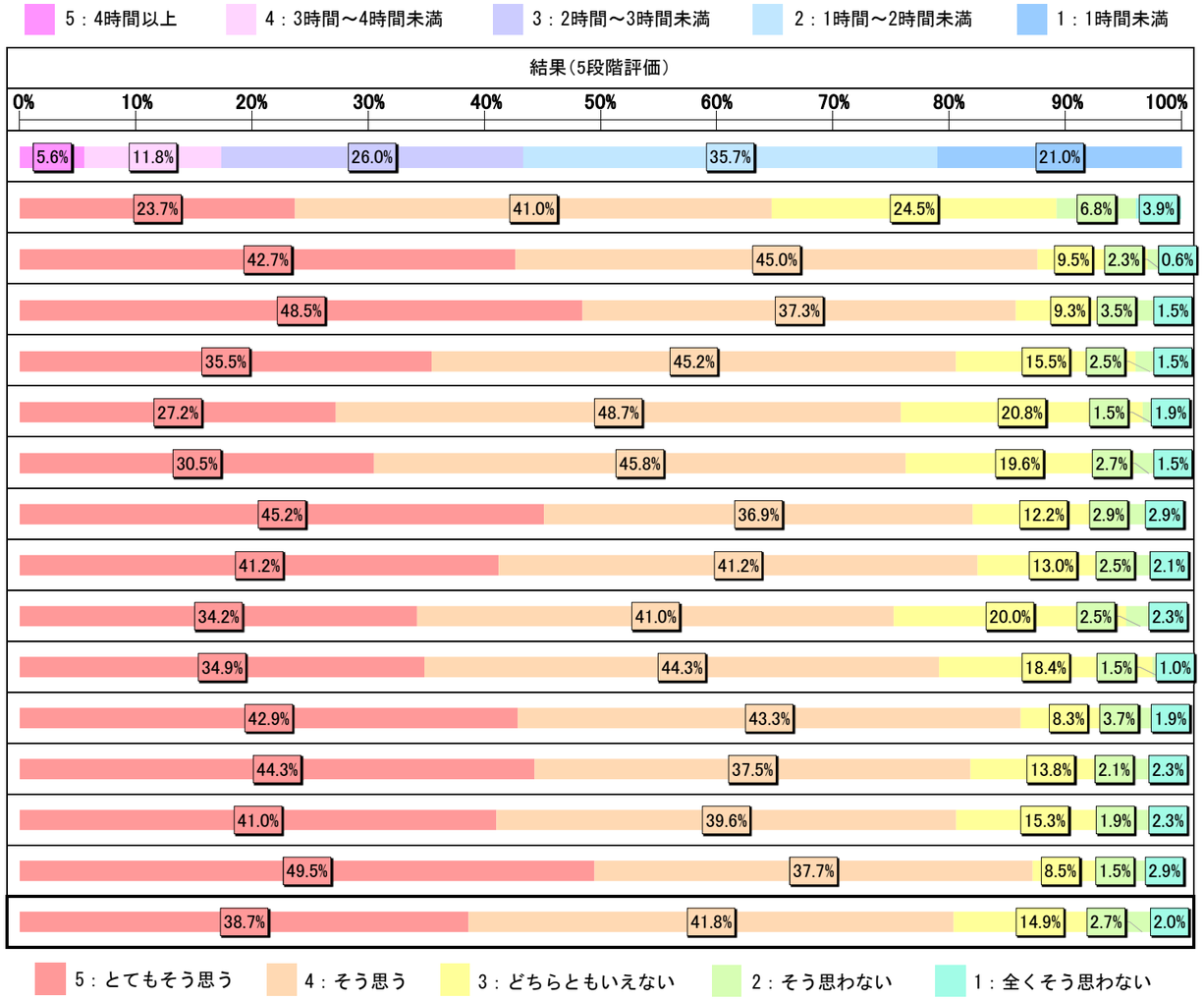


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

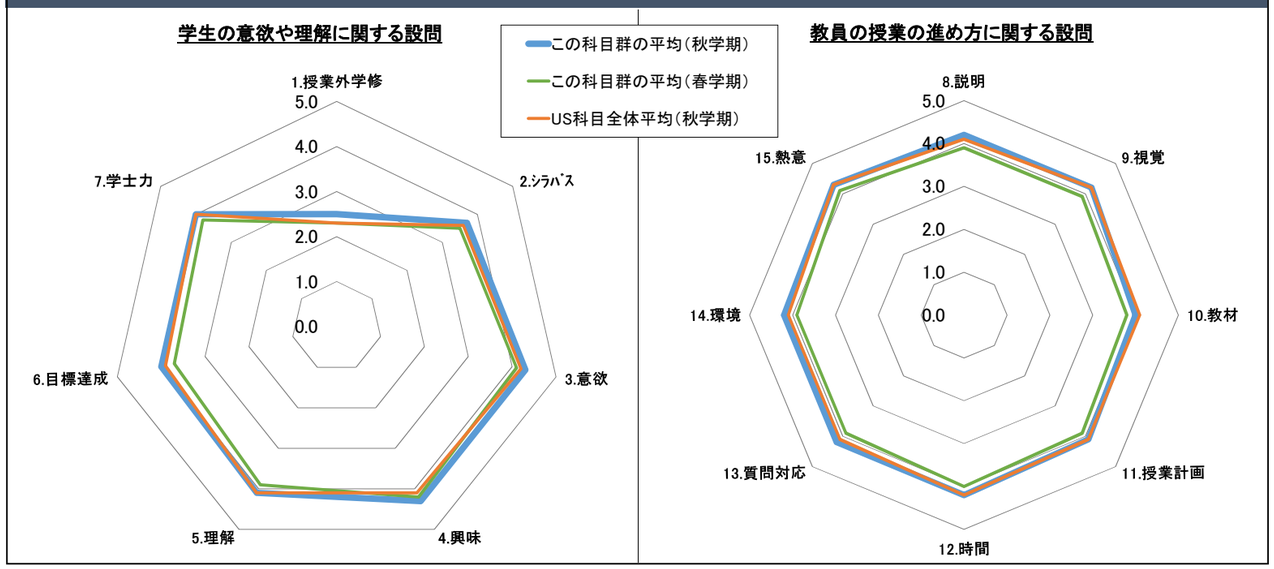
US科目　学際科目群　　履修者数： 1,269 名　　回答者数： 485 名　　回答率： 38.2 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.3
総合評価				4.0	4.0

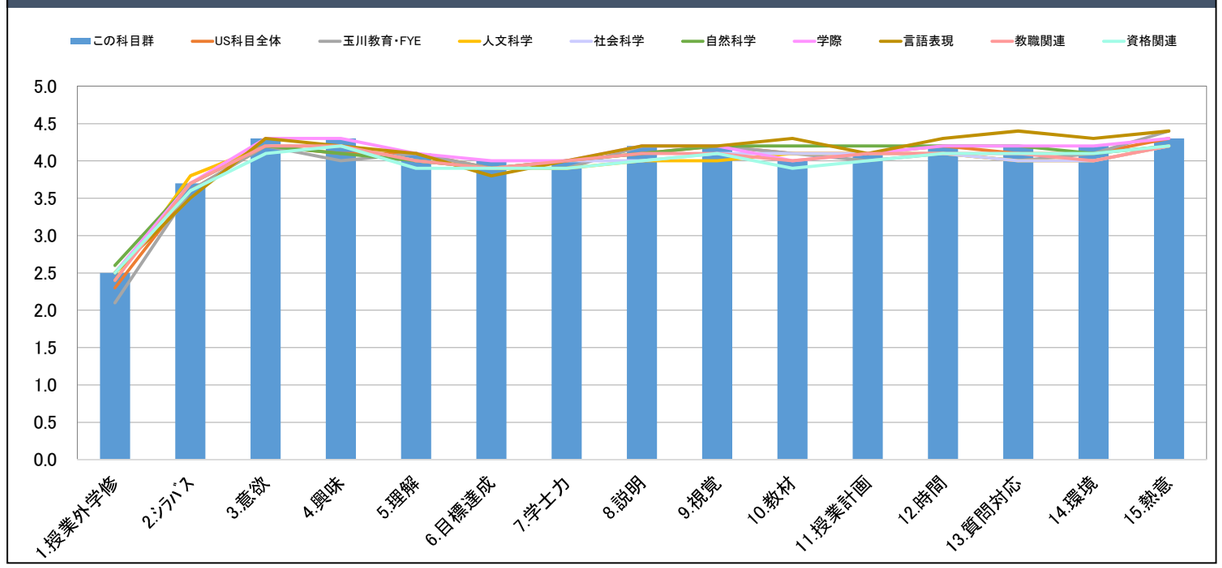
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

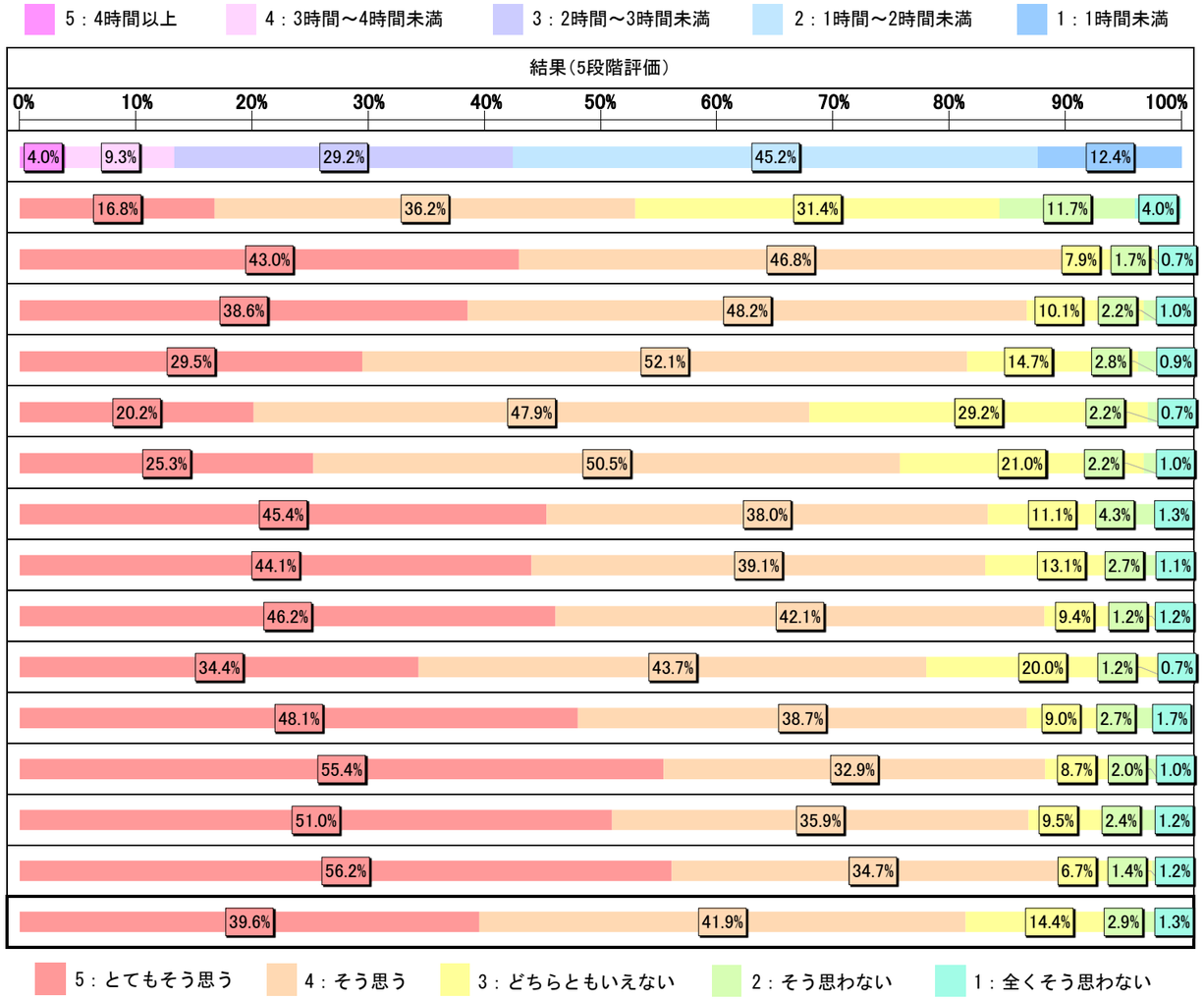


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

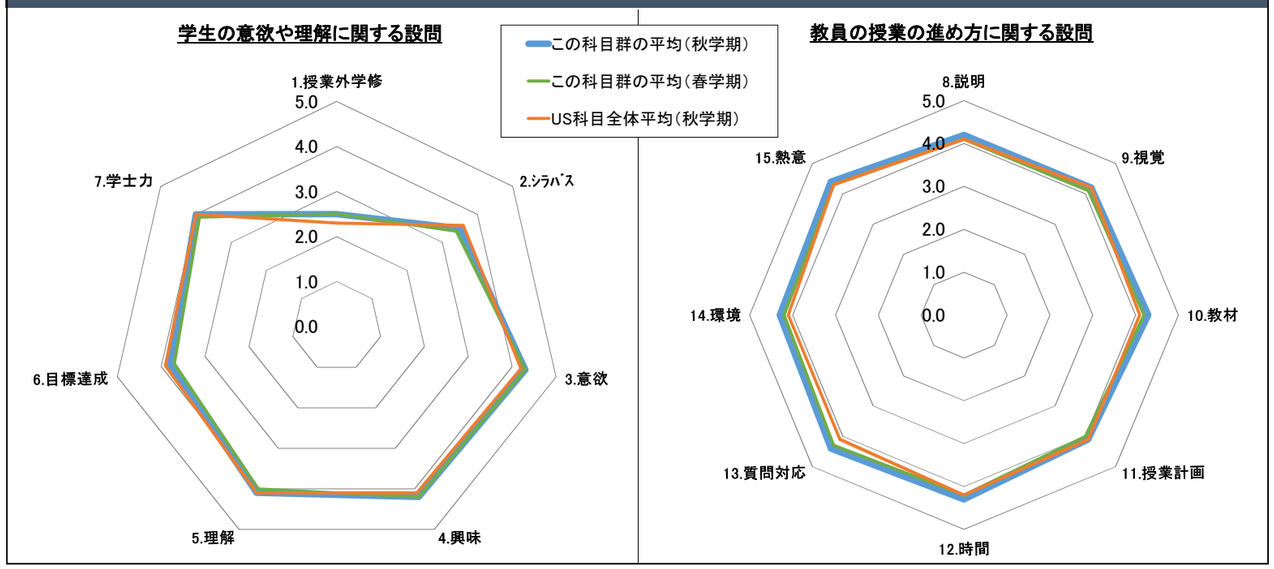
US科目　言語表現科目群　　履修者数： 2,520 名　　回答者数： 1,400 名　　回答率： 55.6 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.8	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.3	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.3
総合評価				4.0	4.0

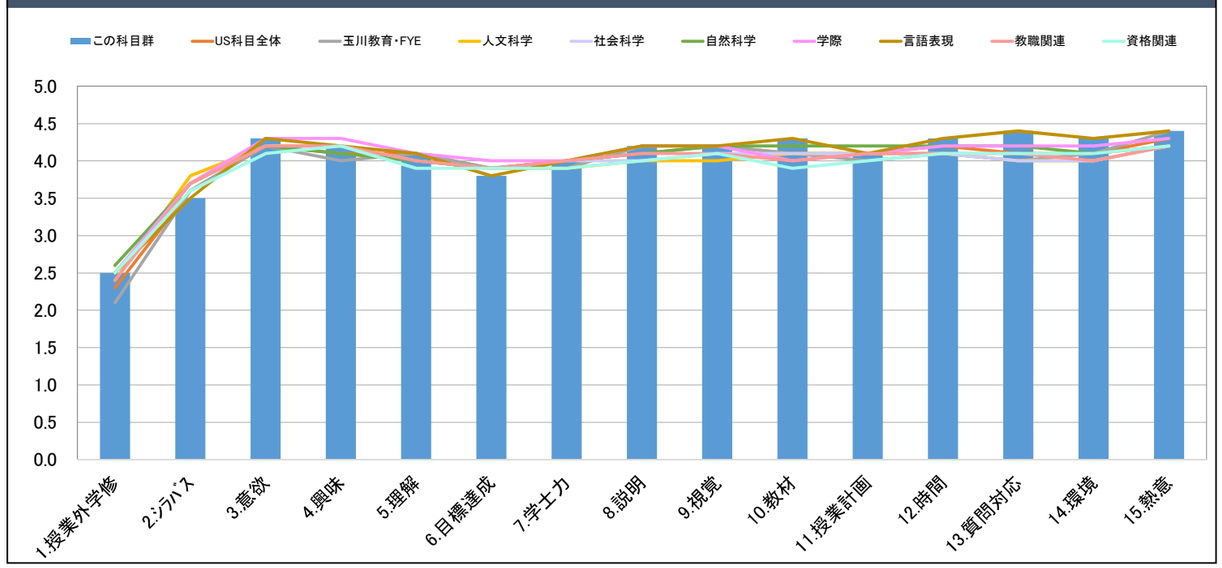
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

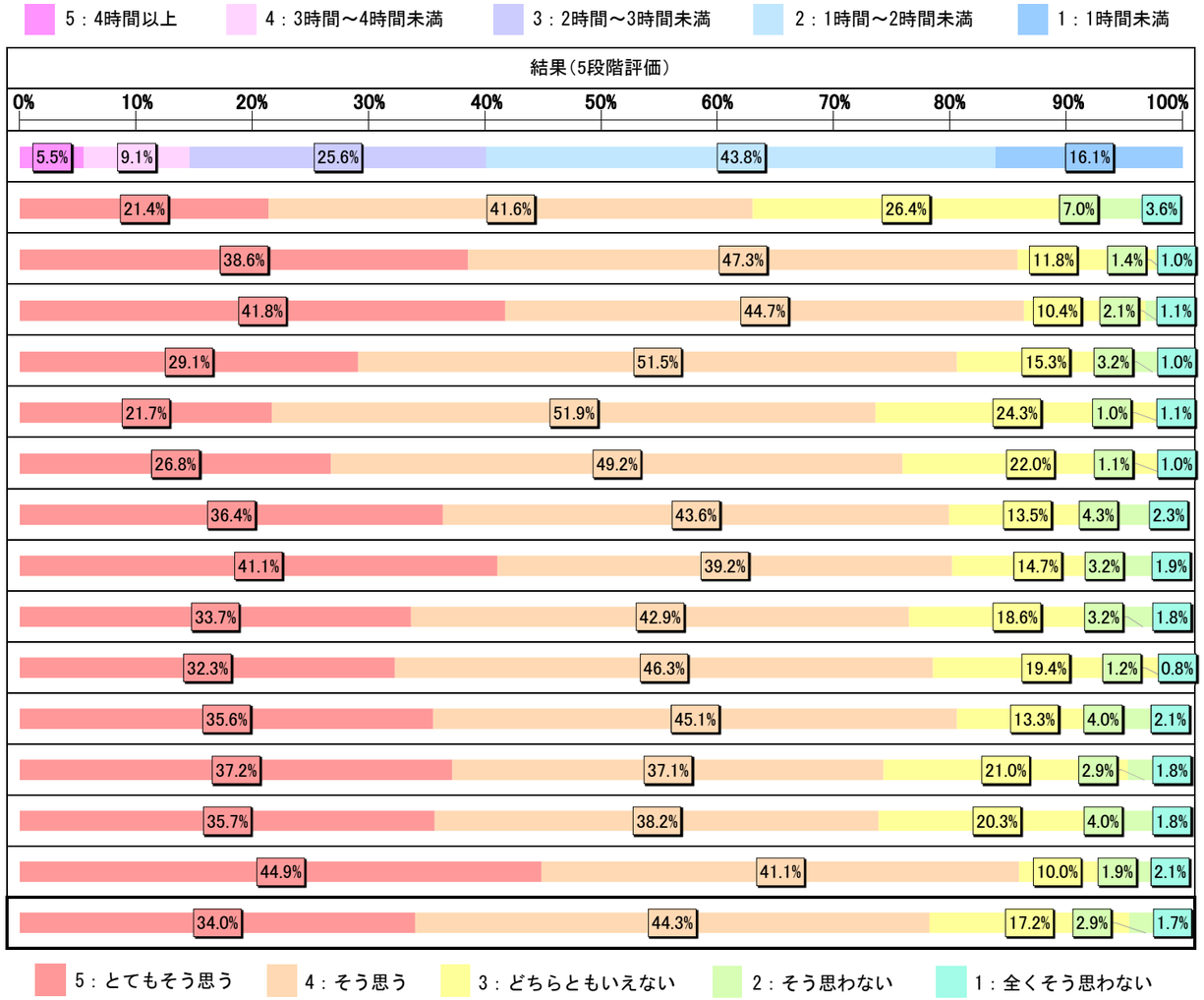


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

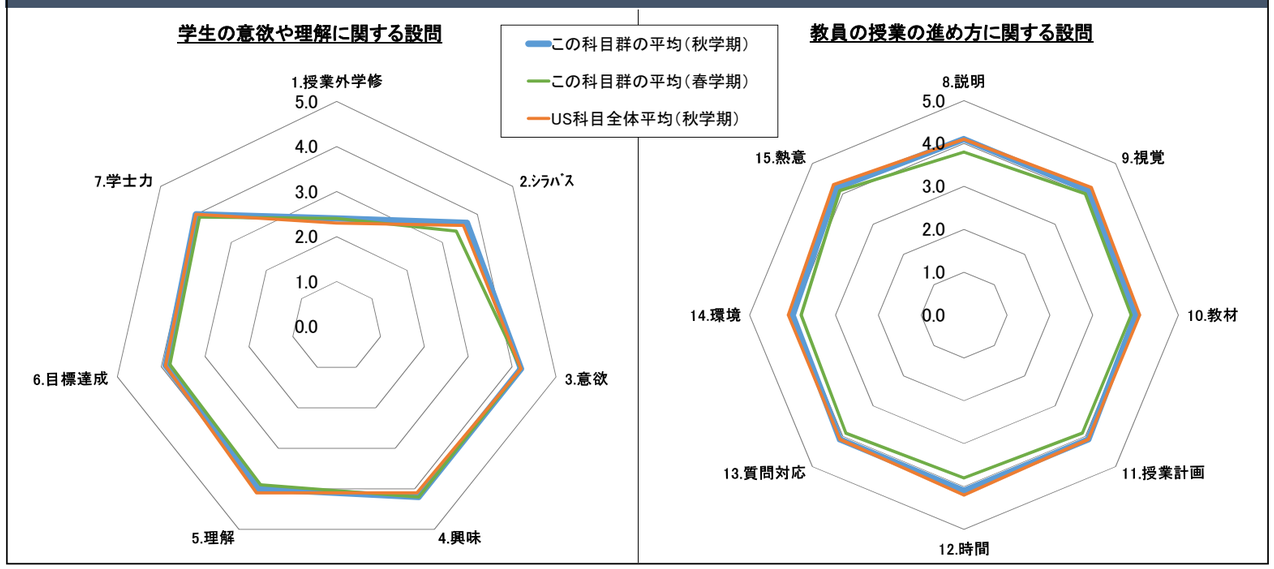
US科目　教職関連科目群　　履修者数：　1,780 名　　回答者数：　728 名　　回答率：　40.9 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.4	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	4.0	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

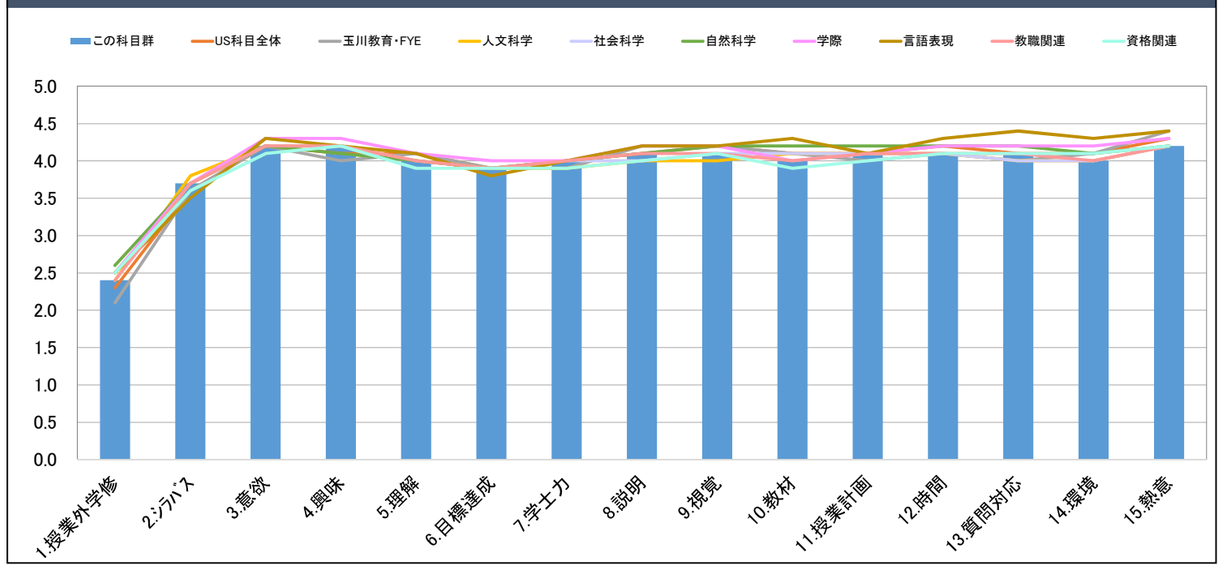
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較

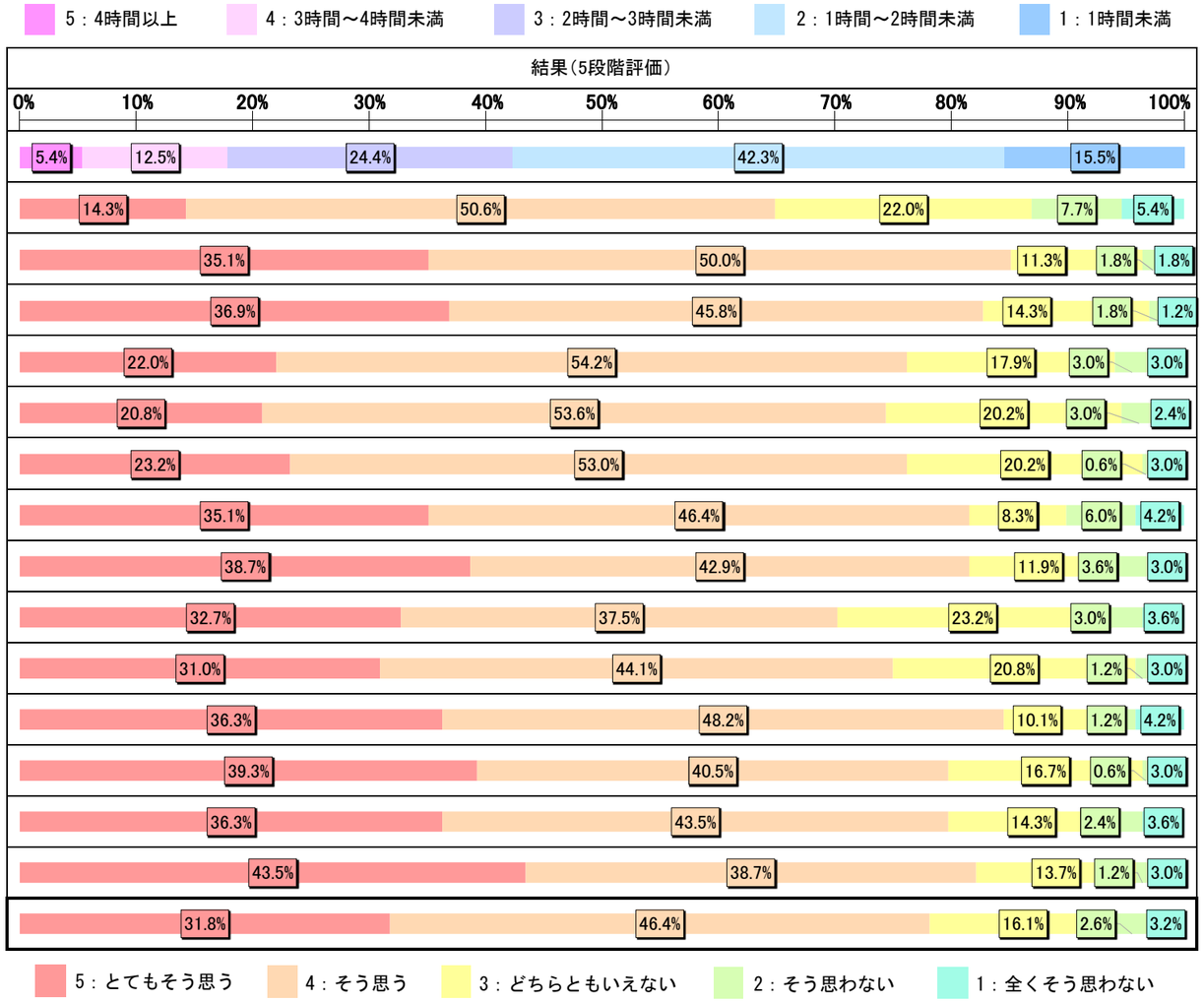


令和2年度　秋学期　学生による授業評価アンケート集計結果　　玉川大学

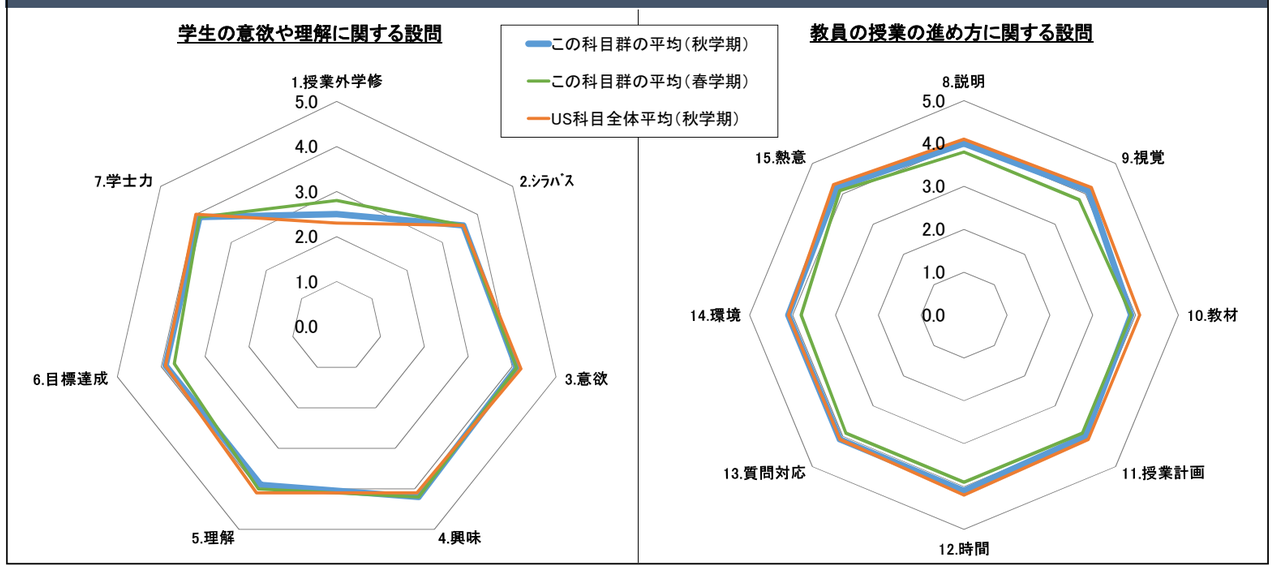
US科目　資格関連科目群　　履修者数：　411 名　　回答者数：　168 名　　回答率：　40.9 %

			設問	科目群平均	US科目全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか	2.5	2.3
	2	ｼﾗﾊﾞｽ	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	3.9	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	3.9
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか ＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.1
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか	3.9	4.1
	11	授業計画	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか	4.0	4.1
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.1	4.2
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.1	4.1
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.1
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.3
総合評価				3.9	4.0

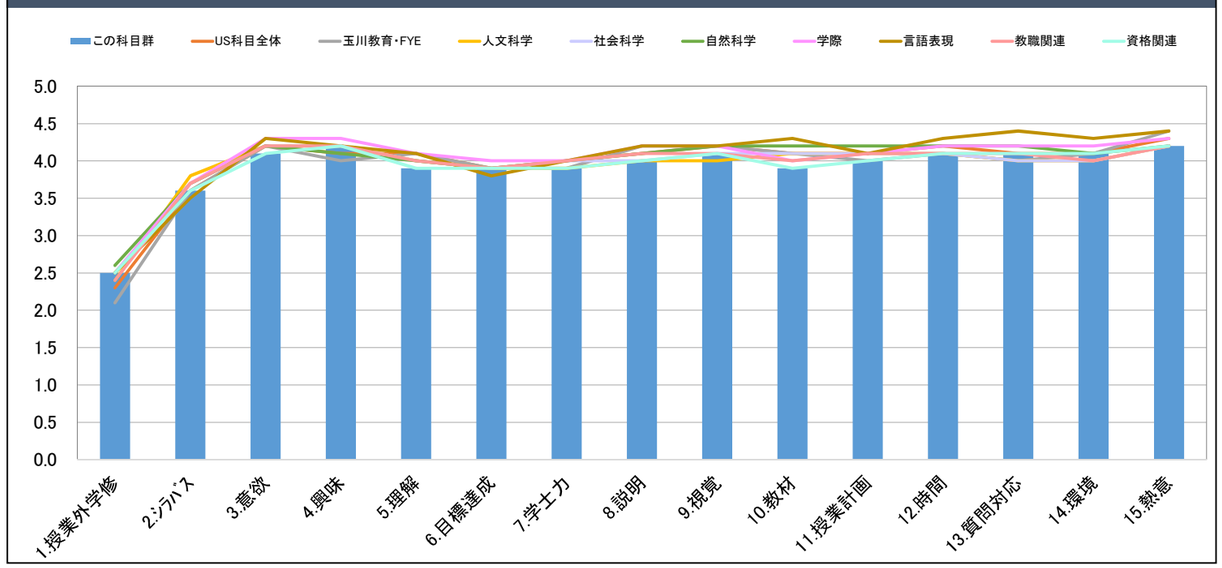
平均値＝（「5」回答数×5 +「4」回答数×4 +「3」回答数×3 +「2」回答数×2 +「1」回答数×1）／ 回答数（小数点第2位を四捨五入）



質問別評価平均レーダーチャート



この科目群・US科目全体・科目群ごとの質問別評価平均の比較



Ⅱ　大学院 FD 活動報告

＜文学研究科＞

（1）講演会・研修会・ワークショップなど

FD 活動計画のとおり、文学研究科の修了生に対して、「大学院での学修はどのように役に立っているか」と題したインタビュー調査を行い、文学研究科のカリキュラム等の改善のための資料を得ることを試みた。人間学専攻の前身となる哲学専攻の修了生 1 名、英語教育専攻の修了生 2 名に対して、Zoom でのインタビューを行った。インタビューの中では、以下のような質問を行った。

・修士課程在籍中には何を学んだと感じているか。
・現在の職業において修士課程での学びが役立っている点はあるか。
・修士課程在籍中に、これは学んでおきたかったという点はあるか。
・修士課程在籍中に、学び以外の点で、この点をサポートしてほしかった、という点はあるか。あるいはサポートがあってよかったという点はあるか。
・職業生活以外で、修士課程での学びが役立っている点はあるか。

文学研究科の教員はインタビューに参加、または、後日録画動画を視聴した後に、次の項目について、各自がレポートを提出した。

・今後の大学院の授業で、新しく取り組みたいことや、より意識していきたいこと
・大学院のカリキュラム改編への案
・入学者を増やすための取り組みの案

今後のカリキュラム等の改善のための取り組み案として、以下のような内容が見られた。

・英語力を向上させるための科目の設置
・文献読解力や問いを発する力を育成するオーソドックスなスタイルの大学院における授業が、教員になっても新たな知見を探求し続け、咀嚼して分かりやすく生徒に伝達していく土台となっていることを再確認できたことから、この基本的訓練を継続
・教員になっても研究を続けられるような実践研究の手法を学ぶ科目の設置
・AI や SDGs など、一般的に話題となっている事柄を学修するための科目の設置
・学部生と大学院生がともに学ぶことができる研究会の設立と、それを行う場所の確保
・500 番台科目の履修条件の緩和
・修了生が TA のような役割で参加できるようにするための夜間開講授業の設置

今後は、これらの改善案を考慮しながら、文学研究科のカリキュラム等の改訂を行っていくとともに、文学研究科の課題を知るために、来年度も同様に修了生に調査を行っていく。

（2）調査・研究など

FD 活動計画のとおり、カリキュラム・授業改善のための基礎データ収集の目的で、修了生へのインタビューを行った。内容については、上記（1）で示したとおりである。

（3）学会発表の成果の検証

FD 活動計画のとおり、学会発表の成果検証として、学会発表後に、学生および指導担当教員が報告書を提出した。令和 2 年度は英語教育専攻の学生が下記の学会・研究会等で発表を行った。

・令和 2 年 8 月　玉川大学英語教育セミナー（2 年生 4 名）
・令和 2 年 11 月　ASIA TEFL（1 年生 1 名、2 年生 1 名）
・令和 3 年 2 月　大学生英語教育論文合同発表会（2 年生 1 名）

これらの報告書からは、以下の課題が挙げられた。

・研究の成果を、短い発表時間（通常 15～20 分）で報告する際に、要点をどのようにまとめるかについて、定期的・継続的な指導が必要である。
・発表後に受ける質問に対して、簡潔に回答するための訓練が必要である。関連して、他者の研究に対して、適切な質問をする訓練をすることも必要である。
・研究の成果を、聞き手に分かりやすく説明をするためには、定期的に発表の機会を設ける必要があることから、中間発表会の機会を複数回設定することなどが必要である。

今後は、これらの課題を踏まえた指導を行っていくとともに、学会発表の報告書を学生と教員が提出することを継続的に行っていきたい。

（4）学生による授業評価アンケート

FD 活動計画のとおり、学生による授業評価アンケートを行った。昨年度は履修者が 4 名以上の授業において授業評価アンケートを行ったが、今年度はすべての授業において実施した。下記のとおり、全授業において、おおむね評価が高かった。「2. この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。」の項目について、平均値が他の項目と比べてやや低いものが散見されるが、履修するすべての科目が、各学生の研究課題と直接関係するわけではないことから、今後、特に改善すべき点として捉える必要はないと考える。履修者が少ない授業、特に履修者が 1 名の授業においては、回答した学生の匿名性が確保されないが、学生からは特にその点の指摘がなかったことから、今後も、すべての科目で同様のアンケートを実施する予定である。また、項目の内容の見直しを行い、必要があれば、新項目を設定するなど、アンケート内容を改良していく予定である。

春学期		ｱｶﾃﾞﾐｯｸ･ﾘﾃﾗｼｰ	思想文化演習	応用倫理学演習	英語教育研究方法論	英語教育研究	現代英語研究	英語授業演習	研究指導Ⅰ
	履修者数	2名	1名	1名	2名	2名	5名	1名	5名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	4.0	4.0	3.5	4.0	3.8	4.0	3.8
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	2.5	3.0	4.0	3.5	3.0	2.4	3.0	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	4.0	4.0	4.0	4.0	3.5	3.0	3.0	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	3.0	3.0	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	4.0	4.0	4.0	3.0	2.6	3.0	4.0

（4 とても当てはまる／3 やや当てはまる／2 あまり当てはまらない／1 まったく当てはまらない）

秋学期		社会行動学研究	言語獲得研究	言語使用研究	入門期英語教育研究	英語教育総合	英語科コースデザイン研究	研究指導Ⅱ
	履修者数	1名	3名	3名	2名	4名	4名	5名
1	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	4.0	4.0
2	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	3.0	4.0	3.0	3.8	3.0	4.0
3	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	4.0	4.0	3.7	3.5	3.5	3.8	4.0
4	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	3.3	4.0	3.0	3.5	3.5	4.0
5	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	3.3	4.0	3.5	3.3	3.0	3.8

（4 とても当てはまる／3 やや当てはまる／2 あまり当てはまらない／1 まったく当てはまらない）

（5）その他（院生に対する研究倫理教育の実施）

昨年度に引き続き、全学生（人間学専攻 1 名・英語教育専攻 6 名）に eL CoRE の受講を義務づけた。年度初めの 4 月中に全学生が受講を終え、受講証明書を提出した。また、学生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL CoRE の学習内容、及び関連学会の研究倫理を参考にしながら、研究倫理チェックリストを作成し、学生に配布した。2 年生は、修士論文の提出の際に、チェックを入れたものを一緒に提出した。提出したリストを教員が確認したところ、すべての学生が適切な手順で研究を行っていた。今後は、研究倫理チェックリストを必要があれば改良し、引き続き、学生に配布した上で、研究を行う際に活用していく予定である。

＜農学研究科＞

活動計画

（1）入学定員充足に向けたオンライン進学説明会の開催
（2）大学院生の研究指導に関する研修会の開催
（3）新任教員による研究発表会「研究談話会」の開催
（4）授業アンケートの実施と授業改善

活動計画（1）入学定員充足に向けたオンライン進学説明会の開催

オンライン形式の進学説明会を 4 回開催した（令和 2 年 7 月 20 日、8 月 17 日、11 月 1 日、令和 3 年 1 月 7 日）。新型コロナウイルス感染拡大によって卒業研究に十分に取り組めないなどの理由から、令和 3 年度の入学試験では受験生の大幅な減少が予想された。そのため、例年 2 回（6 月と 11 月）開催していた進学説明会を、本年度は入試時期に合わせて 7 月以降に 4 回開催した。Zoom によるオンライン形式で実施したが、結果的には各回とも例年以上の進学希望者が集まった。特に第Ⅰ期と第Ⅱ期の入学試験に向けた進学説明会では、学部 4 年生や修士課程 2 年生に加えて学部 1～3 年生も多数参加した。オンライン形式では学生が積極的に質問や相談することができ、学外からの受験生を獲得するためにも、次年度の進学説明会は引き続きオンライン形式で 3～4 回開催する予定である。

活動計画（2）大学院生の研究指導に関する研修会の開催

コロナ禍の下での大学院生に対する研究指導に関して、研修会「新型コロナウイルスの医学的特徴と感染予防」（講師：保健センター健康院長　庭野裕恵教授、令和 2 年 9 月 11 日）を開催した。新型コロナウイルスの基礎知識と感染予防策の解説を受けるとともに、感染拡大のリスクを抑えて対面授業や実験、研究活動を再開するための方策を農学研究科の所属教員で共有した。

一方、学部生だけでなく大学院生にも「心のケア」が必要な学生が増えてきているため、研修会「心のケアの必要な大学院生の指導について」（講師：国立国際医療研究センター病院精神科医師　春口洸希先生、令和 2 年 9 月 17 日）を開催した。心の問題として捉えられる症状、学習障害や発達障害を抱えた学生と教員が向き合う上で考慮すべき点、プライバシー保護・大学（研究科）・医療機関との協力体制のバランス等について、具体的な事例に触れながら指導法や対処法を所属教員で共有した。

活動計画（３）新任教員による研究発表会「研究談話会」の開催

「研究談話会」は新任教員や外部講師による研究発表の場として例年 2～3 回開催してきた。本年度は新型コロナウイルス感染予防のため対面での開催が中止され、新任教員によるオンライン形式の発表会が令和 2 年 11 月 5 日に開催された。農学部環境農学科・友常満利助教による「マングローブ　その生態と機能」と題する研究発表があり、生態系としてのマングローブの機能について興味深い発表が行われた。大学院生も約 15 名が参加し、教員・学生を問わず積極的な質疑応答や意見交換が交わされ、極めて充実した研究発表会を行うことができた。次年度は複数回の開催を目指すが、新型コロナウイルスの感染状況に応じて本年度と同様にオンライン形式での実施も検討する。

活動計画（４）授業アンケートの実施と授業改善

Microsoft Forms を利用した授業アンケートを学期末に実施した。延べ約 50 名から得られた回答を分析した結果、オンライン授業のメリットとデメリットを把握することができた。ほとんどの講義で Zoom や Teams などのオンラインミーティングツールを用いた同時双方向型の授業が行われ、授業時間や授業内容に対する学生の満足度は概ね良好であった。また、授業外の学修に 5 時間以上費やした学生も相当数あり、充実した学修が行われていたことが読み取れた。一授業当たりの受講生数が少ないため批判的な意見は少なかったが、一部の授業については成績評価基準が不明確であるといった意見も出された。次年度は原則として対面授業が行われる予定であるが、本アンケートの結果を研究科所属教員で共有してオンライン授業だけでなく対面授業の改善にも役立てる。

＜工学研究科＞

令和 2 年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習Ⅰ」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした 2 つの FD 研修会を計画に沿って実施した。2 回目の FD 研修会の内容について、実施計画では、「STEAM 人材の育成に求められるもの」を予定していたが、遠隔授業の情報が必要とされていたため、「遠隔授業手法に関する FD 研修」に内容を変更して実施した。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

（１）　大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進

・実施時期：春学期・秋学期

・対象科目：工学研究科の大学院生が受講している全科目

春学期および秋学期において大学院生による授業評価アンケートを実施した。アンケートを遠隔で行うため、Microsoft Office365 の Forms を用いて作成し、全面的に実施した。大学院生には PC やスマートフォンを用いてオンラインで回答を入力してもらい、その回答は匿名性を確保した上で収集した。

各科目の授業評価アンケートの結果は、授業改善に活用してもらうため、授業担当教員にフィードバックした。さらに、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論した後、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告した。

この活動の成果として、授業評価アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの

一連のプロセスを実施することができた。アンケートを遠隔で行ったため、大学院生による回答率がなかなか伸びず、半数程度となった。集計結果を見ると、回答があった授業科目においては特に問題は見出されず、良好であることが確認された。特に、「授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた」という項目では 77%の回答を得ることができ、自主的・発展的な学修が確認された。

次年度も開発したオンライン方式による授業評価アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。さらに、アンケート結果に基づいた授業の改善とその効果の記録については、どのような方法が可能か引き続き検討していく。また、回答率を上げるための工夫を検討する。

（2）「専門演習 I 」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習 I 」は、修士課程 1 年生を対象とし、工学研究科の全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実際的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通した技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

技術発表会は令和 2 年 9 月 17 日（木）にオンライン（Zoom）口頭発表の形式で開催された。大学院生の発表 6 件に対して、教員 19 名、大学院生 13 名の計 32 名の参加者が訪れた。参加した教員および他の学生との間で活発な質疑応答が行われた。科目の実施概要および発表会の審査結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果としては、前年度から引き続き教員だけでなく博士課程の TA（本年度は 2 名）を活用した実習指導を強化したことによって、前年度よりもさらに実際的な課題に取り組んだ質の高い発表内容が多く見られ、研究科全体として継続的に大学院生の実践力強化のための教育方法の改善に努めていくことができた。

次年度も、履修者がより早い時期に具体的なテーマを決めて課題に取り組むように促すため、新入生ガイダンスでの説明や TA による指導を実施し、内容の充実を検討していく。

（3） 大学院教育活動の質向上を目的とした FD 研修会の実施

1) 知的財産権と遠隔授業に関する FD 研修会

テーマ：Zoom による遠隔会議方式「遠隔授業における著作権と情報倫理の取扱」

実施日：令和 2 年 5 月 28 日（木） 18：00～19：00

場所：オンライン（Zoom）

講師：木村 友久 氏（帝京大学 共通教育センター センター長・教授）

工学部との合同で知的財産権と情報倫理の専門家を招き、著作権を侵害せず Blackboard の資料に掲載していい内容など、基本的事項について注意すべき点についての講演会を開催した。工学研究科および工学部の多くの教員が出席した。

成果として、学生に対する教材の SNS 等へのアップロード禁止の指導の徹底などについて学び、遠隔授業で注意する点や身体の疲弊の影響について、大学教員として必要な知識を共有することができた。

2) 遠隔授業手法に関する FD 研修会

テーマ：オンラインで学びが変わる！ ―Zoom+α が創り出す新しい学びの世界―

実施日：令和 2 年 11 月 26 日（木）17：00～18：00
場所：オンライン（Zoom）
講師：平井 聡一郎 氏　（株式会社情報通信総合研究所 特別研究員）
工学部との合同でオンライン授業の専門家を招き、変化する社会に対応するためのこれからの学びの姿を考える講演会を開催した。本講演では、様々なインタラクティブなオンライン授業の手法が紹介された。工学研究科・工学部の多くの教員が出席した。
成果として、教員がオンライン授業の手法や遠隔を共有し、前向きな意識を共有することができた。
次年度への課題としては、出席者の名簿や感想を残していなかったことがあるので、今後の FD 研修会では活動成果を記録として残していく必要がある。また、次年度も FD 活動としてふさわしいテーマの講演会を企画したい。

＜マネジメント研究科＞

（1）コースのカリキュラムや授業改善に関する検証

【報告】

大学院生（本学職員）の声をもとにコースのカリキュラムや授業改善に関する検証を行うため例年、大学院生、教員、人事部スタッフ参加による FD 会（ワークショップ）を実施している。今年度は対面での開催を避けるため、調査研究の一環として、大学院生に対して意見記述型のアンケートによって意見聴取を実施した。

【成果・課題】

経営・会計の知識の取得については得られた成果として挙げられており、課題研究を通じた問題発見や論理展開の能力向上についても実感しているようである。修士 2 年生より科目への希望として、会計科目における基礎部分の充実などが挙げられた。本年度の 1 年生より、会計科目の見直しを行っており、当該要望に応えた科目構成・内容としている。
スクール・マネジメント研究コースの院生は本学職員であるが、特に初年度において業務との両立について苦労したとの意見が多く、3 年制や春夏休暇期間中の活用による履修科目数の平準化も提案として挙がっていた。また、学部の専門が必ずしも経営学ではないため、科目によってキャッチアップに苦戦したとの意見も存在した。
次年度もアンケートの実施や FD 会などの機会を設けて大学院における授業の在り方や指導内容、今後のカリキュラムについて検討したい。

（2）課題研究セミナーⅠ・Ⅱの指導方法検証

【報告】

今年度は 6 名のスクール・マネジメント研究コースの院生が大学院を修了した。学位取得に向けて、課題研究の指導方法に関していくつかの課題を共有した。この課題をどのように解決すべきかを次年度も引き続き共有し、解決の方策を教員間で共有したい。

【成果・課題】

スクール・マネジメント研究コースの院生が課題研究報告書を執筆するにあたり、研究テーマの設定方法や調査設計について関係者間での意思統一の必要性が認められた。課題研究のテーマ、調査設計にあたっては、指導教員・院生に対して検討に際しての留意事項などを明文化

し、必要に応じて研究科長から部署に依頼、調整するなどの手順について周知することも必要である。

（3）大学院生による授業評価アンケートの実施

【報告】

各セメスター終了後に全授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックし、授業改善に役立ててもらった。

【成果・課題】

記述式アンケートの内容をレビューしたところ、授業に対して特別に不満を感じていることはないことを確認した。授業評価アンケートについては、次年度も継続して実施し、大学院生からの要望を把握するために実施したい。

＜教育学研究科＞

（1）【活動計画】研修会（FD 委員会）の開催

・研究科会後に FD 委員会を 7 回開催。（5/13、7/22、9/30、10/28、11/25、1/8、3/11）

【成果・課題】

・授業開講期間中、上記の日程で「授業および研究指導体制の改善について」の研修会（FD 委員会）を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。

（2）【活動計画】授業改善に関する議論。

・「オンライン授業」に関する院生からの中間アンケートをもとに授業改善に関する議論。

【成果・課題】

・春学期・秋学期共にほぼ全面オンラインの授業であったため、従来の「相互授業見学」ができなかった。それゆえまずは 5 月の時点で院生に中間アンケートをとり、院生から示されたオンライン授業の問題点を教員間で共有しその解決を図った。また（5）で記すように、春学期は授業終了時、また秋学期も授業終了時にアンケートを実施した。

（3）【活動計画】各教員のオンライン授業や研究指導における授業工夫内容についての議論。

・春学期に各教員が担当のオンライン授業においてどのような工夫をしているかを文書にて提出。秋学期は「授業工夫」と共に「反省点」を提出。

【成果・課題】

・オンライン「授業工夫・反省点」一覧をもとに研究科会後の FD 委員会にて質疑応答の機会を設け、さらに必要に応じて教員間での意見交換を行った。

（4）【活動計画】修士論文に関する評価基準の検討、実施、問題点の抽出。

・前年度より検討していた評価基準を今年度より実施し、修論審査担当教員よりその問題点を抽出。

【成果・課題】

・修論評価基準に基づく修論審査を実施して、その問題点 3 つを各教員で共有、次年度の改善に活かすことにした。

（5）【活動計画】学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

・春学期、秋学期終了後に授業アンケートの実施及び分析。

【成果・課題】

・今年度はオンライン授業であったためアンケート内容を「授業方法に関する意見・要望」と「大学に関する意見・要望」に分けて分析し、特に後者において顕著であった「図書館の利用制限」については、研究科長・教務担当を通して事務部門に申し入れを行った。

＜教職大学院＞

（1）教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は、6 月 27 日（土）、11 月 28 日（土）の 2 回の日程で実施予定であったが、第 1 回の 6 月 27 日については新型コロナウィルスの影響により実施を中止した。（令和 2 年 5 月 28 日の教職大学院会にて決定）

第 2 回の 11 月 28 日（土）については、予定どおりの期日に Zoom によるオンラインで開催し、次の日程で実施した。

◆11 月 28 日（土） 笠原陽子教授による研究報告
教職大学院 OBOG による実践報告
報告者： 10 期：坪田裕希氏
11 期：池田愛里氏

①成果

11 期の池田愛里氏からは「初任者としての 1 年目」をコロナ禍での経験も踏まえてお話いただいた。難しい環境の中で、教職大学院での学んだことがどのように役立ったかを分かりやすく伝えていただいた。

現職 10 期：坪田裕希氏は、ベテラン教員として現場でも中核的な役割を担っているが、その現在の仕事が、教職大学院で学んだ理論と実践の往還として非常に役立っているということを、実例を交えてご紹介いただいた。

OBOG からの発表の後は、例年通りのグループに分かれてのサークルディスカッションを、Zoom によるブレイクアウトルームの形態で実施した。OBOG からの発表と教授からの発表について、少人数での活発な意見交換が行われた。

笠原教授からは、新型コロナウィルス感染症による一連の学校生活の変化がこれまでの「学校の常識」を大きく変えてきたとして、「学校」という場や、「教師の在り方」がどのように問われているかを、今後の展望も含めて学ぶことができた。with コロナ・ポストコロナ時代の指針となる講義であった。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/info/detail_18123.html

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる

大学院生のつながりを作る場として機能していることが、また本年度も引き続き確認された。近々の課題を交流しあうブレイクルームによるサークルディスカッションも好評であった。

教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高める FD としての効果も引き続きねらっている。

教職大学院 OBOG の実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように活かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教授陣も知ることができる貴重な場となっている。サークルディスカッションにおいても、教職大学院の講義が OBOG たちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することのできる貴重な機会となっている。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

また、OBOG からのアンケートについては、今年から Google フォームを利用して意図的に蓄積していく取り組みを開始した。

②課題

OBOG の参加者がやや少ない点が引き続き課題となっている。今回から開始した Google ドメインによるメール連絡網や、有用リソースの整備等によって、修了した院生とのつながりが保てる工夫をしていくことが必要である。

（2）FD 授業研究について

4 月 30 日と 11 月 5 日の 2 回の授業研究を予定していたが、いずれも今年度は中止とした。

①成果

中止となった代替として、「オンライン授業においてどのようなことを工夫したのか」のレポートを集め、クラウドに蓄積し共有した。次のような項目を始め、多くの情報を共有できた。様々な情報を工夫することによって、教職大学院のオンライン講義の質を高めることに貢献できたと考えている。

① 課題が過重にならないようにする。
② オンラインのミーティングの時間を短くする。
③ 対面に近い言葉遣い、表情を心がける。（対面よりもより楽しさが必要）
④ 資料のやりとりは Google クラスルームを活用。
⑤ 全体としては、対面の方が教育効果があがる。
⑥ グループディスカッションの機会を多くした授業設計をする。
⑦ 講義の録画等の活用。
⑧ 講義資料等の精選。
⑨ 個人情報の扱いに留意する。
⑩ 心理検査の実施等は困難。
（以下略）

②課題

やむを得ないことではあったが、コロナ禍において実施できなかったので、来年度は何らかの形で実施する方法を探る必要がある。

（3）教授に対する調査について

先述したとおり、今年から Google フォームを利用して意図的に蓄積していく取り組みを開始した。FD の一環として、ストレート・マスターや現職教員院生の学修理解等に関する教員の所感を調査している。全教員についての各質問に対する傾向を把握し、昨年度と今年度との比較をしながら、学生の評価が高かった項目と、課題が残る項目とについて検討する予定である。

①成果

例年、ほとんどの項目が 3.6 以上であり、記述式の内容では「全てが満足」「実践に活かせる内容だった」など、肯定的な記述が多い結果となっている。

②課題

一部には改善が必要な指摘もなされているため、シラバス全体の内容と重点の置き方、演習的な講義のあり方等について来年度以降さらに検討し、改善を重ねていくことを共通理解している。

（4）FD 委員会における情報交換

例年、毎月の教職大学院会終了後に FD 委員会を開催している。院生に関する諸問題、指導方針の確認と教授陣間における連携の取り方、教職大学院のカリキュラムや組織のあり方について検討している。今年はオンラインでの情報交換が中心となった。

① 成果

例年、問題をかかえている院生への教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方の基本的な考え方の確認等々について情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができているが、今年は特に大きな問題は見当たらなかった。

②課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

＜脳科学研究科＞

（1） 令和 3 年 2 月 12 日に玉川大学脳科学ワークショップを実施した（オンライン開催)。全大学院生の研究発表に関して、教員全員で評価し、次週の脳科学研究科会において、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。また、同発表内容に関して擬似ピアレビューを開始した。ピアレビューは年度を越えて 5 月中には完了する予定である。

（2）令和元年度に実施した玉川大学総合人間科学ワークショップにおける大学院生の研究発表を元に擬似ピアレビューを実施した（令和 2 年 6 月完了)。その結果を全教員で共有し議論した上で、効果的な研究指導のあり方を検討し、今後の研究指導に反映することを確認した。

（3）研究環境整備に関する需要の調査と整備を行った。令和 2 年度は特に新型コロナウィルスの蔓延防止に伴う活動制限により、新たな環境整備がないか調査し、研究科予算を用いた

環境整備計画にフィードバックした。

（4）履修者が１～2 名である科目が多いため、匿名性を確保するために、研究科全体に対する研究科評価アンケートを実施した。

Ⅲ　教員研修

新任教員研修会

令和3年度採用の新任教員（講師以上）21名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力･連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で19回目の開催となった。

日　　時：令和3年3月18日（木）10:00～16:10
場　　所：大学教育棟 2014　612教室
対　　象：令和3年度採用教員（講師以上）
研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。
　　専任教員としての業務に必要な知識を得る。
到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。
　　専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

（1）研修プログラム内容

10:00	開始／研修説明	教学部 教務課
10:05	新任教員自己紹介	新任教員
10:25	大学教員の勤務について	人事部 人事課
10:45	教学事項について	教学部 教務課・学務課・授業運営課
11:25	学生支援について	渡邊 透 学生支援センター長
11:50	休憩	
11:55	本学の ICT を活用した教育	学生支援センター 学修支援課
12:25	昼食	
13:30	講演「玉川大学の教育理念」	稲葉 興己 高等教育担当理事
14:15	休憩	
14:20	講演「これからの大学教員に必要なこと」	中村 好雄 教学部長
15:25	教学システム（UNITAMA）について	教学部 授業運営課･教務課
15:45	質疑応答	教学部 教務課・人事部 人事課
15:55	各種事務手続き ①写真撮影（キャンパスカード用） ②契約内容の説明等	教学部 教務課・人事部 人事課
16:10	研修会終了	
【動画視聴】	コンプライアンス方針	監査室
	個人情報保護方針	総務部 総務課
	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部 情報基盤システム課
	ハラスメント防止研修	人事部 人事課（顧問弁護士）
【任意研修】	キャンパス・ツアー	3 月 25 日（木）13:00～15:30

（２）配付資料・参考資料

資料	担当
令和 3 年度新任教員研修会＜研修プログラム＞	教学部教務課
令和 3 年度新任教員研修会　名簿	
大学教員の勤務について 看護休暇・介護休暇申出書 出勤簿 私学共済制度　新規加入者向けリーフレット WELBOX 会員に関する案内 身上異動届	人事部人事課
学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要、担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図（令和 3 年 4 月 1 日施行） 教学部の役割（学校法人玉川学園組織事務分掌細則） 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料	教学部教務課
ご着任にあたって 研究室・内線番号 各種事務手続きについて	教学部学務課
令和 3 年度　新任教員研修会　教務事項 令和 3 年度　年間授業計画 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック	教学部授業運営課
学生支援について	学生支援センター
玉川大学における ICT 支援	学生支援センター　学修支援課
教学システム　UNITAMA について －担当授業、教室確認、シラバス、学生ポートフォリオ－ UNITAMA 教員業績について　～目的と操作方法～	教学部　授業運営課・教務課
玉川大学の教育理念	稲葉　興己　玉川学園高等教育担当理事
これからの大学教員に必要なこと	中村　好雄　教学部長

（３）実施の成果

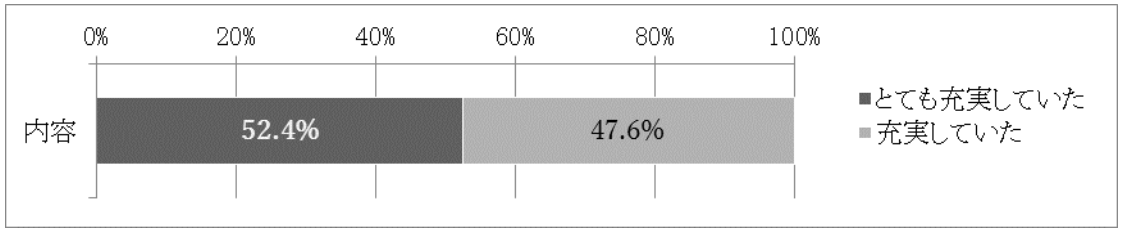
本学における教育について参加者に理解を促すため、2 つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導だけではなく、大学で働く教員に期待されていること、本学で求められる教育が何かを伝えることができた。

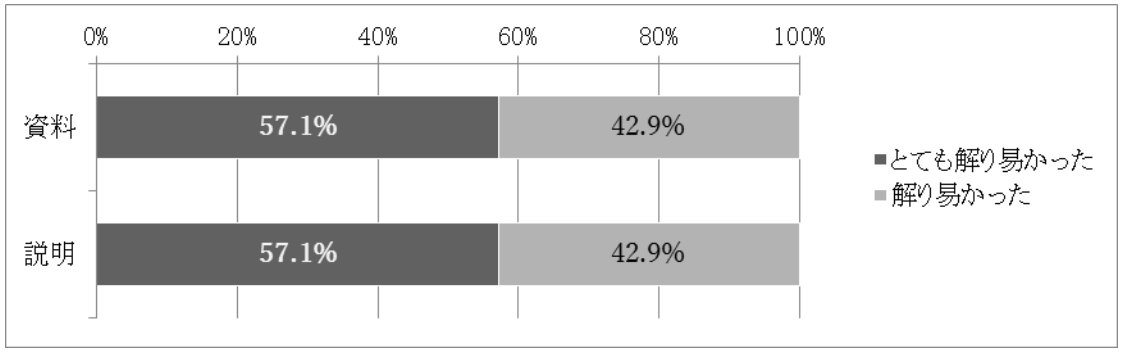
また、監査室による「玉川学園のコンプライアンス方針について」、総務部総務課による「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」、人事部人事課（顧問弁護士）による「ハラスメント防止研修」を動画研修により実施し、教育・研究機関に勤務する教職員としての自覚を促すことができた。

なお、キャンパス・ツアーについては、任意参加の研修であったが、21 名中 14 名の参加があり、約 2 時間をかけて、大学教育棟 2014 や小原記念館、Sci Tech Farm TN Produce（野菜工場）などを巡り、本学の理念や教育に関わる施設への理解を深めた。

受講者から提出された研修受講報告書では、以下のとおり研修内容、資料、説明のすべてについて、肯定回答が 100%であり、参加者のニーズに沿う充実した内容の研修を実施することができたと考えている。

＜研修受講報告書 ―内容、資料、説明について―＞





なお、今回の研修に「参加して良かった点」として挙げられたコメントは、次のとおりである。

① 玉川大学の理念・教育信条・沿革等を学ぶことができ、大変有意義だった。
② 玉川学園の建学精神・教育理念・目的をよく理解できた。勤務や担当業務、学生支援など、業務に関連した説明事項が細分化されていて、内容を理解しやすく勤務への不安が解消された。
③ 各部署の方が、各業務内容の説明にあたられ、的確な業務情報が得られた。資料が充実し、適切な分量でわかりやすくまとめられていた。

④　着任後の申請手続きが分かったため、４月以降の事務手続きなどの予定を具体的に立てることができるようになった。
⑤　玉川学園として組織運営に携わる人材育成に対する考えや思いが、担当の方の話からもひしひしと伝わってきた。有意義な研修だと思う。
⑥　各テーマに応じて、具体的な実際の事例も知ることができた。規程等の説明だけでなく、教職員としてどのような姿勢で臨むべきかといった点についても理解を深めることができた。
⑦　同期となる新任の先生方と共に、玉川学園の教育理念を改めて学ぶことによって、他学部であっても一つのチームであるという意識が芽生え、気持ちの引き締まる有意義な時間となった。
⑧　実例や、動画には含めにくいような貴重な話を伺えたことがよかった。

また、「改善してほしい点」や「その他要望」として、次のようなコメントがあった。
①　オンライン授業を展開する必要がある時期であったため、Blackboard などの大学で使えるオンラインツールに関する講座を受けたかった。
②　研究費使用の重要な点について簡単に説明するセッションを設けていただけるとよい。
③　科研費や外部研究費で購入した物品の移管などに関する情報も簡単に説明があるとよかった。
④　教学システムについては、Notes システムの研修のように動画研修の方が分かりやすいと思うため、動画研修にしていただけるとよかった。
⑤　UNITAMA 教員業績に関して、もう少しお話を伺えると良かった。
⑥　Web システム関連（Notes や Blackboard）の使用について、より詳細な説明を受けたいと感じた。研修時点でログイン等が可能であるならば、受講者も各自のパソコンを使用しながら受講できるとよい。
⑦　現在のような状況（コロナ禍）でなければ、教員同士のコミュニケーションをとる機会があれば情報共有の幅が広がるように感じた。
⑧　全体を通して、各自で手続きが必要となる事項について、いつまでに何をどのように行う必要があるか TODO リスト化されていると分かりやすい。
⑨　時間が短く、理解するまでには至らなかったので、追加で聞く場合の担当部署を明確にしてほしい。

今後に向けての検討課題も挙げられているが、本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。次年度に向けては、改善や要望として挙げられたコメントを踏まえ、より本研修会の質向上に努める。

以上

参 考 資 料

参考資料１．大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 2 年 6 月 4 日（木）17:15～18:30
場 所 ： 大学教育棟 2014 505 教室
議 案 ： (1) 会議日程に関する件
(2) FD 研修会等計画に関する件
(3) 学生による授業評価アンケートの実施に関する件
報 告 ： (1) 遠隔授業における著作権と情報倫理の取扱いについて
(2) 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(3) 「令和元年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(4) 令和元年度大学教育再生加速プログラム事業報告

第 2 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 2 年 7 月 20 日（月）17:15～18:25
場 所 ： 大学教育棟 2014 620 教室
議 案 ： (1) 大学 FD 研修会（案）に関する件
(2) ティーチング・ポートフォリオの作成に関する件
(3) 各学部 FD 研修会等計画に関する件
報 告 ： (1) 学生による授業評価アンケートの実施について
(2) 今年度の授業参観計画について

第 3 回大学 FD 委員会

日 時 ： 令和 3 年 1 月 15 日（金）17:00～17:50
場 所 ： 大学教育棟 2014　793 会議室
議 案 ： (1) 大学教育力研修実施計画に関する件
(2) 新任教員研修会実施計画に関する件
報 告 ： (1) 春学期授業評価アンケート結果および授業改善の取組みについて
(2) FD 研修会「遠隔授業の事例発表」(11 月 28 日)実施報告について
(3) 令和 2 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

第 4 回大学 FD 委員会

日　時　：　令和 3 年 3 月 23 日（火）13:30～14:15
場　所　：　大学教育棟 2014　793 会議室
議　案　：　(1)　授業評価アンケートに関する件
　　(2)　非常勤教員研修会の開催に関する件
報　告　：　(1)　令和 2 年度各学部 FD 活動報告について
　　(2)　令和 2 年度大学教育力研修（2 月 19 日）実施報告について

参考資料２．大学院 FD 委員会の議事内容

第１回大学院 FD 委員会

日 時　：　令和 2 年 7 月 9 日（木）17:15～18:30
場 所　：　大学教育棟 2014 620 教室
議 案　：　(1)　年間会議日程に関する件
　　(2)　FD 研修会等計画に関する件
　　(3)　各研究科 FD 活動計画に関する件
　　(4)　大学院研究科交流会の開催内容に関する件
報 告　：　(1)　令和元年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について
　　(2)　UNITAMA による授業評価アンケートの実施について
　　(3)　資料の掲載方法について

参考資料３．ユニバーシティ・スタンダード科目「授業評価アンケート」様式

123456789 科目A（教員B）

授業評価アンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。
なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

今学期は遠隔による授業となりました。設問により回答しづらい場合は、「どちらともいえない」を選択してください。※1

あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修（予習、復習、課題など）を何時間しましたか （必須）
○ 4時間以上 ○ 3時間～4時間未満 ○ 2時間～3時間未満 ○ 1時間～2時間未満 ○ 1時間未満

2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

3. 授業に意欲的に取り組みましたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

4. 授業の内容に興味は持てましたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

5. 授業の内容を十分に理解できましたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
＊各授業の学士力（授業を通して修得できる力）はシラバスに記載 （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

10. 教材（教科書、プリントなど）の使い方は適切でしたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

11. 授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか （必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

12. 授業時間を有効に使っていましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

13. 質問に適切に対応してくれましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか（必須）
○ とてもそう思う ○ そう思う ○ どちらともいえない ○ そう思わない ○ 全くそう思わない

自由記述欄

その他、意見、感想等を記述してください【100字以内】
（授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業評価と直接関連しない意見や誹謗中傷は控えてください）

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。
なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

回答

※1 秋学期は以下の通り文章を変更した。

秋学期は、遠隔授業を中心に一部を対面授業(ハイブリッド)で実施しました。設問により回答しづらい場合は、「どちらともいえない」を選択してください。

参考資料４．玉川大学 FD 委員会規程

（平成 15 年４月１日　制定）
（平成 21 年４月１日　改正）
（平成 31 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長は教学部長とする。
３　委員は、各学部のＦＤ担当があたる。
４　委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
５　委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
６　本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
７　前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　部会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）
第６条　各分科会は、ＦＤ担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。
２　各分科会にはＦＤ活動を円滑に進めるため、ＦＤｅｒ（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「ＦＤｅｒ」）を置く。ＦＤｅｒはＦＤ担当が兼ねることができる。

（答申）
第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）
第８条　前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。
（実施事項の運用）
第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
（事務主管）
第10条　　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則
この規程は、平成 15 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 21 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 31 年４月１日から施行する。

参考資料５．玉川大学大学院 FD 委員会規程

（平成 19 年４月１日　制定）
（平成 29 年４月１日　改正）

（目的）
第１条　玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
（組織）
第２条　本委員会は、委員長並びに委員、アドバイザー及び事務担当をもって構成する。
２　前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
３　学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
４　本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。
５　前項による分科会のまとめ役は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。
（任期）
第３条　委員の任期は１か年とする。ただし、再任を妨げない。
（運営）
第４条　本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
２　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。
（審議事項）
第５条　本委員会は、次の事項を審議する。
（１）　教育研究活動改善の方策に関する事項
（２）　初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
（３）　学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
（４）　ＦＤに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
（５）　教員のＦＤ活動の指針に関する冊子及びＦＤ活動報告書の刊行
（６）　分科会からの報告・審議に関する事項
（７）　その他ＦＤに関連する事項
（分科会）
第６条　各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。
（答申）
第７条　委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）
第８条　前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。
（実施事項の運用）
第９条　前条により決定した実施事項に関する実際的運用に関しては、研究科会及び教育研究

活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
（事務主管）
第 10 条　本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附　則
この規程は、平成 19 年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成 29 年４月１日から施行する。

令和 2 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学　大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会
令和 3 年 6 月　発行
〒194-8610　東京都町田市玉川学園 6-1-1